

2



0005281-000

312.22-H142g

現代支那の政治機構とその構成  
分子

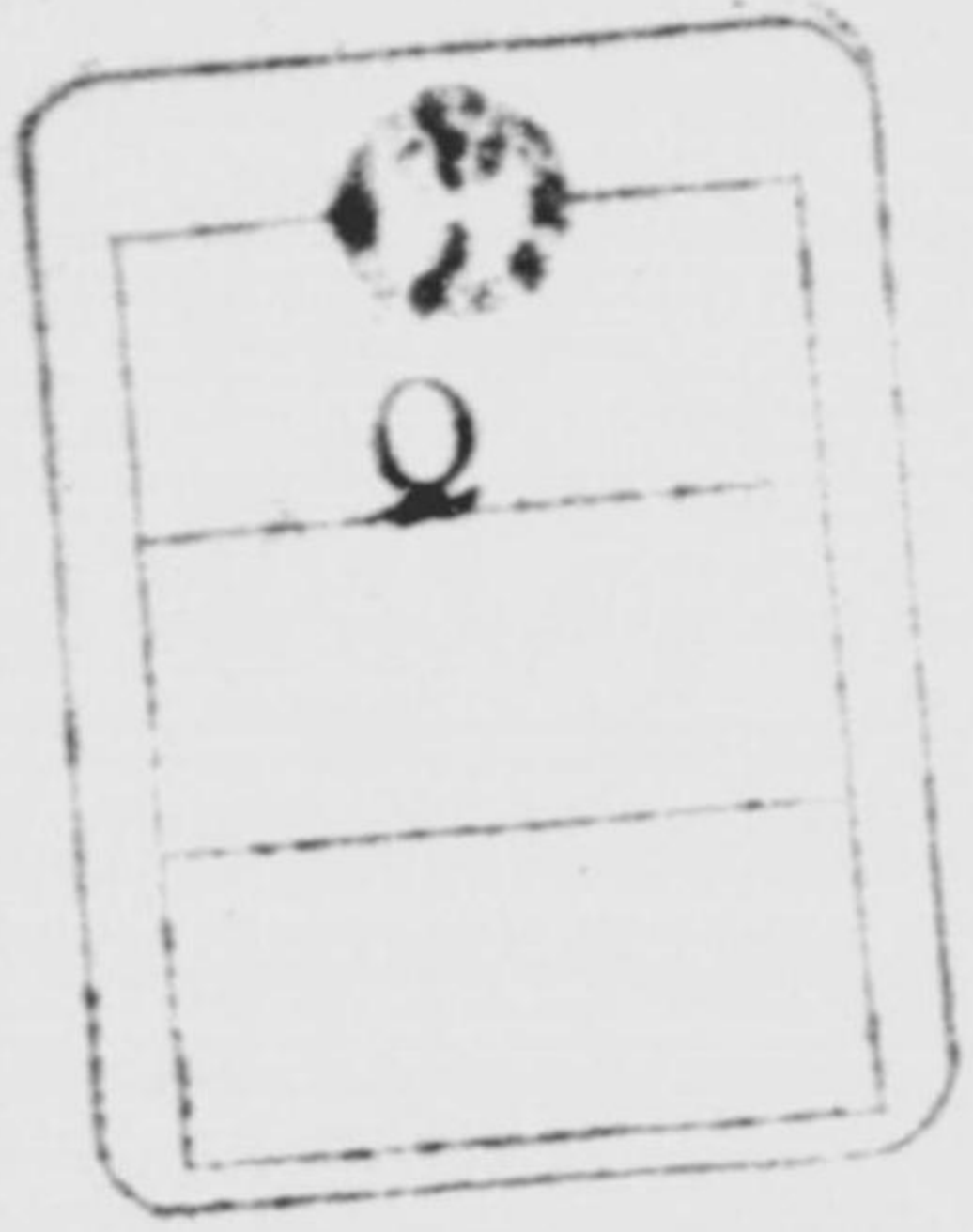
浜田峰太郎・著

学芸社

1936

ABC

この著作物は、著作権者不明のため、著作権法  
第67条の規定に基づき、平成12年3月23  
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもので



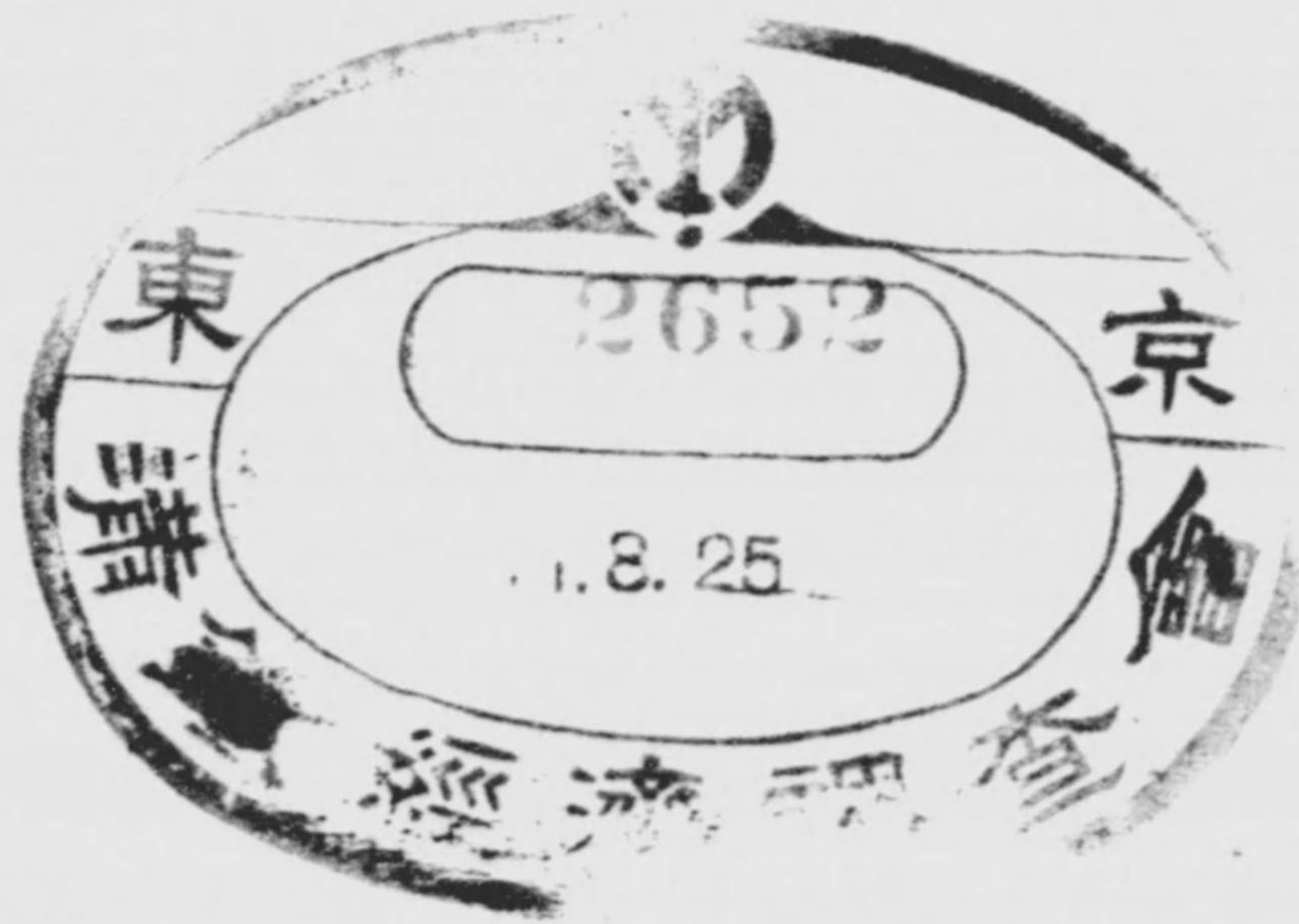
濱田峰太郎著

現代支那の政治機構とその構成分子

學藝社版

312.22

H142g



115532

## 自序

大多数の日本の人々の支那観及び支那に要望するところは、大體に於いて次の數項を出でぬものゝやうである。

(一)東洋平和確立の礎石を置くと共に眞剣な態度を以て支那百年の大計を決定すべく、全支那が小嫌を捨て、大局から自國更生への政策を樹立することに努力せよ。(二)試みに二十年來の支那を見れば擾亂に擾亂を加へ、紛糾に紛糾を重ね政權を爭奪し、「以夷制夷」の小術數を以て支那自身に災ひせることは如何ばかりであつたらう。殆ど政治形態をなさざる政治の下に苦しめる無數の人民を見るならば、苟しくも要路に立つものは、西南といはず、西北といはず悉く和衷協同して眞に意義ある政治を行はねばならぬ。小術數の爲無意義なる運動等ごとくして、國家を糜爛さすべき秋ではない。(三)現在の支那は全力を内政に傾注し經世済民の要圖を畫策するためには絶好の機會に臨んでゐる。要はたゞ支那當路者が毅然たる態度を以て今日の大勢を善導し、四億の人民を安定せしむることにあるが、現在の當路者に果してその力がある

であらうか。

但しこゝに謂ふところの争奪を捨て、全支に亘る和衷協同を基礎とせる有意義の政治とは、これを具體的に言ひ現はすとき、果して何を意味するのであらうか、甚だしく曖昧模糊たるを免れないのであるが、それは専ら完全なる民主政治の實現と、民主政治の實現の下に於ける全國的の統一とを指してゐるらしいことだけは肯けるのである。

この意味に於いて支那に於ける一部の輿論も亦、民主政治の樹立と、夫れによる自國更生への百年の大計を樹立したいとの要望を絶叫してゐることを否めない。

即ち支那の更生を主張し、支那の發展を希望する一般的理論は、先進國の踏んで來た民主政治の樹立と、民主政治が齎らすところの資本主義的發達に俟つところあらんとする點にその基調をおいてゐるものゝやうである。

世間には斯うした一般的支那觀、またはそれを根據とした支那論が横行する。これらを「通俗支那觀」または「常識的支那論」と呼んで好いだらう。

x

x

x

然しながら現實の支那はこの種の「通俗支那觀」または「常識的支那論」をもつて律することを得ざる程度に複雑且つ錯雜を極めてゐる。

謂ふまでもなく、政治は經濟集中の表現である。經濟問題を離れて政治がなく、經濟集中の現段階を度外視してその國の政治的趨向は到底これを解釋出來ない。

ヴァルガの解説するが如く「單純なる再生産を基礎として、その中に許多の封建的要素が含まれ前期資本主義社會に屬する」——支那社會の經濟的機構は、これを平面的に區分するとき、それが一種の地域的經濟であり、國民經濟の體系をなしてゐないところにその特徴をもつてゐる。このことは次に列擧するが如く、

(一)各地に於ける貨幣制度若くは貨幣價値の不同(國民政府の幣制改革後貨幣制度の統一が行はれたと雖も實際的には尙ほ貨幣制度が分散的であることを免れない)(二)各地に各地の度量衡が存在し、(三)各地に於ける風俗習慣は勿論言語をすら異にしてをり、(四)實際上各地に一種の關稅壁すら設けられてある。

等々の諸事項がこれを證明してゐるのであり、特に地域的經濟の常態としては、全國が經濟的に連鎖結合して一體となり得ない點にその特質が表現されてゐる。その結果國民の間には依然一

種の種族思想、部落觀念が横流し、而かもそれが支那民族をして統一した一個の民族たらしむることを不可能ならしめてゐる。

各省に於ける同郷會の形態が、これらの思想の表現であると共に、國民に民族意識の鮮明を缺く結果、政治上に於いては容易に軍事的統治者の乗するところとなり、その割據的現象を呈さしめた唯一の要因でもあつた。

民國以降の所謂「直隸派」「安徽派」等すべてこの同郷を基礎とし、同郷の力を糾合しつゝ、政治上に於ける權利の爭奪に熱中せしめた所以は、以上の消息を物語る歴史的事實であつた。

地域的經濟がそのまゝの形態をもつてしては、絶對的に近代資本主義化への進展を示現し得ないと共に、更に地域的經濟の特質は、國際經濟の一環としての支那經濟の占むる地位と相關聯するところ絶大である。

支那が國際資本帝國主義の作用のまゝに半植民地の域にまで沈淪しながら、國際資本帝國主義の支配下に於いて結局半植民地社會の經濟的機構を形成するに至つた所以が、支那の統治をして完全な民主政治の形態を過程せしめ得なかつたことも亦特筆せなければならぬ。即ちヴァルガの

謂ふが如く――

「支那の社會制度は現在前期資本主義の制度から資本主義の制度に繼續轉換せんとしつゝある。但しこの轉換の過程は土民自身の發展によつたものでなく、國際資本帝國主義の下に於いて進行したものであつた。従つて支那社會の資本主義への轉換に際しては、支那をして同時に外國資本の下に屈服せしめ、資本帝國主義列強の植民地に轉換せしめた――」

からであつた。勢ひ支那の社會は一面には封建的色彩が頗る濃厚であると共に、一面に於いて急激に銀行資本の發達を促した。と同時に民族産業資本の蓄積が極めて微々たるものであつた。而かもこの種の銀行資本は、専ら國際資本帝國主義によつて造成され、斯くて支那には買辦階級による支配と、國際資本帝國主義の間接的統治とを受けつゝ、半植民特有の社會の經濟的機構と、それを基調とする政治形態とを產生するに至つたのである。

支那の社會乃至その經濟的機構若くは統治の現狀を斯くの如く推論して行くとき、支那現實の客觀的情勢のなかゝら、到底完全な民主政治が生れ得ないといふ理由は自ら判明するのである。

斯くの如くにして支那には資産階級の民主主義革命が行はれ得なかつた必然の經過として、そこには特定された一種の類型的國家が生れなければならぬ運命にあつた。

この特殊の形態こそ支那現實の姿相であり、そこからいろんな問題が派生する。支那問題の謎は先づこの特殊形態を分析し、これをハッキリと捕足することによつてのみよりよく解し得るのである。

x

x

x

地域的經濟の特質、封建勢力の殘存、國際資本帝國主義とこれらの殘存封建勢力との關係等々は、支那の政治形態のうちに、一種の地方的統治勢力（地方軍閥）を形成せしめつゝあることは周知の通りである。

就中支那が南支と、長江一帯を中心とする中部支那と、黄河以北の北支とが、各々支那を繞る國際資本帝國主義の經濟的勢力關係と、天然的地域的經濟との關係とによつて、大別され、南支に於ける西南派、北支に於ける北支派及び西北派と中部支那に於ける中央政府派とに分たれてゐる。而してこの間にあつて中央政府は全國の政治的統一、完全なる中央集權を達成せんとして極力努力しつゝあるのに對し他の二派はそれら中央政府の努力を阻止せんとする態度に出でゝること周知の如くである。この場合中央政府としては、全國の經濟的統一——地域經濟の完全なる除去——が行はれない限り、全國の政治的統一、中央集權の實現は到底至難であることを免れ

ない。況んや各地方に於ける列強資本帝國主義の勢力關係がその背後にあつて強烈に作用しつゝあるに於いてをやである。

x

x

x

支那に於ける統治形態の本質と、政局の情勢とを斯く認識することによつて、統治形態上に於ける軍閥の存在、乃至その地域的支配權力を形成しつゝある事實、及び中央支配權力の全國統一に向つての努力並びにその獨裁強化、若くは中央政權の獨裁強化に對する地方勢力の抗争、乃至小資産階級の響應等々の諸姿相も亦、如實の統治形態上に於ける必至的の動向であると謂ふことを肯定し得るであらう。

本書は斯うした角度から現代支那を再認識したい要求のために稿を起したことをお断りして置く。終りに望み本書の起稿に對して直接間接に著者を支援された先輩知己及びその出版に犠牲的援助を與へられた學藝社廣田義夫氏等に謹んで謝意を表する次第である。

昭和十一年七月

上海出版社編輯室にて

著者謹識

『現代支那の政治機構とその構成分子』目次

自序	一
第一章 まへがき	一九
第一節 統治階級の性質	二五
(A) 封建勢力の統治權上に於ける優勢	二七
(B) 資産階級の統治權上に於ける附庸的地位	三〇
(C) 國際資本帝國主義の支那統治權上の地位	三五
第二節 支那の軍閥ファツシヨ化の特徴	三七
(A) 世界ファツシヨと支那	三七
(B) 政治形態から見た支那のファツシヨ化	四〇
(C) 行動・文化の二方面から見た支那のファツシヨ化	四六
(D) 支那軍事ファツシヨの特徴	四八
第三節 支那政局に於ける各派系	五三
第二章 中央派の形成とその發展及び構成分子	五六
——蔣介石	五六
第一節 實力派	六七
(A) 黃浦系の分子	六九



(B) 保定系の分子

楊陳胡蔣	.....	七二
繼宗鼎	.....	七一
虎承南文	.....	七〇

(C) 舊四軍系の分子

陳楊黃錢蔣陳賀衛	.....	七二
伯大慕	.....	七一
立耀	.....	七〇
煌組儀誠鈞松杰誠	.....	七〇

(D) 舊部系の分子

何顧劉楊朱張王谷陳張	.....	七九
祝應	.....	七八
同欽	.....	七八
時城	.....	七九
良德	.....	七八
中齡	.....	七八
伯治	.....	七八
培紹	.....	七八
朱紹	.....	七八
張培	.....	七八
王伯	.....	七八
谷正	.....	七八
陳調	.....	七八
張貞	.....	七八

(E) 東北系分子

孫龍王陳王程劉	.....	九二
連	.....	九一
均雲	.....	九〇
寬	.....	八九
功	.....	八八
潛	.....	八七
華	.....	八六

(F) 湖北系の分子

子學柱福似王王	.....	九五
忠國麟哲	.....	九四
翰	.....	九三

(G) 準中央系の各分子

何成源	.....	九二
徐	.....	九一
夏	.....	九〇
寅	.....	八九

(H) その他歸順組の各分子

唐生	.....	八八
何健	.....	八七
馬達	.....	八六
劉建	.....	八五
張發	.....	八四
鄧家	.....	八三
陳雲	.....	八二
許崇	.....	八一

第二節 文

(A) C・C團とその分子

劉熊張陳李李	烈	福	克	治	派	夫	夫	亞	藩	塘	雷	甫	英	放	慧	展	先	剛	珊	海	一	五	有	子	群	奕	杰	
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二

(B) 考試院系の分子

葉徐劉奏柳朱焦吳苗王	法	培	忠	易	霧	亞	煥	文	恩	楚	會	島	章	子	青	堂	信	成	勤	
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九	四九

(C) 元老派とその分子

張邵戴	天	元	默	君	冲	仇	暉	江	曾	振	正	汾	森	繼	培	持
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三	五三

(D) 政學會系の分子

張楊	永	泰	群
.....	.....	.....	.....
七四	七四	七四	七四

(E) 新官僚派及び歸順組とその分子 ..... 一七六

王 正 廷 鄂 ..... 一七八

吳 鐵 城 ..... 一八一

朱 家 驊 ..... 一八二

(F) 財政系とその分子 ..... 一八四

孔 祥 熙 ..... 一八七

宋 子 文 ..... 一八八

第三節 藍衣社の正體とその構成分子 ..... 一九〇

第三章 西南派の形成とその發展及び構成分子 ..... 一九七

第一節 廣東系 ..... 二〇八

(A) 實力派の分子 ..... 二一一

陳 濟 棠 ..... 二一三

李 培 漢 ..... 二一五

鄧 龍 光 ..... 二一五

李 楊 敬 光 ..... 二一六

余 漢 屏 ..... 二一七

香 翰 屏 ..... 二一七

(B) 文 治 派 ..... 二一八

胡 漢 民 ..... 二一八

鄒 魯 ..... 二二八

齋 佛 世 紹 庶 成 ..... 二二四

唐 儀 堪 ..... 二二五

何 植 儀 ..... 二二五

陳 融 ..... 二二六

劉 隱 融 ..... 二二六

黃 季 慶 ..... 二二七

劉 文 陸 ..... 二二七

林 紀 文 ..... 二二八

劉 雲 文 ..... 二二八

崔 廣 雲 ..... 二二九

李 綺 秀 ..... 二二九

楊 燕 秀 ..... 二二九

詹 燕 秀 ..... 二二九

羅 似 續 ..... 二二九

李 似 續 ..... 二二九

王 龍 文 ..... 二二九

林 翼 龍 ..... 二二九

區 翼 龍 ..... 二二九

陳 嘉 芳 ..... 二二九

黃 嘉 芳 ..... 二二九

陸 麟 嘉 ..... 二二九

程 天 幼 ..... 二二九

(A) 廣東系分子 ..... 二三五

陳 公 博 ..... 二三五

(B) 非廣東系分子 ..... 二六五

顧 孟 餘 ..... 二六五

(C) 荷包派の分子 ..... 二六八

陳 璧 君 ..... 二六九

(D) 會仲鳴……………二六九

第二節 廣西系……………二二六

李巨宗……………二四三  
李崇宗……………二四五  
李任品……………二四六  
張旭定……………二四七  
張初璠……………二四七  
張本初……………二四八

第四章 汪精衛派及び太子派の形成とその構成分子……………二五〇

第一節 汪精衛派……………二五〇

第二節 太子派……………二七四

孫梁寒……………二七六  
梁超寒……………二八四  
馬維俊……………二八五  
劉熾芳……………二八五  
王瀨芳……………二八六

第五章 舊馮玉祥系及び山西派の形成とその構成分子……………二八八

第一節 舊馮玉祥系……………二九三

(A) 韓復榘とその一派……………三〇四

(B) 宋哲元とその一派……………三〇七

(C) 龐炳勳とその一派……………三一〇

(D) 元老派の分子……………三一三

第二節 山西派……………三二五

閻錫山……………三二八  
徐永昌……………三三〇  
楊愛源……………三三二  
趙作義……………三三三  
趙戴文……………三三三  
趙不霖……………三三三  
趙汝廉……………三三三

第六章 反國民黨各派の陣容とその構成分子……………三三二

  第一節 生産黨派……………三三八

    (A) 社會民主々義派……………三四一

    (B) 第三黨……………三四四

  第二節 舊十九路軍系……………三四九

    陳銘樞……………三五三

    蔣光鼎……………三五四

    蔡廷楷……………三五五

  第三節 文化陣に於ける各派……………三五六

    宋慶齡……………三六五

    (A) 在野派の分子……………三五八

      黃炎培……………三五八

    (B) 人權派……………三六〇

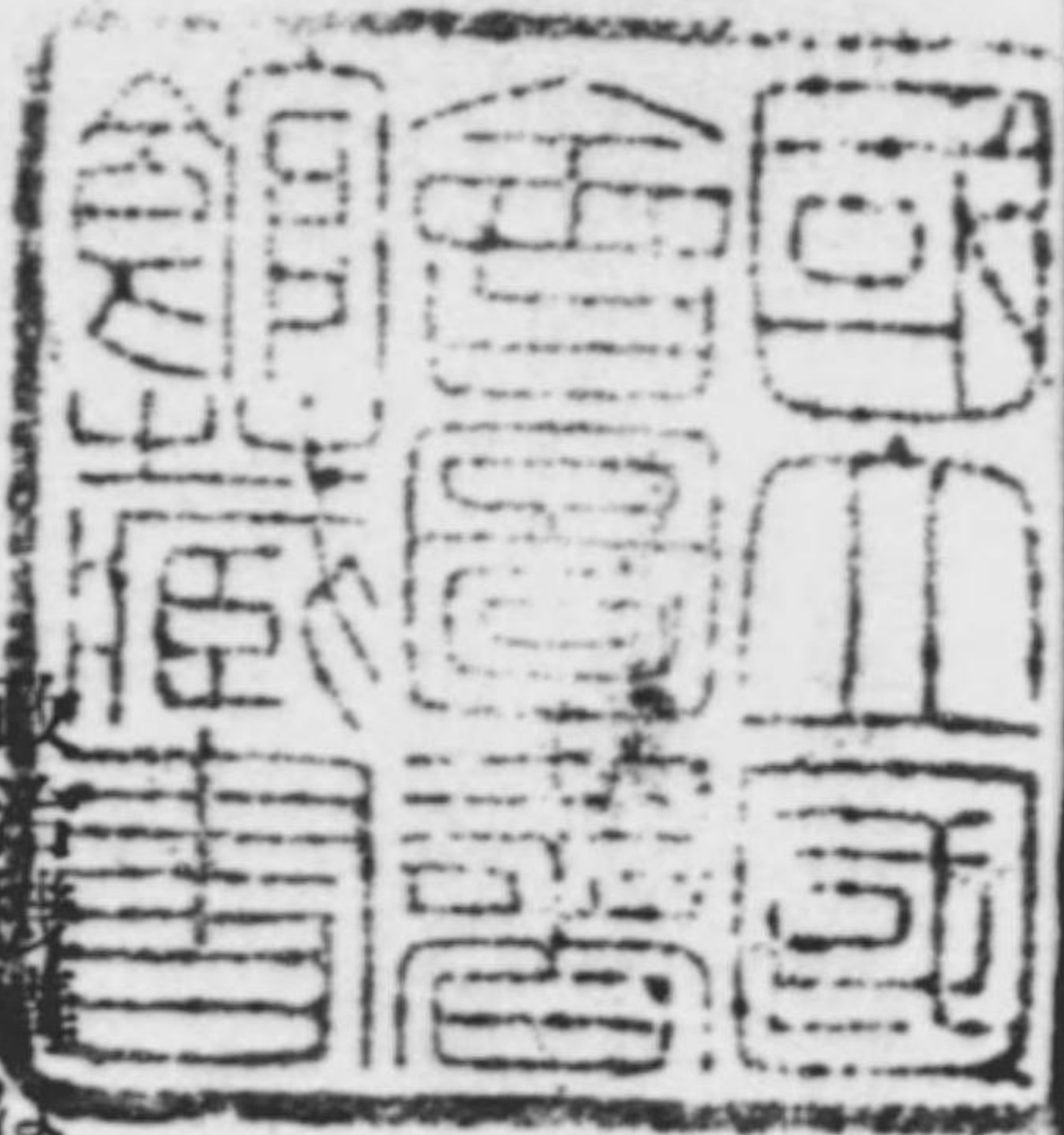
      胡適……………三六〇

    (C) 墮落派の分子……………三六三

  第四節 國家主義派……………三六一

第七章 むすび——憲政問題を遶る中央派と各派——……………三六七

〔目次完〕



### 第一章 まへがき

この時代は時代の經濟關係に依據しつゝ、その方式を改めるのを常とする。斯かる場合の經濟關係は専ら生産關係がその基礎におかれる。

支那は戰國時代に於いて農業の發達により、商業資本を産生した。而して商業資本の發達に伴ひ典型的の封建政治を分解するに至つた。しかし乍ら斯うした商業資本は單なる交換作用を有したに止つたため、その當然の結果として僅に消極的の分解作用を齎したに過ぎず、積極的にそこに一つの新しい政治的形態を樹立することさへ出来なかつた。

その結果支那の封建政治は、秦以後に於いて畸形的の發達をなし、王權專制を形成した。この時代に於ける中心支持者は「士大夫」であり、その政治形態は、當然「士大夫的官僚政治」であつた。

従つて秦以後、阿片戦争以前に至るまでの政治形態を支持した理論は儒家の學說を中心となした夫れであつた。

阿片戦争以來、國際資本が支那に侵入し乍ら、支那市場をしてこれらの工業資本のために開放せしむべくこれを餘儀なくされるに至つた。

勢ひ支那はこれらの國際資本の統治の下に於いて、民族資本を樹立し、民主政治の基礎を樹立する力をすら喪つて了つたのであつた。

その自然の経過として國內に於ける固有の商業資本は却つて國際金融資本の下に孕育せられ、以て支那の産業資本を支配し、永久に民族資本を形成するの可能をなからしめた。

他の一面に於いて國際資本は國內の封建勢力を扶植し、官僚政治の姿態を以て、政治舞臺を築き上げ、そこに歐米列強をして長期割據せしむる基礎を作つたのである。

斯くの如くにして支那の政治は、袁世凱の帝稱以後、安徽派、直隸派、奉天派等の統治を経過し、一九二五年より二七年の大革命に至つたと雖も、實質的には軍閥統治の下に於いて名義上民主政治の招牌を掲げたのみ、本質的には依然封建勢力が代表する官僚政治——清朝以前の政治形

態と何んの異るところもなかつたのである。

かうした時期に於いて——歐洲大戦中——支那に於ける民族工業が多少の發展を來たした。然し乍らそれとても遂に民族資本主義を形成するまでに達せなかつたのは勿論で、その反面に於いて二つの特質をすら產生するに至つた。

その一つは高度化的歐米資本主義と支那の官僚政治との結合を深めたこと、他の一つは高度化的國際資本主義と支那に於ける買辦資本家階級との結合を深めたことであつた。

そもく高度化的歐米資本主義の支那に對する主要な目的は經濟的侵略であり、永久に經濟的侵略への局面を維持せんとすることにあつた。その結果は益々支那に於ける民族資本の樹立を不能ならしめた。

のみでなく高度化的歐米資本主義は、代表封建勢力の官僚系統を扶養することにより漁夫の利を占め得た。官僚政治は農業手工業的經濟機構の上に立つてゐるために官僚政治家は支那の民主主義化を望まない結果、益々高度化的歐米資本主義との相結合を深めたのであつた。

そこに當然列強の高度化的資本主義對官僚系統との結合が深化して行つたのである。

支那に於ける商業資本は、國際商品の吸収により、將た又統治權力の苛捐雜税を以てする搾取が更に都市の買辦資産階級の手に集中しつゝ愈よその大をなした。

官僚政治の經濟的源泉は、農村の搾取に依據し、搾取した所得は直接間接に銀行に集中して買辦資本を形成した。従つて買辦資本家は漸を追うてその資本的勢力の擴大を繼續したのである。

斯うした因果關係は、期せずして官僚統治の持續を要求したのみならず、官僚階級と買辦階級との因縁を深めたのは謂ふまでもない。

大體以上の如き経緯に基き支那は經濟關係上に於いて歐米の高度化的資本主義の支配下に於ける半封建社會を形成し、政治形態上に於いては歐米資本帝國主義の支配下に於ける買辦階級と、官僚階級との統治の域を脱し得なかつたのである。

爾來一九二八年後、三民主義に基く國民革命の達成につれて、中國々民黨により全國統一工作の完成と共に、

(一) 軍事上に於ける相當程度の統制

(一) 支那の主權の或る程度までの回收。

(二) 國內封建勢力の掃蕩と民族運動への障礙の除去。

等々、幾分面目の一新を劃し得たといへ、所謂三民主義を目標とする民族資本主義革命すらが達成し得なかつたのである。

即ち次に列擧するが如く

(一) 支那民族は歐米資本主義の壓迫の下に獨立自主運動の完成すら不能に終つた。

(二) 支那の政治は官僚政治を肅清して集權的中央政府を樹立しつゝ全國の統御をすらなし得なかつた。

(三) 支那の經濟は高度化的國際資本の統治の下に半封建的經濟狀態から解放されなかつた。而かも國家の權力統制の方式は民族經濟を發展して民族資本を樹立し得なかつた。等々の特性が、依然としてそこに横はつてゐるのである。

これが半植民地支那の現實的姿相なのであり、更らに半植民地社會の經濟機構の齋らす特徴としては、

(一) 國內農村經濟の破局。

- (一) 都市經濟の畸形的發展。
- (二) 銀行資本の跛行的集中、産業資本増員の阻止。
- (三) 農村經濟を中心とする國民經濟の混亂。
- (四) 全國の經濟の窮乏。
- (五) 財政の極度の逼迫。

等々を深化せしめ、加ふるに經濟の没落が政治的紛擾に反映し乍ら、一面共產黨の跳梁と軍閥の割據、國際的には支那を繞る列強資本帝國主義の對立と、歐米資本帝國主義の支那に對する侵略の鋭化とが、所謂支那邊疆の分割を實現せしめ、半植民地支那をして、徐々に植民地への域に沈淪せしめやうとすらしてゐるのである。

而かも斯うした客觀情勢は、一面に於いて支那の統治形態をして必然的に獨裁化へのコースに趨らせしめねば熄まなかつた。

ここに支那政治機構と政治形態の特質があつた。

### 第一節 統治階級の性質

支那の統治階級を解剖し、統治階級が如何なる性質であるかを認識せんとするには、先づ、支那の經濟組織を分析せなければならぬ。

而して支那の經濟組織に對する分析の結果は、各々その立場を異にするに従ひ異説が多く、大體に是を資本主義社會説、封建性社會説、前期資本主義的社會説等に大別出来るのであるが、本稿では専ら次の理論を承認し乍ら夫れを基調として考察を進めて行きたい。

- (一) 支那現在の經濟組織は資本主義制度である。
- (二) 但しそれは一つの變體的前段階的資本主義(國際資本帝國主義的統治の半植民地の特徵)であり、先進資本主義國の資本主義と異なつてゐる。
- (三) それがために支那の社會は一つの變體的社會であり、下層の基礎よりこれを見るときは既に資本主義的社會を形成してゐると雖も、上層建築物よりこれを見るならば、それが又封建勢力の社會の如きものである。

支那の經濟制度を以上の如く分析解剖した結果、その組織を次のやうに



(一) 支那に於いては資本主義が既に相當の發展を示現しつつある。従つて當然資産階級も亦派生するに至つた。然るに支那の資本主義の工業資本には、外國資本が大多數を占め、勢ひ民族資産階級の力は著しく微弱であることを免れない。延いて支那資産階級には獨立して支那を統治すべき能力が有り得ない。唯他の階級と聯盟してのみ支那を統治し得る。この場合支那には封建勢力が甚だしく濃厚である。故に封建勢力と聯盟せざるを得なかつた。

(二) 又支那資本主義の成分には國際資本主義が大部分を占めてゐるがため、支那の資産階級は單に封建勢力と聯盟せざるを得なかつたのみでなく、同時に資本帝國主義の支配を受けなければならなかつた。斯うして始めて支那を統治し得たのである。

斯くの如くにして支那の統治階級は甚だしく複雑であり、決して單一的ではなかつた。

x

x

x

もとより社會制度の進化と共に、その社會を構成する階級は漸次單純化されるものである。即ち資本主義制度の社會に於いては資産階級の時代であつて一個の特色をもつてゐる。

それは社會の階級は漸次對壘的の二大陣營に分裂し、相互に敵視せる二大階級が形成せられる。これが資産階級と無産階級とである。

斯くの如くにして社會の階級は、以前には頗る複雑であつた。然るに資産階級の社會に到達して漸次簡單な敵視の二つの階級を發生せしめたのであつた。

x

x

x

支那の現在は過渡期であり、今や實質的に封建社會から資本主義社會に過渡せんとしつつある。

而かも斯うした過渡期に於いて限りなく濃厚なる封建勢力が残存し勢ひその上層建築も亦一個單獨の資産階級の統治政權ではあり得なかつた。

かといつてそれが單獨の封建勢力の統治政權でもなかつた。

事實上封建勢力と資産階級との二つの階級の聯盟政權となつた。従つて半植民地關係を兼ねつつ、國際資本帝國主義の統治を受くるに至るのも亦歴史的必然であつた。

### (A) 封建勢力の統治權上に於ける優勢

「多くの支那社會史論では、支那の封建勢力を否認し唯封建殘餘が存在するに過ぎぬと稱してゐるが、事實上よりこれを見ると、上層建築物中にあつては、獨り封建勢力が存在するのみ

でなく、既に封建制度を形成したのと異なるところのない情態を示してゐる。四川省の如き嚴然幾多の獨立國家をなし、一切の軍民財政等は、すべて各獨立し乍ら、統一不能となつて居り、常に地盤を争ふことにより流血の戦争を演出しつつあつた。單に四川省が封建制度を復活したのみでなく、その他各省に於ける軍閥的割據も亦封建的雛形である。封建制度の上層建築物の特徴は世襲特權にあつた。現在各軍閥の割據を見ると、これを封建制度と呼ばずして何んと稱すべきであらうか。支那現在の軍閥の擁するところの軍隊は、一種の利戰的團體であると謂つて差支がない。即ち農村に於ける過剩人口を利用した傭兵制度、募兵制度は、支那封建軍閥貴族の制度を促成するものであつた。更にまた支那現在に於ける軍閥の家族と親戚朋友は適確に官職につく絶對の特權をもつてゐた。一軍閥の家族親戚朋友は、高官大位につき又は要職に居らざるものなく、軍閥部下の高官大位は軍閥の家族、親戚、朋友でないのではない。同時に軍閥の家族親戚朋友は嚴然として特權的貴族となり、社會上政治上常に特別の地位を占め、特權の權利を受け、免税、免役は勿論、民刑の處罰を免れ、免費を以て國家の交通工具を利用し、國家は彼等のこの種の特權を認可するのを當然のこととした。これは封建時代の現象と制度とであり、支那の現在は單に封建勢力を具存するのみでなく、同時に封建制度すら再建するに至

つた。吾等が若し封建制度より軍閥の性質を説明しなかつたならば、軍閥の性質を了解することが出来ない。」

以上は支那に於ける急進的社會史論者の説く軍閥論の一節であるが、支那現在の統治階級に於ける封建的勢力は或る角度からこれを見ると、既に變體的の封建制度を復活せしむるに至つたと稱して好い。

即ち現在支那に於いて復活せる封建勢力と封建制度とは、軍閥の存在とその再建とによつて表現されてゐるのである。而かも支那の再建された軍閥は依然として地主階級を代表してゐる。地主の土地所有權は資本主義的性質によつて構成され、自然農村資産階級に屬すると雖も、支那農村の上層建築物、政治、法律、風俗習慣及び一切の意識形態は、すべて封建的性質に富むがため、これらの農村資産階級は常に軍閥に同意し、そして軍閥と結んだ。

資本主義社會に於いては獨り經濟上農村が都市から統御されるのみでなく、政治上に於いても農村資産階級が常に都市資産階級から統御される。然るに支那の都市資産階級の能力が薄弱であり、絶えず、封建軍閥の支配を受くることを免れない結果、農村資産階級を統御する能力さへな

く、ために農村の地主資産階級は常に直接封建軍閥の支配を受けつつある。地主と農村資産階級の農村支配は、更に一縣の官僚が地主と農村資産階級を支配し、次いで軍閥がこれらの官僚を支配してゐる。かうした形態が封建勢力形成の一つの完全な系統である。

尙ほ且つ軍閥の農村搾取も亦完全に一種の封建的搾取であると謂ひ得る。

x

x

x

支那現在の自作農も亦中央政治の統一不能と、政權把持者の新軍閥化とのために農民の保護不能となり、農民が土匪等の騷擾によつて該地の軍閥、團閥の保護を求むる結果、軍閥、團閥に頗る高い保護税を納めねばならぬことになる。これによつて農民の土地は形式上所有者自身の支配するところとなつてゐるが、實際上軍閥、團閥の所有に等しく、故に封建軍閥は支那の大地主であり、農民はその租借人の資格で、勞役と納税の形式で自己の土地を耕種してゐると何んの異るところもない。ここに支那軍閥の封建的性質を證明する幾多の事實が横はつてをり、封建勢力の統治權上に於ける優勢力があらゆる方面に展開されつつある。

### (B) 資産階級の統治權上に於ける附庸的地位

資産階級の統治形態は代議制度により表明されてゐる。この定律によつて支那の政治形態の史的經過を観察すると、一九二二年の支那には第一次の正式國會を有してゐた。ここに於いて支那資産階級は始めて統治上の舞臺に出場し、政權を支配するに至つたのである。

然しながら當時の實際政權を解剖するに依然封建軍閥たる袁世凱の掌中であり、完全に國會の支配を受けなかつた。従つてこれを稱して資産階級と封建階級との聯盟の政權と謂はねばならなかつた。即ち決して資産階級單獨の政權ではなく、且つそれが頗る短時間であり、一年未滿で封建勢力は遂にその國會をすら解散して了つたのであつた。

x

x

x

爾來封建勢力による單獨の統治が十餘年に及んだ。而して一九二七年以來國民黨支配の南京政權が出現したのである。然るにその後數年來、依然、正式の國會がなかつた。その間一度國民會議を舉行したとは謂へ、その代表はみな軍閥の走狗であり、正に國民の意志を代表したものでなかつた。同時にその會議も亦僅々十數日で、政府側の出席者が半數に及び、主席及び秘書はすべて政府からこれを指名した。斯くの如き會議は會議がないのと同然、政治上には毫も影響が發生しなかつた。

勢ひ最近幾年間の國民黨統治も亦、その形態に於いて資産階級の統治でないのみでなく、本質的にも決して資産階級の統治ではあり得なかつたのである。

x

x

x

以上の形態を素直にこれを批評するとき、軍閥聯盟の支配的政權であり、國民黨の單獨支配すらが一日もなかつたと謂ふべきである。換言すれば資産階級と封建階級聯盟の政權であつた。

x

x

x

「國民黨は最初の發生の時各種の複雑な社會階級を包含してゐた。初めて發生した資産階級（主として華僑）は小資産階級の知識分子、工人（海員の如く）、破産的農民、失業せる群衆等を包含してゐた。甚だしきに至つては、滿清反對の漢族、封建地主勢力、許多の官僚、軍閥がすべて國民黨に加入した」。

とは李立三が當時の國民黨に對して下した批判であつた。國民黨も亦その發展過程に於いては、常に各階級を包含してゐた——反對の階級をまでも——即ち社會の下層階級をも含有してゐたのである。一九一一年と、一九二五年から二七年まではさうであつた。然るにその政權を奪取つた時、下層分子を抛つて上層分子を吸収した。自然一九二七年以後の國民黨は、上は封建軍閥

官僚的分子より、下は農村資産家階級、土匪、流民を包含し乍ら、牛首蛇身の怪物であつたと謂ひ得る。

x

x

x

斯くの如くにして最近數年來の國民黨政權は既に封建勢力と資産階級の聯盟の統治であり、國民黨は資産階級と封建勢力との混合の政黨として發展したのである。

x

x

x

「國民黨の左派は早くも退出し、右派西山派も亦退出或は投降した。これを一言にして蔽へば資産階級の代表の國民黨は現在既に退出して西南に集り、別に一個の資産階級對封建軍閥聯盟の政權を成立した。現在の南京政府は單に一個の蔣介石軍閥と、各省軍閥との一種の清一色の封建的勢力の統治權力と化した。南京の國民黨に至つては蔣介石軍閥に扶養せらるゝところの黨官の集團に過ぎず、新軍閥御用の具となつて了つた。一九一一年以來國民黨の統治權を綜觀するに封建勢力單獨統治の期間が最も長く、資産階級單獨の統治期間は殆どなく、資産階級と封建勢力の聯盟統治の期間すら最も短かいのであり、これを換言せば封建勢力の支那統治上に於ける力が最大であるに反し、資産階級の支那統治上に於ける力が最も弱いと謂ふことにな

る」。

とは支那急進批評家たちの支那統治形態に對する解剖と批判の一節であるが、現在の支那に於いて資産階級の統治の存在し得ない原因は次の如く、

- (一) 半植民地の特徴として自國資産階級の能力が薄弱であつて獨立的に統治権を取得することが不可能である。
  - (二) 資産階級獨立の統治を實現せんとするには必ず先づ封建勢力を徹底的に掃蕩し、封建性を解消しなければならなかつたに拘らず、國民黨の所謂革命運動はこのことをなし遂げ得なかつた。
  - (三) のみでなく國民革命の北伐途上に於いて長江に達した際勞農大衆の革命意識とその力が非常に高潮した結果、資産階級は驚愕の餘り、北方封建勢力と妥協し、同時に南方の封建勢力すらそのために恢復し、それによつて資産階級と封建勢力との聯盟政權——南京政府——が成立しつゝ、現在に及び、更に南京政權が蔣介石の新軍閥化に伴ひ民族産業資産階級をすら排斥して了つた。
- 等々の數項を數ふことが出来るのである。

このことは又國民黨政權が本質的に資産階級を代表し得ないからである事實を適確に表明してをり、そこに資産階級と封建勢力との聯盟政權が形成された所以をも語つてゐる。

x

x

x

而してこれを實質上から見ると、斯かる政權は既に一種の封建勢力式の政權であるのみでなく、資産階級が常に附庸地位に置かれてゐる點をも看過出来ない。

この場合國民黨政權が資本主義的財政々策を採り來つたこと、及び幾人かの民族資本家を拉し來つて政權に參與せしめた等の諸項を以て、直ちにそれが資産階級政權の發展であると説くのは早計であると共に、資産階級の唯一の要求である國內戦争の終熄が、たえず裏切られて來た事實や、傭兵制度が依然存続しつゝある事實等々、それらはすべて資産階級の統治上に於ける附庸的地位を表象するものであらねばならぬ。

### (C) 國際資本帝國主義の支那統治權上の地位

支那は半植民地國家である。國際資本帝國主義が支那に於いて經濟上、政治上最大の勢力を占有してゐる。經濟上、政治上國際資本帝國主義の統治を受けざるどころのない點に半植民地國と

しての特質をもつのである。

「支那は既に國際資本帝國主義統治の國家となつた。それがために一個特別の買辦階級を產生するに至つた」

とは、獨り支那に於ける新人の理論のみでなく、寧ろ支那人一般の常識となつてゐる。

「この種の買辦階級は廣義のそれと、狹義のそれとに分つことが出来る。狹義の買辦階級は直接帝國主義に隸屬し、専門に國際資本帝國主義に服務する買辦となり、完全に國際資本帝國主義の代理人として國際資本帝國主義と共同の利害を有してゐる。廣義の買辦階級に至つては一般國際資本帝國主義商品の販賣及び原料購買の商業資本家を指し、これらは表面上一個獨立の商業資本家であり、且つ獨立の資本を有してゐるが、實質上經濟關係に至つては完全に國際資本帝國主義と共同の利害を有し、間接には國際資本帝國主義に隸屬してゐる。そして形式上——政治關係上、民族資産階級と戰線上に對峙しつゝある。」

以上は支那に於ける買辦階級に對する分析論の一斑であるが、國際資本帝國主義が支那の商品

市場と、原料地投資の安全を維持せんがため、封建勢力を利用しようとする。この場合國際資本帝國主義の各自の勢力は著しく不平衡たるを免れない。英國の資本的勢力範圍は東南及び長江にあり、日本の資本的勢力範圍は北方支那に存し、佛國の資本的勢力範圍は西南にあると共に、米國金融資本は確定的の勢力範圍を有しないが、常に門戶開放を主張し乍ら、中央政權に接近し、これら國際資本帝國主義の作用が、支那統治權上に絶大の威力をもつてゐるのである。

## 第二節 支那の軍閥ファツシヨ化の特徴

前節に觸れたところの地主の代表、銀行、買辦資本家階級を代表する軍事獨裁とは、如何なる形態の下に發生し進展したのであるか、このことに關しては参考のため左に、「支那の軍閥ファツシヨ化及びその特徴」と題する一篇を摘録しておきたい。因にこの一篇は民國二十一年十一月發行の雜誌「前路」創作號及び第二號に亘り坡陀氏が「中國軍閥法西斯希化及特徴」と題して論じてゐたのを、要約したものであることをお断りしておく。

### (A) 世界ファツシヨと支那

歐洲のファツシヨ政權は資本主義制度の發展が最後の段階にまで達した秋に產生した。即ち經

濟恐慌の深化と共に、社會の各方面に於ける支配的中心が失はれんとするや資産階級の統治者と、資産階級に接近せる一部のインテリ分子とが主體となつて、無産階級の政黨に對する防衛と、無産階級の專政を破壊せんがために形成されたものであつた。

勢ひファツシヨ政權の產生は、資本主義の高度化せる國に於いて必然的であつたと謂はざるを得ぬ。而かも斯うしたファツシヨ政治の傾向は多かれ少なかれ各國の政治形態の中にも普遍した。従つて暴力化的獨裁政權乃至その政黨組織と、無産階級の共產黨の組織とは最近十數年來に於ける世界政治上の潮流であつた。斯くの如くして資本帝國主義各國に於いては日と共に多々益々ファツシヨ的色彩を加へて行つたのみでなく、半植民地に於ける諸弱小民族の政治的傾向に於いても亦、斯うした趨勢が顯著となり、近年とくに積極化し具體化するに至つた。而して斯かるファツシヨ政權の組織及びその特徴は當然世界各國に於いてその軌を一つにしたこと謂ふまでもないが、それが一度半植民地に輸入された後は、その性質に自ら部分的の變化を來すのを免れ得なかつた。

一部の間では半植民地の政治には根本的にファツシヨ化の可能がなく半植民地に於けるファツシヨ政治の前途が絶対にあり得ないと斷言するものすらあると雖も、事實は既に土耳其、支那、

及び歐米兩洲中の諸弱小國家に於いて政治實制上の統治が早くも獨裁式ファツシヨ化の趨勢を顯著ならしめてゐるのであり、このことは政治上乃至社會上の要求が自然斯うした獨裁式的政治過程を形成せしむるに至つた所以である。無論斯かる國家に於いては資産階級性の民主革命が徹底的に成功する可能がなく、若しその可能が與へられたとしても、それに向つて邁進することが出来ない上、議會政治も亦終始紛糾裡に過渡しながら、多くの封建落伍分子と、小資産階級とに社會革命のイデオロギーと實行の勇氣を缺き、同時に國內の無産階級大衆にも何等の組織を持たないのみならず、國際的には資本主義の誘引と、ファツシヨ政治の空間的影響とにより、自然必然的に躍進しつつ、反動政治——ファツシステイの組織を造成するに至つたのであつた。

支那に於ける國民黨政權のファツシヨ化も亦大體に於いてこの領域から脱しない。とくに國民黨政權のファツシヨ化は次の如く(一)一切の政治會議に於ける決議と雖も蔣介石の許可を経るにあらずんば實行不可能である。(二)政治の中心が常に蔣介石の赴くところ——或は南昌に、或は廬山に、或は武漢に、或は四川に、或は南京——に従つて移動した。(三)支那歴年の政治が實際上黨治でなく結局個人の獨裁であり、而かもそれが年を追うて強化するに至つた——等々の點

をその特徴として擧げねばならぬのであつた。國民黨々治の名を藉りてその實蔣介石個人の統治の實際が支那に於ける政治の全部であるのを見ると、形態的には列國のファツシヨ政治に比し殆ど異るところがないのである。

(B) 政治形態から見た支那のファツシヨ化

ファツシヨ政權は必然的に反デモクラシイ的であり、強力な獨裁政治の施行者である一方、反社會主義的であるが、その反面には更に一種の社會主義的の傾向を帯びてゐた。と共に無産階級の政黨を否認する傍ら時には資本家階級の寡頭政治をも亦否定し、現實の時局解決への手段として一般農民の要求に應付しようとした。斯くの如き傾向は獨逸のファツシヨ運動(それは比較的初期の時代であつたが)の中に最も顯著に表現されてゐた。然しながらファツシヨ運動、ファツシヨ政治の使命は窮極のところ、資本主義制度の維持と、資産階級の擁護とに過ぎないのであつた。

この點に於いて支那年來の政治も亦無産階級の運動に對しては極力反對したのは勿論、著しく

獨裁的であつた。全國軍隊の大多數が殆ど一個の軍將の下に統率され、その軍將が支那共產黨の赤軍に對する進攻を指令しつつ、民國十五年三月二十日廣州の海軍事件より現在に至るまで、蔣介石は極端に近いまでに支那無産階級の政黨に對する屠殺政策の施行の手を弛めなかつた。而して根本的に無産階級の政治行動を否認し、一般民衆の集會結社の自由を解消して了つた。斯くの如くにして力の差こそあれ、その反動性に至つては各國の諸ファツシヨに較べてより峻烈であり、より深刻であつた。

同時に蔣介石政權はさうした機會に乗じて東南資産階級の歡心を獲得し、遂にそれと勾結するに至り、そこにファツシヨ式個人獨裁の政治を造成したのであつた。

但しこのファツシヨ式個人獨裁政治の形成の過程に至つては、各國のファツシヨの形式過程に較べて幾分異るところがあつた。

獨逸、伊太利、日本のファツシヨ運動は、時には資産階級の寡頭政治に對して進取的であつたことがあり、當時の伊太利ファツシヨの如きは資産階級に對し猛烈な抗爭の鋒を向け——現在では既に資産階級に屈服したが——二、三年前に於ける獨逸のファツシヨが資産階級と盛んに鬭争



したことがあつた。

然るに支那の獨裁政治の形成過程は、この種の抗争の段階を少しも経過しなかつた。加ふるに現實的に民族資産階級に對する攻勢の態度を持さなかつたのみでなく、最初からこの階級と聯合して了つたのであつた。ここに半植民地に於けるフアツシヨの單獨的な特徴の第一點を見出し得るのであつた。

支那の資産階級は國際資本主義の發展が、その最高潮に達しつつ、將さに崩壊への段階にある際成長したものであるため、その質と量とに於いて甚だしく脆弱であり、政治上の作用が稀薄たるを免れなかつた。従つて國民革命戰の途上に於て無産階級の興隆に遭遇するや、期せずして獨裁政治の下に屈服せねばならぬ必然性をもつてゐた。即ちそこに強硬な專政的の政權により強力な機關を建設せしめて紛糾限りない半植民地の統治に當らしめ、私有財産の擁護と、事業經營の安全とその發達とを必要としたからである。

斯うした要求は廣州に於ける共產黨の暴動以來、國民革命軍の北伐經過と、南京政府の成立に

至るまで續けられた。當時支那の東南資産階級にとつては、その階級的利益を擁護するためには、改良派の自由主義的政治集團や、穩健な西山會議派を全然必要としないで、強硬な軍事的獨裁政治を要望するところ頻りであつた。このことは偶々支那政治變遷への一段階を劃したものとも看做すことが出来る。

當時支那の資産階級と、現在フアツシヨの中心たる軍事權力者にとつては無産階級の革命運動への實踐と民衆運動との威壓を受くること夥しく、五卅事件、香港の大罷工、罷工委員が存在、各種の抗日、排英運動、その他無産階級の政黨分子の國民革命軍中に於ける工作の發展等等、極度の不安を感じ出した。

その結果五卅事件後、上海の資産階級を中心とする各分子の革命戰線からの後退に早くもその片鱗を現はし、次いで國民革命軍が東南に達した時、兩者の深い紐結が表面化するに至つた。斯うした経緯によつて斷然頭角を現はした新軍閥は、資産階級の後援と共にその力を加へ、質と量との上に著しい變化を來しながら、支那に於ける最近十年來のフアツシヨ化政治の前途が切り拓かれたのであつた。

各國のファツシヨ政權は、自國至上主義を唱へて常に國際主義に反對すると共に、強權的侵略性を持ち、一方蘇聯への攻勢を主張し乍ら、國際化に對する否認と、國家對國家間の對立關係等、これらの強い認識の上に立つてゐる。従つて自己本國の國民經濟の發展を奨励しつつ、本國民の生活水平線の遞増を要求する爲、植民地の爭奪を主張すると共に、武力を外交の先鋒となすことを念としてをり、甚だしく軍國的であることを免れないのであるが、支那のファツシヨ的軍閥政治は、國際資本帝國主義の統制、培養、等の作用を著しく享受しながら、先天的に斯うした機能の附帯が皆無であつた。ここに又半植民地ファツシヨの特徴の一つが造成されたのである。

このことは前述の如く支那のファツシヨ式獨裁政治が、北伐の進展後東南民族資産階級との結合によつて產生したものであり、支那資本主義の發展が飛躍的であつたが、第三期國際金融資本主義の支配の下におかれてをり、商業、買辦資本、地主資本より、工業資本の段階を経ないで一種の變體的金融資本を造成するに至つた關係上、その具有する民族主義的排他性が、各國のそれに較べて特に薄弱であるからに外ならなかつた。

且つまた支那に於ける變體的金融資本階級の大多數の資本は外國資本によつて供給されたもの

であつた。勢ひ直接必然的に國際資本主義の支配を受けた。並びに支那に於ける變體金融資本家階級と結托關係にある政府も亦自然國際資本主義の走狗たらざるを得なかつた。

支那ファツシヨ化式獨裁政權がその對外反抗性を失ひ、同時に獨立國家たるの可能を缺いた結果、帝國主義的植民地分割への積極的行動に参加する資格を根本的に持たなかつたのは勿論であつた。のみでなくその反動性だけが先進ファツシヨと同様著しく濃厚であり、國際的にはただ蘇聯への進攻のみその目標となしたのである。

斯くの如くにして支那式ファツシヨ政權は、國際資本帝國主義と、國內的變體的金融資本家階級及び新軍閥によつて構成されたものであるだけ、これらの三構成分子のそれ々の具備せる反動性をその一身に集中した。

國民黨政權を中心とする支那のファツシヨ化への歴史と、その成立以來の盛衰消長とが最もよくこの間の経緯を物語つてゐる。斯くて以上各項の演繹により次の如く歸納することが出来るのである。

(一) 半植民地のファツシヨも亦反國際主義、反蘇聯的にその特徴をもつが、その本質上完全に反國際主義的たり得なかつた。

(二) 同時に直接間接に國際金融資本主義系統の支配を受けつつ、既に國際的附隨の一部分とさへなるに至つた。

(三) 自然植民地争奪と帝國主義戦争に参加する資格を根本的に缺いてゐた。

(C) 行動・文化の二方面から見た支那のファ

ツヨ化

先進ファツシヨの基本的コースは、對内的には民意を代表せざる代議機關に對する壓迫と、對外的には最も強硬な手段を以て各國に對し、寸毫と雖も國威の墮失を肯ぜざる點にその基調をおいてゐた。

然しながら支那のファツシヨのコースは、決して斯くの如くであり得なかつた。唯その前者の使命に對してのみは、忠實にこれを果し得た。今後と雖も獨裁への強化と共に益々その趨勢を顯著ならしめるであらうが、後者に對する實踐に至つては全く不可能事に屬するであらう。このことに関しては支那に於けるインテリ批評家たちは次の如く論評してゐる。

X

X

X

「愛國運動、國家至上主義、民族主義の如何なるものであるかは、支那ファツシストの腦裡から取除かれてゐる。のみではなく支那のファツシストには國家の威信を保持する事は勿論、國家の體面を保つことすらその必要がなかつた。甚だしきに至つては一步を進めてファツシヨ的暴力政策を用ひつつ、愛國運動に参加せる民衆を屠殺し、間接的には國際資本帝國主義の侵略の走狗となつた。その反動的行爲は封建時代の君主及び地主もこれに及ばなかつた」。

斯くの如くにして半植民地支那のファツシヨは既にファツシヨの特徴の一半を失つて了つたのである。このことは現在のファツシヨ政權で革命の最高潮期に於いて、國際資本帝國主義の援助の下に、その政權を取り、國內的には變體的金融資本（産業資本との結合を経ることなしに、國際金融資本に孕育されつつ増員するに至つた銀行資本を便宜上ここでは變體的金融資本と稱することとした）の基礎の上に立つに至つたに至つた結果であつたと謂ふべきであらう。斯かる統治形態とその統治形態とを形成せしめた客觀的情勢とは、先進ファツシヨの中にその類例がない。

X

X

X

支那に於けるファツシヨの政治形態及びファツシストの行動は大體上述の如くであるが、更にこれを文化・思想の方面から觀察するとき、その著しく復古主義的である點に於いて、將たまた

英雄主義的、個人中心主義的である點に於いて、先進ファツシヨと同一の動向を示したこと、現南京政權の文化政策、文化運動に徴して明らかである。とくに上層文化意識がこの政治形態と行動に反映し乍ら數年來、所謂國民革命運動の中に於いてすら舊道德の獎勵を怠らなかつた。南京政權が稍や確立するに至つた當時から既に舊文化の提唱に對する努力が愈よ積極化し、現在の復古運動にまで延長したのであり、同時に英雄主義的、個人中心主義的の傾向も亦、多々益々その度を加へて行つた。

#### (D) 支那軍事ファツシヨの特徴

前に略述した如く、支那に於けるファツシヨ政治の特徴は、所詮半植民地のファツシヨ政治であり、自然半植民地ファツシヨ化の特徴としての三つの特徴を綜合しつつ形成されてゐた。

而してここに謂ふところの半植民地のファツシヨ政治の特徴とは、——(一)對外的には國際資本帝國主義と(二)對内的には變體的金融資本家階級と(三)進歩せる新軍閥若くは軍人領袖——土耳其及び波蘭、南米諸小國の如く——との——結合によつて構成された點を指し、その反動性も亦以上三個の構成分子のそれ々々もつ凡てをその一身に集めねばならなかつた。従つてそ

の反動的行爲は比較的複雑で且つ深刻であつた。都市に於いては資本家及び國際資本帝國主義者の無産階級への壓迫に替り以てその搾取の戰線を鞏固にし、農村に於いては農村に對するその搾取行爲を加重した。斯くの如くにして支那に於ける最近二十年來の政治變遷は從來の分散的と軍閥政治的の二重の壓迫から、これを統一的とファツシヨ政治的の二重の壓迫に變轉せしめたのに過ぎない。所謂國民革命は欺瞞的手段にしか過ぎなかつたのである。

先進ファツシヨ政治は、所謂非常時の環境の中から產生した。支那のファツシヨ化も亦さうであつた。とくに最近數年來に於ける支那の内憂外患はその窮極に達した。自然國民はその意識上乃至政治環境上に於いてファツシヨ政治の產生を要望してゐた。勢ひかかる基礎の上に現在の軍事ファツシヨ化が實現するに至つたのである。然るにそれが半植民地なるが故に、その產生の過程に於いて先進ファツシヨとその軌を異にした所以であつた。即ち先進ファツシヨが最初資産階級の民主的代議政治否定のコースをとつたその段階を経過しないで、その當初から國內資産階級と相結合することによつて産れ、且つ成長したのであつた。

自然支那のファツシヨ政治は、口に民主革命を高唱しつつ、西歐の半會議政治の形式を模倣し

て大衆の信頼をつなぐことに努めたが、結局新興金融資産階級との結合に終始し、そこから一歩も出でず、以て半植民地ファツシヨ政治形成過程の唯一の大特徴をなしたのである。

x

x

x

半植民地式の支那ファツシヨ政治は、國內的には進歩的軍閥と新興金融資産階級との相互結合を基礎となしたと雖も、その能力は非常に薄弱であつた。従つて直接國際資本主義の扶掖を受くることによつてのみ、よくその存在を續け得た。勢ひ事實上單に國際反動統治の一部をなしたに過ぎぬと稱して好い。即ち蘇聯に對する進攻にのみ反國際的性質を帯びたのに止り、國際資本帝國主義の植民地争奪に對してはこれに参加する資格を缺いてゐたことに前に叙述した通りである。

而かも國內戦に備ふるための軍備の擴張には歳出豫算の四割以上を費したのであつた。半植民支那のファツシヨ政治の特徴は對內的には強硬であり、對外的には著しく軟弱であつた。

x

x

x

支那に於ける最近十餘年來の政治形態は、國民黨々治による中央集權制であつて、民主々義的議會制ではなく、また封建時代の君主專制度乃至封建末期の軍閥政治でもなかつた。然るにその反動性、壓迫性、搾取性、專制性、獨裁性に至つては、封建制度と軍閥政治に較べて、より甚だ

しかつた。而してその組織の嚴密さと行動の方法からいふとき、時には民主政治に比し更に進歩的で且つ峻烈であつた。これを換言せば支那のファツシヨ政治には、封建政治の統一性、峻嚴性、獨裁性を帶同し、民主政治の散漫性と無統制の能力とを除去して了つた。一部の間支那のファツシヨ政治が復古政治の形態をとつてゐると論ずるものがあると雖も、これを形態的に見て或はさうであらうが、その性質に至つては全く異なり、絶對的に復古的ではなかつた。

x

x

x

ファツシヨ政治は民主々義政治の無能を否定するところ起つた。ためにその組織は必然的に議會制度の政治に較べて周密であつた。この點に於いて十餘年來の支那の新政は所謂黨治でもなく、尙ほ且つ法治でもなく、一種の專制的巨頭政治となつて了つたのである。そしてこの種の專制的巨頭政治はその形成上に特異な過程と性質とをもつてゐた。然しながらそれは先進獨立國の專制的政權の特徴とは自らその選を異にしてゐた。かと謂つてその獨裁政權そのものをまで否認することを得ない。唯この種の獨裁政權の政治形式に於いて一般的のものと異るところあるに過ぎないのであつた。

それは支那最近十餘年來の政治は進歩的官僚軍閥政治であり、近代資本主義の洗禮、培養、結

合を經過して造成されたファツシヨ化の獨裁政治であつたからである。その政治的イデオロギーから始まつて政治的行動を經過し、文化運動に至るまで、隨處にファツシヨのイデオロギーを表示してゐた。然るに支那が非獨立國であり、落伍國であるがため、統治者をして露骨にそのイデオロギーを表現することを得せしめないものであつた。この場合國民黨はファツシストに對して「隠れ簞」としての役割を果した。獨裁政權の中心者は國民黨々治の名の下にその軍事獨裁への強化に邁進したのである。

斯うした政治形態は專政でもなく、民主でもなく、尙ほ且つ單一な軍事領袖の獨裁でもなく、所詮半植地的ファツシヨ化政治の特徴なのであつた。

x

x

x

「支那のファツシヨ化は、資産階級を背景とした獨裁政治であり、一九一六年の北伐前に於ける「五卅事件」、「香港大罷工」の際、早くも醸成され、南京政府の成立後、國民黨對共產黨の正式分裂を來たしたとき産れ、而して最近の數年間に發展したのであつた。」

爾後この種のファツシストは、更にその積極的發展を謀るべく、ファツシヨ組織の集團をして單純化、集體化せしむるため、伊太利ファツシヨの方法を摸して、中國藍衣社を創設し、將來

の大政治運動の核心となすべく準備中であると傳へられてゐる。

而かも支那ファツシストは斯くの如くにして漸次その歩を進め、國民黨を乗取らうとしてゐるのが、支那に於けるファツシヨ運動の現實的情勢である。これを要するに支那のファツシヨ運動は、今日に始まつたものでなく、過去に於ける國民革命運動中に於いて既にその根基を有してをり、最近一兩年中最も露骨にその鋒鋷を現して來たのであつた。」(以上「中國軍閥法西斯蒂化及其特徵」から要譯)

### 第三節 支那政局に於ける各派系

以上の各節によつて支那に於ける統治權力及び政治機構の本質並びにその形態等を略述し得たと信ずる。

就中蔣介石を中心とする軍事ファツシヨの動向及び、中央政權の獨裁強化に對する反對運動乃至小資産階級を代表する勢力又は地方的勢力の抗争の必至的なる所以も亦或程度までこれを暗示し得た筈である。

斯くの如くにして現在支那にはその統治形態——政局の上に、幾多の派系が存在してゐるので

あるが、これを概して次の如く區分することが出来る。

- (一) 中央系（現蔣介石政權を中心とする勢力。前述の如き経緯により軍事的獨裁への強化に邁進しつつある）。
- (二) 西南派の（一）廣東系（地域的に南支の民族産業資本家階級及び小資産階級にその基礎を置くと共に、依然舊封建性の上に立つ軍閥的存在の一面をもち、蔣介石政權を中心とする獨裁強化に對して抗争を続けつつある）。
- (三) 西南派の（二）廣西系（廣東系とほゞ同様の立場に立つてゐるが、その軍閥的存在たるの點に於いては、廣東系よりも更にその色彩が濃厚であり、中央政權の獨裁強化に對しては、極力抗争を続け、中央政權への反對のために廣東系と其の行動を共にしてゐる）。
- (四) 太子派（孫科を中心とする一派で、小資産階級及び民族産業資本家階級の一部を代表するもの）。
- (五) 汪精衛派（太子派とほゞ同様のイデオロギーをもち自由主義的民主政治の主張の下に、蔣介石政權の獨裁化に對しては抗争的態度たるを失はないが、太子派と同じく著しく機會主義的である）。

(六) 舊馮玉祥系（既に没落したと雖も依然軍閥的存在として認識されてゐる）。

(七) 山西派（舊馮玉祥系とほゞその軌を一にする存在である）。

(八) 反國民黨系（所謂社會民主主義に立脚し國民黨々治及び蔣介石政權に對しては本質的に反對してゐる一派。並びに右翼系としての反國民黨反蔣介石分子をも含んでゐる）。

(九) 共產黨のソヴェート樹立運動。

x

x

x

以下章を改めてこれらの支那政局に於ける各派各系統を分析解剖すると共にその派系所屬の各人個々についてこれを併せ紹介しようとするのが、本書の主要なる目的であることをお断りしておきたい。

## 第二章 中央派の形成その發展及び構成分子

中央派は幹部派とも謂ひ、蒋介石派とも呼ばれてゐる。現國民黨政權はこの中央派がこれを占めてゐること周知の通りである。

而かも一九二七年（民國十六年）國民黨政府の成立以來の南京政權の消長と、支那に於ける統治の發展とは、これを或る角度から見ると、一にかゝつてこの中央派の形成と發達の過程であつたと謂つて差支がない。

このことは前章に摘録した「支那の軍閥ファツシヨ化及びその特徴」に徴しても亦自ら判明する所以である。

蒋介石 浙江省奉化縣の産。保定軍官學校の卒業後、日本士官學校に入學のため渡日し、當時

日本に亡命中の革命家と交はり、とくに陳其美と親交があつた等、中國同盟會に加入し、士官學校入學前高田騎兵聯隊に隊附として勤務中、第一革命の起るや上海に歸り、陳其美の下に滬軍第五團長に任じ、江蘇、浙江の各地に轉戦したが、第二革命の失敗後江蘇浙江の各地に潜居した。民國四年袁世凱の帝制宣布と共に陳其美を援けて機關を組織し同志を集めて上海兵工廠を攻撃したが失敗に終り、民國六年張勳の復辟後孫文が廣東に護法政府を組織するに當り、廣州に赴いて許崇智の下に參謀長となつたと雖も、許崇智と意見合はなかつたため上海に去り、國民黨の同志周佩箴の斡旋で上海證券物品交易所第五十二號經紀人となつた。然るにその後間もなく再び廣州に行つて孫文の幕下となり、民國七年陳炯明に従つて福建を授けて陳炯明軍の參謀長に任ぜられたが、後上海に去つた。次いで九年陳炯明が廣東に歸り廣西系を驅逐するや孫文の命を受けて陳炯明軍を援助しつゝ惠州を奪取して直ちに省城に入り全省を平定後又もや上海に歸つたが十一年一月孫文の北伐出師に當りて大元帥府行營參謀長に任ぜられ、六月六日陳炯明軍の叛亂と共に孫文を擁して出府したと雖も失敗して孫文に伴はれ上海に赴いた。民國十二年雲南廣西軍が陳炯明を驅逐したため孫文の廣東に歸るや、これに従つて大本營參謀長に拔擢せられ、省内の征服に従事し、同年孫文を代表して露國に赴き赤衛軍及び士官學校の組織



訓練方法に就き視察研究し十三年廣東に歸つた。爾後革命軍養成の目的を以て黄埔陸軍々官學校を創設しその校長に任ぜられ、十四年學生隊を率ひて廣東商團軍を破り、民國十四年陳炯明等廣東省内の反國民黨軍を討ち廣東全省を統一した。斯くて民國十五年國民黨第二期中央執行委員に擧げられ、第一軍長に就任した。孫文の死後國民黨内に左右兩派の抗争が激化し、所謂中山艦事件の起るや「クーデター」を斷行して共產黨員及び露國顧問を廣東から逐ひ、汪精衛も亦廣東を去るに及んで、廣東政府文武の全權を掌握しつゝ、尙ほ共產黨との連絡を計り、以て南方革命黨の戰鬥力の分散を免れしめた。同年國民革命軍總司令に就任し、北伐の途に上つたが、忽ち吳佩孚を逐ふて武昌を占領し、次いで江西に入つた。民國十六年の初め南昌に中央黨部及び國民政府を置き、共產黨系によつて組織せられた武漢中央黨部及び國民政府に對抗するに至つた。斯くて同軍が上海、南京を占領し、江南一帯を平定して中央黨部及び國民政府を南京に移し、その後上海の共產黨系を彈壓の上、上海臨時政治委員會を組織の上自らその主席に任じた。次いで軍を江北に進め、孫傳芳軍及び張宗昌軍と戦ひ、一時徐州に進出したが、張宗昌軍の反撃に敗れて北伐軍を江南に總退却せしめた際、下野奉化に歸り、武漢、南京兩政府の合體後國民黨中央特別委員、國民政府委員、軍事委員會委員に任ぜられたが、日本に亡命し

た。然しながら間もなく上海に歸り宋美齡と結婚し、民國十七年の初め國民革命軍總司令に復任し、國民黨中央執行委員會常務委員、中央執行委員會組織部長、中央政治會議主席、國民政府委員、軍事委員會主席、中央陸軍々官學校長等を兼ね、また馮玉祥、閻錫山、李宗仁等と協力して北伐の進行を策し、國民革命軍を集團軍制に改め、自ら第一集團軍總司令を兼ね、津浦線を北上して孫傳芳、張宗昌等と戦ひ、濟南に進出したが濟南事件が起つて北上不可能となり、京漢線方面に轉じ、奉天軍を京津から逐ひ北伐を完成した。次いで北京に入り國民黨及び政府の文武百官を集めて孫文の靈前に北伐完を報告し、慰靈祭を執行すると共に馮玉祥、閻錫山及び李宗仁等と軍事巨頭會議を開き、裁兵問題及び東三省の問題を議したのち、南京に歸つて國民革命軍を改編し、國民政府を改組の上、五院制度を採用し自ら國民政府主席に就任した。斯くて同年末東三省の易幟により國民政府は統一支那の中央政府たるの體を具へ、各國との諸條約締結に成功し、國民黨の素志たる國民革命は殆どその功を遂げた觀を呈した。その後民國十八年編遣會議を招集し、さらに第三次全國代表大會を招集して、國民黨中央執行委員會常務委員、中央政治會議主席、國民政府主席、陸海空軍總司令等に任ぜられ、民國十九年譚延闓の死後行政院長を兼ね、黨及び政府の組織者たるの地位を固めた。而かも黨内部の不統一は

爾來再三反蔣運動の形を以て殆ど應接に暇なき程度に各種の紛擾、内亂を繰り返へしたが、巧みにこれを處理鎮壓した。民國二十年胡漢民を逮捕監禁し、その結果廣東派が獨立して廣東に別個の國民政府を樹立するに至るや、國民政府主席その他の行政關係一切の官職を去り、陸海空軍總司令部をも廢することにより、廣東政府と妥協し、同年末郷里に退いた。民國二十一年國民黨中央執行委員會常務委員、中央政治會議常務委員に擧げられたが出ず、汪精衛一派との連絡成るに及んで南京に入り、國民政府軍事委員會委員長に就任し、政治上の責任を汪精衛に委ねて軍權を掌握し、所謂汪、蔣合作政府を組織したと雖も、民國二十四年末汪精衛の遭難と共に汪精衛の行政院長辭任後自ら行政院長を兼ねつゝ、現在に及んでゐる」(「現代中華民國人名鑑」及び「中國名人錄」から)

斯くの如くにして所謂幹部派なるものは、國民黨内に於ける蔣介石の勢力の強化と共に、その團體としての老大きさを加へて行つたのであるが、左に「現代史料」第二集「三中全會前に於ける國民黨の各派系」のなかゝら、「幹部派の形成と發展」と題した一節を摘録して蛇足を添へよう。幹部派の形成と發展。

幹部派の黨に對する功績 國民黨が嚴密なる組織をもつに至つて以來、完全に共產黨に操縱された。而かもその間國民黨としては獨自に活動するところなしとせなかつたに拘らず、それとも亦C・Pの活動に依附したものであつたこと謂ふまでもない。然るに幹部派の形成以來、C・Pの國民黨内に於ける勢力は崩潰を開始するに至つた。爾來幹部派が擡頭する毎にC・Pは凋落への一途を辿り、幹部派が成熟するに及んでC・Pは全く國民黨から放逐されたのであつた。

幹部派の首領 幹部派の首領は人の知る如く蔣介石である。蔣介石は軍事に長じ、從來黨にあつては多く軍事方面に服務し乍ら、第一次全國代表大會に出席したのであつたが、孫文の勸告により中央委員に當選しなかつた。自然國民黨第一期中央委員のなかには未だその名が見へなかつたのである。第二次全國代表大會は孫文の死後開かれた。而かも蔣介石は第一次東征に於いて楊希閔、劉震寰を討平し、第二次東征により東江を肅清した直後であつただけ、黨員と民衆の信賴厚く、第二次全國代表大會では中央執行委員に擧げられた。蔣介石の黨に於ける地位の取得はこの時から始まつたのである。

中山艦事件と共產黨の陰謀 然るに民國十五年の春開かれた第二次全國代表大會は、完全にC・

Pに包辦されてゐたため、大會後に於けるC・P分子の得意はその絶頂に達し、國民黨系分子はたへず壓倒された。更にC・Pは寸を得て尺に進み、民國十五年三月二十日、遂に中山艦の陰謀となつて現はれ蔣介石の暗殺を謀つた。但しこの事件は事前に暴露したのと、蔣介石が逸早く對策を講じた結果、結局その難を脱した。これによつてC・Pの意氣稍や消沈したと共に、當時國民政府主席であつた汪精衛は事件發生後、病と稱して辭職し海外に亡命した。

蔣介石の共產黨對策 中山艦事件後に於ける蔣介石の共產黨對策は、漸次積極化するに至り、黨政の大權に對しては徐々にその回收を開始し出した。民國十五年五月廣州で舉行した第二屆二中全會が、そのことを記念すべき大關鍵であり、同會には共產黨分子が參加してゐたと雖も、從來のやうな優勢さがなく、その結果、五月十五日「黨務整理決議案」なるものが通過した。謂ふまでもなく同案は蔣介石の提出にかゝり、尙ほ且つ共產黨制裁の具體的表現であつたと謂ふべきである。

蔣介石の中執會主席 黨務整理案の最重要點は、中央執行委員會主席の増設と、C・P分子が國民黨の中央常務委員及び部長等を兼任することを得ないといふ點にあつた。従つて當時部長を兼ねてゐた譚平山、林租涵、毛澤東、吳玉祥及び書記長劉芳等共產黨の重要分子は相率ひて國

民黨中央黨部から驅逐された。然しながら當時は尙ほC・Pとは完全に絶縁してゐなかつた。それは國民黨對共產黨の勢力が尙ほ對峙しつゝあつた實情を示したからである。その結果蔣介石が中央執行委員會主席兼組織部長及び軍人部長に推薦されたほか、顧孟餘を宣傳部長に、丁維汾を青年部長に、陳公博を農民部長となし、商民部長には王法勤を任命した上、工人部長を胡漢民に、海外部長には彭澤民をそれゝ任命し、同時に書記長を廢して葉楚傖を祕書長となした。こゝに於いて共產黨はその中樞勢力に大打撃を受けたのである。

共產黨の挽回策 斯くてその後の中央は一切の黨務が、専ら蔣介石の指導の下に進行するに至つた。然し乍ら蔣介石は國民革命軍總司令として軍事上唯一の要職を兼任してゐたのと、久しからずして北伐に出發したため、後方の黨務はこれを顧み得なかつた等、當時黨の中樞部は監察委員張靜江（蔣介石の主席を代理してゐた）、及び陳果夫（蔣介石の組織部長を代理してゐた）が、蔣介石系の人物として残つてゐたのみに過ぎず、自然活動の集團を形成するものゝがなかつた。従つて蔣介石系は、中樞に於いて未だその基本勢力を形成するに至らなかつたのである。勢ひ共產黨系はこの機に乗じて勢力の挽回策を企圖し、蔣介石の北伐出師後十月、廣州で中央海外各省各特區聯席會議を開催したなど、それであつた。

南京・武漢の對立。其後北伐軍の長江に達した當時、各方面の主張に基いて中央黨部及び國民政府の武漢進出が斷行された。その時蔣介石は南昌まで進出してをり、中央執行委員會主席の名義を保持してゐたと雖も、共產黨の勢力は益々強化し、中央は完全に共產黨の操縦に任せ、蔣介石の兵權をすら奪はふとした。このことはその後調停者が現はれたため、決裂するに至らなかつたが、蔣介石の上海、南京に東下した後は、共產黨の蔣介石反對の態度が愈よ熾烈を極め、遂に南京、武漢の分裂を來した。

幹部派の形成開始。南京、武漢の分裂後、蔣介石は南京に於いて別に一局面を創始した。そして單に軍事と政治のみに止らず大決心を以て黨務の刷新に當つた。即ち一面「清共」に努力すると共に、一面に於いては黨務の改進に對して積極的に乗り出したのであつた。而かも蔣介石のこの舉を扶けたものに陳果夫陳立夫の兄弟があつた。斯うして幹部派はこの時自然の要求に基きつゝ形成されるに至つたのである。

幹部派とC・C團。或る時期に於いてC・C團といふ名稱が衆人の注目するところとなつたことがある。甚だしきに至つてはC・C團とは中央俱樂部の縮寫であつて、二陳（陳果夫、陳立夫）の機關であると謂ふものすら出た。但しその説は似て非なるもので、C・C團と謂ふのは、

さうした組織が存在したと雖も、それは單に江蘇一省内の活動に限られ、その主持者は李壽雍、汪寶暄等であつた。而してこの二人は二「陳」と密接な關係をもつてゐたとは謂へ、C・C團は決して二陳の組織したものではなかつたのである。況んやC・C團を指して直ちに幹部派と稱するに於いておやである。

幹部派の實力。以上の経緯によつて形成された幹部派がその實力を表現するに至つたのは、民國十七年の春——第三次全國代表大會の開かれた當時——からであつた。第三次全國代表大會は、蔣介石對胡漢民の合作時代、南京中央軍官學校で開催された。幹部派はこの時非常に優勢な環境を形成し得たと共にその基礎も亦著しく鞏固となつてゐた。大會後蔣介石は中央執行委員會常務委員兼組織部長となり、陳果夫も亦組織部副長並びに部長代理に任せられ、陳立夫は中央執行委員會秘書長に就任し、同時に中央の各部は多く廢止され、秘書處を除くほか、組織部、宣傳部、訓練部の三部が残され、胡漢民は宣傳部長に、戴天仇は訓練部長となつた。

幹部派の順調なる發展。幹部派は第三次全國代表大會後、頗る順調なる發展を成し遂げた。それは中央には胡漢民系の勢力が蟠踞してゐたと雖も、幹部派の勢力の伸張には何等の障害がなく、各省の黨務は華北各地に於ける紛糾が少なからざる煩雜を加へたに拘らず、何れも中心に

及ばず力に乏しかつたからである。斯くて中國二十年の春中央はその制度を改變し、各部を常務委員會の指導の下に置き、蔣介石、胡漢民、戴天仇、孫科及び陳果夫等は、中央常務委員に任ぜられて部長を兼ねず、宣傳部長には胡漢民の代りに劉蘆隱が任ぜられ、程天放、陳布雷が副部長となり、訓練部長には依然戴天仇が居据つたと雖も、方覺慧が代理部長に就任、組織部は陳立夫が部長に、余井塘、張道藩が副部長となり、秘書長には丁惟汾がこれを兼任した。四。全。大。會。と。幹。部。派。南京で開催された四全大會は幹部派の操縦の下に行はれたが、各方面の代表はこれに参加し、同時に廣州に於いて開かれた四全大會に比し、その規模と統制とに於いて著しい差異を示した（當時南京と廣東とは對立状態にあつた）。これは幹部派が多年の間養ひ得た同派の勢力の如何に強化しつゝあつたかを物語るものであり、四全大會後蔣介石と陳果夫は、依然常務執行委員となり、中央各部はこれを取消して委員會に易へた。組織委員會は陳立夫がこれを主宰し、汪精衛系の谷正綱は副委員長となつた」（下略）

以上の如くにして中央派の勢力は、爾來多々益々その雄厚を加へ、獨り黨部に於いて幹部派の強化に向ひ一段の努力を拂つたのみに止らず、軍事勢力の蓄積とその増員に對しても亦、あら

ゆる劃策を怠らなかつた。

勢ひ後章各節に叙述するが如く、反中央系の各派が軍事行動の失脚により、または中央派の壓迫懷柔等によりて没落乃至その勢力の失墜せる反面に、中央派の軍事的勢力がぐんぐん加重して行つたのは謂ふまでもない。

自然現在に於いては中央派は、黨部の方面に、軍事の方面に、國民政府部内に、乃至その他の暴力的秘密結社の各方面に亘り、壓倒的の優勢地位を確保しつゝある。

而してこの場合、中央派を解剖叙述するに當りては、これを次の如く大別し乍らその個々の形成過程と現在情勢とを略述するのを至當とする。

- (一) 實力派（軍隊方面に於けるもの）
- (二) 文治派（黨部及び政府を中心とするもの）
- (三) 藍衣社系（秘密結社）

## 第一節 實力派

中央系に屬する實力派の中には各種の分子が混入してゐるため、これを系統だてること至難で

あると雖も、大體に於いて次の如く區分出來るであらう。

- (一) 黄埔系——黄埔軍官學校の卒業生で胡宗南以下の幹部將校及び黄埔軍官學校の教官等を指す。
- (二) 保定系——保定軍官學校の卒業生で、陳誠、聶卓英を主とする軍人の一派。
- (三) 舊四軍系——國民革命軍（北伐出師の直前）の編成當時に於ける第四軍に屬してゐた幹部級薛岳、吳奇偉等。
- (四) 舊部系——國民革命軍編成前後から軍長乃至師長、總指揮として實戰に参加したものと及び舊北方軍から投降したもの。何應欽、顧祝同、陳調文その他の一派。
- (五) 東北系——張學良を主とする舊東北軍の幹部、何柱國、于學忠等の一派。
- (六) 湖北系——何成濬等の如く湖北省出身者。
- (七) 準中央系——何健、唐生智、等の如く表面中央系であるが何時離反するか判明しない一派。
- (八) その他の歸順者——反中央派から轉向して中央派に歸順したもの。

x

x

x

### (A) 黄浦系の分子

實力派の中でも黄埔軍官學校の出身者は比較的少壯軍人である。黄埔陸軍軍官學校といふのは、蔣介石が創設した學校であつた。まさに孫文が容共聯俄政策を具體化せんとして、蔣介石を蘇聯に赴かしめたが、蘇聯で赤衛軍及び士官學校の組織訓練等を視察して歸つた蔣介石は、一九二四年（民國一三年）革命軍將校養成を以て廣州黄埔に軍官學校を創設の上、自ら校長となり、同年には既にその黄埔學生を率ひて廣東商團軍を撃破し、一九二五年（民國一四年）には陳炯朋等廣東省内の反國民黨軍を討平しつゝ、廣東全省を統一した等の歴史をもつてをり、當時の青年將校は現在既に中堅幹部となり、その大多數は蔣介石の系統に屬してゐる。就中最もその頭角を現はしつゝあるのは、胡宗南（第一師長）で、陳繼承（第一軍長）、蔣鼎文（第二軍長）、等も亦、それら軍長として時めき、その間黄埔軍官學校の出身者ではないが、黄埔學生と共に陳炯朋軍に當つた楊虎（現淞滬警備司令）は、上海を中心とする中央派の總目付役として、一方上海市長吳鐵城を監視し、この方面に於ける反中央派に對する一種の壓力をなしてゐる。

而してこの系統に屬する軍人は、その出世の早いのが既に軍長、師長にその他は旅長どころの

中堅幹部が多いだけ、軍の實際権力をもつてゐる。

而かもこゝに列挙した黄埔系の分子は何れも民國二十四年末の第五次全國代表大會で中央委員に選出されてゐる新進の人物である。

x

x

x

**蔣鼎文** 浙江省諸暨の産、浙江講武堂を卒業後、大元帥府參謀部高級副官を振り出しに、廣州黄埔軍官學校の教官となつたが、その時代に蔣介石との關係が結ばれたものゝ如く、爾來教導團第五團長、國民革命軍總司令部警備團々長、浙東警備司令、國民革命軍第一軍（當時の軍長は劉峙）副長兼第一師長に任ぜられ、のち第九師長を経て現在第二軍長として勤務し、第二、第九師を統轄し、同時に國民黨第五期中央執行委員に選出され最近山西省主席に任ぜられた。

x

x

x

**胡宗南** 浙江省の産、黄埔陸軍々官學校卒業後直ちに劉峙に従ひ、民國十九年の閩錫山、馮玉祥等の反蔣舉兵には、第一師副師長として各地に轉戦し、同年劉峙の後を受けて第一師長に昇進した後引續き同職に就任し、同時に國民黨第五期中央監察委員に舉げられてゐる。

x

x

x

**陳繼承** 浙江省の産、黄埔陸軍々官學校の出身、顧祝同の下に參謀長、團長、旅長を経て、錢大鈞の師長時代に於て第三師副師長に拔擢されたのを機會に、その後師長に就任、民國二十年石友三の討伐に際し第一軍長に任ぜられた以來引續き第一軍長として第一、第三の兩師を統率してをり、現に國民黨第五期中央執行委員に選出されてゐる。

x

x

x

**楊虎** 安徽省甯國縣の産、民國二年第二革命の際南京に於いて黃興を助け、のち日本に亡命して孫文の秘書となり、民國四年袁世凱の帝制宣布と共にこれに反對して、江蘇軍總司令に任ぜられ、海軍陸戰隊司令兼代理海軍總司令の名義で軍艦肇和を占領した。民國六年張勳の復辟の際には天津小站に兵を舉げ、七年孫文が南下して護法聯合會を起すや、大本營參事に舉げられ、その後湖北軍總司令となつた。民國十一年陳炯朋の叛亂に當り海陸各部を率ひて江門、北街、車歪等の砲臺を攻撃し、十二年孫文の大元帥に就任すると共に大本營海軍處長となり、十三年の北伐戦には第一師長に就任、蔣介石の北伐に随ひ江西に入り、總司令部特務處長となり、十六年白崇禧の下に上海警備司令となつたが、次いで常州に移り、國民政府參事處參事になり、二十年國民黨第四次中央監察委員に舉げられ、依然留任、上海事變後上海市長吳鐵城監視のた

め保安隊を組織してゐたが、現在淞滬警備司令に就任し、同時に國民黨第五期中央監察委員に選ばれてゐる。

(B) 保定系の分子

保定系と稱するのは保定軍官學校の卒業生を指すのであるが、この系統のなかには日本陸軍士官學校の出身者が多い。而してこの保定系に屬するもので、現在中央委員に選出されてゐるのは次の如く

陳誠。奚卓英。楊杰。黄慕松。錢大鈞。蔣伯誠。陳儀。賀耀組。衛立煌。

等々の數名に達する。然し乍ら均しく保定系と稱するものゝ、これらの一系が團結してゐるのではなく、唯その出身學校を同じくし、何れも蔣介石派の中堅をなしつゝあると謂ふに過ぎない。

陳誠。浙江省の産、保定陸軍士官學校卒業後直ちに黄埔陸軍士官學校の教官となり、その後同校の砲兵科長、營長、團長を経て國民革命軍第一師副師長に任ぜられ、次いで同師長に昇進、民國十九年第十四師に轉じ、其後第十八軍長に就任、二十年江西の共產軍討伐に従ひ、引續き

第十八軍として現在に至り、民國二十四年十一月國民黨第五次中央候補執行委員に選ばれ、最近山西、陝西、綏遠、寧夏四省邊區剿匪總指揮に任命された。

楊杰。雲南省大理縣の産、日本陸軍士官學校歩兵科の出身、貴州威武軍團長を振り出しに貴州騎兵第一團長、歩兵十團長、重慶衛戍司令官、護國第三軍第二梯團挺進軍參謀長兼第一縱隊長、護國第四軍第一梯團長等に歴任したが、國民革命軍の出現に際し、雲南省軍と共に國民革命軍に参加して、國民革命軍總司令部參謀長となり、蔣介石との關係が結ばれ、その後第十九軍長、國民政府軍事委員會委員、北平憲兵學校長、討逆軍第十軍長等を経て、現在長江要塞司令に任ぜられ、四要塞を統轄すると共に、國民黨中央候補執行委員には第四期以來引續き選出されてゐる。

黄慕松。廣東省梅縣の産、日本陸軍士官學校卒業生。歸國後、陸軍小學校教官を振り出しに、參謀本部第五局長、軍事善後委員會委員、新編第二師々長、北平陸軍大學校々長、國民政府參謀本部陸地測量總局長を経て、現在中央軍參謀次長（參謀總長は蔣介石兼任）を勤め、國民黨第五期中央候補執行委員に擧げられてゐる。



錢大鈞 江蘇省吳縣の産、前清時代、江蘇陸軍小學堂に學び、第一革命に際して革命軍に加はり  
 南京攻略に従事した。次いで鈕永建の部下に轉じたが、第二革命の失敗後日本に亡命し、其後  
 保定陸軍々官學校に學び、更に日本陸軍士官學校に入り、第十二期砲兵科を卒業。民國八年歸  
 國後間もなく廣東軍政府に投じて奥軍第一師參謀となつた。十三年黄埔陸軍々官學校の教官に  
 任ぜられ、十四年同校の學生隊參謀長として蒋介石に従ひつゝ、陳炯明討伐に當り、次いで教導  
 團長を経て、何應欽の下に第一師副師長に任ぜられ、十五年何應欽の後をうけて第一師長に昇  
 進した。同年北伐軍の北上するや、第二十師長に轉じて後方留守に任じ、十六年廣東、江西の  
 共產軍と戦ひ北路軍總指揮、第八路右翼軍總指揮等に就任、十七年國民革命軍第一集團軍第三  
 十二軍長、軍事委員會委員となり、更に淞滬警備司令、江蘇省政府委員、第三師長、江南剿匪  
 總司令、陸海空軍總司令部高級參謀等に歴任して、十九年第三教導師を組織の上師長を兼ねた  
 が、同年陸軍大演習參觀のため渡日し、歸國後武漢要塞司令兼武漢陸軍々官學校武漢分校教育  
 長に就任、二十年陸軍第八十九師長に任ぜられ、現在第十三軍（第八十九師、第八十八師を統  
 轄）軍長となり、國民黨中央候補執行委員には第四期以降各期とも選出されてゐる。

蔣伯誠 浙江省諸暨縣の産、保定陸軍々官學校を卒業後、國民革命軍に加はり、民國十六年に  
 は國民革命軍東路總指揮部參謀長として、總指揮何應欽と共に福建省から浙江省に入り、更に  
 進んで江蘇省の攻略に参加した。同年浙江省政務委員會委員兼省防軍司令官となり、次いで武  
 漢、南京の合作後は、浙江省政府委員兼軍事廳長に任ぜられ、同省主席何應欽が各地に轉戰  
 して不在中は主席を代理し、十七年北伐完成後陸海空軍總司令部總參議兼浙江省政府委員に就  
 任した（因に陸海空軍總司令部といふのは蒋介石の私物のやうな機關で部内には總參謀長及び  
 參謀長を置き、參謀處、副官處、經理處をも設けてある。尙ほこの部は蒋介石の帷幄の軍務に  
 參劃するものとして總參謀長以下優秀な腹心を以てこれに充てゝゐる）。斯くの如くにして、そ  
 の後蒋介石の有力なる幕僚として政變毎に東奔西走しつゝ、その裏面に活躍し、民國十九年韓  
 復榘の山東省政府主席に就任後、濟南にありて蒋介石、韓復榘の間に於ける連絡に任じ、爾來  
 北支地方に於いての蒋介石の代表として北平、濟南間に暗躍し、民國二十四年末の國民黨第五  
 次全國代表大會では中央執行委員に擧げられた。

陳儀 浙江省紹興縣の産。日本陸軍士官學校第五期砲兵科及び陸軍大學卒業、歸國後前清杭州新軍に参加したが、後第一革命後浙江都督府總參議、同軍政司長等に歴任し、その後一時上海に於いて實業に従事したと雖も、民國十三年孫傳芳に招聘されて浙江陸軍第一師長に任ぜられ、十五年浙江省長兼第一師長となり、同年北伐軍の浙江邊境に進むや、浙江省の自治を策動して失敗し同年末省長を辭任した。十六年革命軍の浙江省占領後は、浙江政治會議委員、第十九軍長に任ぜられたが、就任せず、同年江北宣撫使となり、十八年國民政府軍政部に入りて政務次長兼兵工署長に就任、二十一年兵工署長の兼職を免ぜられたと雖も、現在福建省政府主席に納り、同時に國民黨第五期中央執行委員に擧げられてゐる。

x

x

x

賀耀組 湖南省寧鄉縣の産。日本陸軍士官學校輜重兵科の出身、湖南陸軍第一師第一團々長、第一旅々長、湖南暫編陸軍第一師々長、國民革命軍第四十軍長、第一集團軍第三縱隊總指揮、首都衛戍司令、國民政府軍事委員會委員、國民黨中央政治會議委員、訓練總監部訓練副監、湖南省政府委員兼建設廳長等を経て國民政府參軍長に任ぜられたが、民國二十年末の政變によりて辭職し、民國二十一年來蔣介石が參謀總長となるに及んで參謀次長に就任、現に國民黨第五

期中央執行委員に擧げられてゐる。元來この賀耀組は湖南軍の鬪將として、葉開鑫、劉訓、唐生智等と共に趙恒惕の四師長であり、唐生智と相前後して國民革命軍に響應したが、國民革命軍が北伐のために廣州を出發した當時には、湖南の西部に駐屯してゐたので、唐生智に比較してその出世が遅れ、唐生智の第八軍長に任ぜられた當時には、尙ほ獨立第二師の師長に過ぎなかつた。然しながらその實力は既に一軍と異らず毛炳文、揚永清等がその部下に旅長として所屬してゐた。爾來北伐に参加しつゝ各處に轉戦し、就中民國十六年の冬徐州を占領した際、偶ま下野亡命中であつた蔣介石が日本から歸つて來たため、自ら揚永清の一隊を率ひて南京に歸り、更に上海に蔣介石を迎へた等、蔣介石との關係が益々濃厚を加へ、その後南京政府の主力軍となり、特に第三軍團總指揮に任ぜられ、第四十軍長及首都衛戍司令を兼ねたが、濟南事件の責任を負ふて軍隊生活を引退するに至つた。但し依然蔣介石直系の錚々たる人物として軍界は勿論政界にも亦重きをなしつゝある。

x

x

x

衛立煌 安徽省合肥縣の産、保定陸軍士官學校卒業後、皖北警備第三支隊司令となつたが、民國十八年第四十五師長兼皖北剿匪總指揮に任ぜられ、十九年皖北警備司令及び安徽省政府委員

を兼ね、安徽省南部に駐屯してゐた。そのうち二十年共產軍討伐のため、江西省に出勤、間もなく第十四軍長に任ぜられ今日に及び、同時に國民黨第五期中央候補執行委員にも選出されてゐる。

### (C) 舊四軍系の分子

民國十四年八月、當時の廣東軍を改編してこれを國民革命軍第四軍と稱した。當時の軍長は李濟深であつた。

そしてこの四軍系のうちに於いて北伐軍の進展と共に中央派に屬するやうになつたものの中には、薛岳、吳奇偉等々がある。(但しこの系統のうちに繆培南をも編入して好いのであるが、繆培南は現在廣東軍の總參謀長に任ぜられてゐる關係上、本稿ではこれを西南派とした)。

薛岳 廣東省の産、國民革命軍の北伐開始以來、白崇禧に従ひ第一師長として湖南、湖北、江西に轉戦し、民國十六年浙江省平定後、廣東に歸り、新編第二師長に任ぜられ、同年賀龍、葉挺等の共產軍を破つて沙頭を占領したが、張發奎、黃琪翔等の廣東「クーデター」に参加して

廣西軍を逐ひ、護黨軍南路總指揮となつた。次いで廣東共產黨事件によつて失脚後、江西省に入り繆培南の下に第四軍副軍長となり、民國十七年北伐に参加し、その後張發奎の下に歸り、爾來張と行動を共にして、民國二十年廣東國民政府の成立するや軍事委員會委員等に就任、廣東、南京の妥協後、中央派に轉じ現在では第五軍長(第二十八師、第七十七師を統轄してゐる)、國民黨第五期中央執行委員に擧げられてゐる。

吳奇偉 中央派に所屬し現在では第四軍長(第九十師を統轄)に任ぜられてゐるが、これは先輩張發奎の去つた後を承けて軍長に昇進した所以であり、同時に國民黨第五期中央候補執行委員にも擧げられてゐると雖も、寧ろ張發奎直系と稱して差支がない。

### (D) 舊部系の分子

この系統に屬する分子の中には、蔣介石の先輩に當るものも居り、同時に舊軍閥系として國民革命軍の北伐戦に際し、國民軍に投降したのち、爾來中央派として忠勤をぬきんでてゐるものもある。

兎まれ、これらの各將は、過去に於ける實戰の功勞者であるだけ、その把持する實力も亦雄厚たるを失はず、實力派として最も重きをなしてゐる。

例へばこの系統に屬する何應欽、顧祝同、劉峙、朱培德、陳調元、朱紹良等は、押しも押されもせぬ中央派の元老株であり、そのほか張治中、王伯齡、谷正倫、王懋功、張貞、孫連中、劉鎮華、龍雲、王均、陳紹寬なども亦、蔣介石派の實力系を形成する舊軍部系の錚々たるもので、而して以上の分子は何れも實力派として中央軍を統率しつゝある傍ら國民黨第五期中央委員に擧げられてゐること、他の實力派を構成する分子と同様である。

x

x

x

●●● 何應欽 貴州省興義縣の産。その蔣介石と結びついたのは民國十三年蔣介石が黃埔陸軍々官學校を創設した直前で、蔣介石校長の下に同校の教務長に招聘されたのに始まり、次いで蔣介石の統率する革命軍第一軍の第一師長となり、陳炯明討伐に従事し、民國十五年には蔣介石に代つて第一軍長に任命され北伐に出師した。爾來今日に至るまで終始一貫、蔣介石の代辦者として忠實に務め、幾多の難關を切り抜けて來た人物であり、蔣介石の右の片腕と謂はれてゐた。元來日本士官學校第十一期歩兵科の卒業生で、歸國後貴州軍第五混成旅の旅長に任ぜられ、師長

王文華の引立を受けてその妹を妻とした。その後雲南講武堂の教官となつたが、民國十三年黃埔陸軍々官學校の教務長に招聘され、次いで第一師長、第一軍長となり、北伐軍が江西を陥れた後、第一軍を率ひて東路總指揮となつて福建、浙江を切從へて江蘇省を取り、民國十六年の春所屬第一師が上海に一番乗りを敢行して以來、南京を衝き、長江一帯の地を占領の上、孫傳芳軍を驅逐し、同時に長江を渡つて徐州及び山東省境にまで兵を進めたが、偶ま蔣介石が下野するに至つたのと、北伐軍の江南撤退と共に孫傳芳軍の渡江追撃行はれたため、國民革命軍第一路總指揮として白崇禧、李宗仁軍と協力しながら、孫傳芳軍の南下を要撃し、龍潭の戰でこれを撃破して江北に潰走せしめ以て南京の危機を救つた。その後武漢、南京兩政府の合作と共に中央特別委員會委員、國民政府委員、軍事委員會主席團委員等に任ぜられて、第一軍長を部下の劉峙に譲り、浙江總指令、浙江省政府主席に就任した。次いで南京、武漢の關係緊張するや南京に歸り、武漢の唐生智軍に對抗し、民國十七年の初め蔣介石も亦南京に歸つて國民革命軍總司令に復職するに及び、總司令部參謀長となり、國民黨中央執行委員、國民政府委員、軍事委員會常務委員等に選任せられ、北伐完成後は國軍編遣會常務委員、國民政府訓練總監等に就任した。斯くて民國十八年の春には國民革命軍總司令部武漢行營主任として、蔣介石を代

表しつゝ、漢口に駐屯し、同地方一帯の軍權を掌り、同年末から翌民國十九年にかけて相次いで起つた對馮玉祥、對唐生智戰には、何れもそれに對する指揮に當り、閻錫山、馮玉祥、汪精衛等が擴大會議を開いて北平に新政府を樹立の上反蔣介石軍を起すや、直ちに部下の精銳を率ひて津浦方面に轉じ、徐州行營主任として蔣介石を輔けて督戰し、終局の勝利を收めた。同年冬には軍政部長に、民國二十年には西北邊防軍司令に就任し、同時に空軍總司令を兼ね、同年の秋共產軍討伐のため湘鄂閩剿匪前敵總司令として江西省南昌に赴き、湖南、湖北、江西、福建の各省に於ける剿匪部隊の指揮に當り、次いで陸海空軍總司令部の廢止後、南昌綏靖公署主任となつたが、十二月にはその職を朱紹良に譲り、民國二十一年一月國民政府軍政部長に任ぜられ、贛、粵、閩邊區剿匪總司令を兼任し、再び南昌に赴いて共產軍討伐に當つた。斯かるうち張學良が熱河失墜の責任を問はれて下野外遊するや、蔣介石の意をうけて北平軍事委員會分會長の要職に就任し、中央軍を續々平津線から平津の要地に引き入れ、舊東北軍を始め、山西軍、舊西北軍、その他の反蔣雜軍を監視する一方、蔣介石の北支地盤の確立のために没頭しつゝ、華北の軍權を握り、黃郛政權を牽制するところ夥しく、二十四年北支問題の紛糾化につれて同分會長の職を辭したが、北支に自治運動の起ると共に更に蔣介石の内命を受けて

北支に赴き、宋哲元を始め自治派諸將の切り崩しに奔走した等、その過去に於ける歴史は一つとして蔣介石派の勢力を擴大せんと計つたものたらざるなしと謂つて好い。

x

x

x

願祝同。江蘇省漣水の産。蔣介石と結ぶに至つたのは、蔣介石の黃埔陸軍々官學校長時代に同校の教官兼管理部主任となつた因縁による。蔣介石と共に黃埔學生を率ひて陳炯明軍と戦ひつゝ苦勞を共にした當時からの蔣介石系であり、爾來北伐軍に参加し乍らその地位が順次昇進するにつれ、中央派の領袖株として重きをなすに至つた所以である。元來が保定陸軍々官學校第六期歩兵の出身。最初湖南に於いて黃得慶の部下となつたが、第三革命後退職し民國七年廣東に護法軍の起るや舉兵してこれに響應したのち、民國九年長江上游第四旅七團九連々長に任ぜられた。十一年東路討賊軍副官長となり、十三年には黃埔陸軍々官學校の教官兼管理部長に招聘され、錢大鈞、劉峙、沈應時等と共に前後二回の東征に従ひ、十五年第三師參謀長、副師長を経て第三師長兼第二縱隊指揮を兼任し、同年何應欽に従つて北伐に出師した。斯くて北伐の進展と共に十六年には第一集團軍第九軍々長に昇進し、山東省で張宗昌軍と戦つて功績を擧げ、十七年には北伐の完成につれてその所屬部隊を第二師と改編したため、當然第九軍長を免ぜられて

師長となり、十八年廣西派が武漢に據り反蔣軍を起すや、兵を率ひて江西省に入り第一軍長に任ぜられた。次いで民國十九年閻錫山、馮玉祥等の反蔣介石運動が勃發するに及び討逆第十六路軍總指揮兼第一軍長として討伐に参加し、西北軍の敗退後、劉峙の河南省政府主席に任ぜられたのに對して洛陽行營主任に任命され、洛陽、潼關方面の中央軍を指揮しつゝ同方面の警備に當つた。斯くて二十年七月には國民政府警衛軍長兼警備第一師々長となり、その後石友三の叛亂に際しては南路集團軍第二軍團總指揮として所屬隊を率ひて進攻しつゝこれを擊破し、同年十一月の四全大會で中央執行委員に選舉され、十二月廣東、南京兩政府の合作後蔣介石の下野と共に江蘇省政府主席に任ぜられたが蔣介石の復活について、二十二年以來贛、粵、閩、湘、鄂剿匪軍北路總司令として共產軍討伐のために活躍し、北伐開始以來終始渝らざる蔣介石の腹心として東奔西走しつゝ現在に及び、國民黨第五期中央執行委員に擧げられてゐる。

劉峙 顧祝同と共に蔣介石派の双壁と稱へられつゝある。江西省吉安縣の產。保定陸軍々官學校の卒業後、民國五年護國軍司令部參謀となり、次いで廣東に赴いて大本營參謀に任ぜられ、國民革命軍の成立に際しては第一軍第一師の團長に任ぜられたのが、當時第一軍長を兼任してゐ

た蔣介石との結合の第一歩であつた。次いで民國十五年北伐軍の出師開始に當り、第一軍第一師長に昇進、十七年には何應欽の後を繼いで第一軍長兼第一集團第一軍團軍總指揮となり、津浦線を北上して濟南に入つた。然るに偶ま濟南事件が起つたので賀耀組等の軍隊を收容して湖北に轉じた。斯くて四中全會以後軍事委員會委員となり、十八年には縮編第一師長兼徐海警備司令に任命された。民國十九年閻錫山、馮玉祥等が擴大會議を開いて反蔣運動の火の手を擧げた時には、討伐軍を率ひて韓復榘を助け、山西軍を黄河以北に逐ひ、次いで何成濬と協力して西北軍を破り鄭州を占領した。而してこの亂の平定後、河南省政府委員兼主席、陸海空軍總司令開封行營主任となり、二十年七月石友三の叛亂當時は南路集團軍司令官として河南省から北上、斥蔣軍を擊退の上駐豫綏靖主任に任ぜられ、二十一年には騎兵總司令に就任したが、現在では河南省主席のほか第二路軍總指揮（第一、第三、第六、第二十三、第五十三、第八十の各師及び獨立第一並びに第四旅を統轄）として開封綏靖公署主任を兼任し、國民黨第五期中央執行委員にも擧げられてゐる。

楊虎城 陝西省蒲城縣の產、陝西講武堂卒業後、陝西陸軍第一混成團々長を振り出しに、國民

第三軍第三師長、國民政府軍事委員會委員を経て國民革命軍第二集團軍暫編陸軍第二十一師長、新編第十四師長となつたが、次いで陸軍第十七師長に任ぜられた。斯くの如くその経歴が物語つてゐる通り、元來舊西北軍に屬してゐたのである。従つて民國十八年十二月石友三の反中央舉兵と共に、唐生智が中央に反逆した際の如き、西北側を代表の上武漢進攻軍に加擔し、第九軍長に配置されてゐた。然るにその後馮玉祥の反蔣運動具體化するに及び、干右任の斡旋で中央服従を表明し、次いで馮玉祥、閻錫山の擴大會議開催後に於ける中央對反蔣聯盟軍との決戦が行はれた際には、既に中央軍に加はり、十七路軍總指揮としてその所屬部隊が宋哲元軍を撃退の上西安を陥れ、この大戦の終局後、陝西省主席に任ぜられた。その後陝西省主席の職はこれを邵力子に譲つたと雖も、西安綏靖公署主任兼第十七路軍長（第十七、四十二、新編十三、十四及び陝西警備團を統轄）に就任し、國民黨第五期中央執行委員にも擧げられてゐる。

x

x

朱紹良 福建省閩侯縣の産、日本陸軍士官學校第十期砲兵科を卒業歸國後、貴州陸軍第一師參謀長を振り出しに、貴州靖國軍參謀長、重慶衛司令官を経て、民國十五年蔣介石の北伐に従ひ國民革命軍總司令部參謀長となり、十六年國民政府軍事委員會委員兼軍事廳長に任ぜられ、次

いで陸軍第八師長、討逆軍第六路總指揮に歴任、十九年閩、贛邊防綏靖督辦を兼ね、江西福建省境方面で土匪共產軍の討伐に當り、二十年蔣介石が共產軍討伐のため江西に入るに及んで剿赤軍第三軍團總指揮に就任、同年何應欽の後を承けて南昌綏靖公署主任に任ぜられ、二十一年南昌綏靖公署の廢官と共に閩贛邊防綏靖督辦を專任するに至つた等、國民革命軍總司令部參謀長時代から既に中央派に屬し、現在では馬鴻賓の後を繼いで甘肅省政府主席兼駐甘綏靖公署主任となり、同時に國民黨第五期中央執行委員に擧げられ、邊疆地方に於ける中央派の錚々たる勢力を形成してゐる。因に朱紹良軍を甘肅軍と謂ひ、四個師、騎兵一個師及び砲兵團一團を有し、その兵力約三萬八千と稱へられてゐる。

x

x

朱培德 雲南省安寧縣の産、雲南講武堂卒業後、雲南軍にありて累進し、民國元年軍を率ゐる廣西を経て廣東に入り、孫文の廣東政府に投じ、李烈鈞の下に師長となつたのを振り出しに民國十年駐奧滇軍總司令に任ぜられ、次いで、大元帥府參軍長に就任した等、生へ拔きの國民黨系軍人、寧ろ蔣介石の先輩であつた。その後建國軍第一軍長を経て國民革命軍第三軍長に任ぜられ、蔣介石の北伐に従つて江西に入り、江西軍事廳長を兼ね同年國民黨第二次中央執行委員に

挙げられた。斯くて武漢、南京兩政府對立するや、武漢派に投じ江西省政府主席となり、同年武漢、南京の合作後、中央特別委員會委員、國民政府委員、軍事委員會主席團委員に就任したが、唐生智一派の武漢派と南京政府の軋轢に當り、南京派に加擔して武漢軍に對し、次いで江西省政府委員兼主席、國民革命軍第五路總指揮を兼ね、十七年國民革命軍第一集團軍前敵總指揮として北伐に参加し、十八年江西省政府主席及び軍總指揮を辭任の上、國軍編遣委員會常務委員兼第一編遣區辦事處主任、國民黨第三期中央執行委員會常務委員、參謀總長等に就任、民國二十年南京、廣東に於ける合作後の政變により辭職し同年國民黨第四期中央執行委員に擧げられ、現在では國民黨第五期中央執行委員、軍事委員會常務委員、訓練總監代理等となり、中央系實力派中での最元老として重きをなしつつある。

張治中 四川省成都の産、米國歐維施大學軍事科の出身。留學より歸國後、國民政府軍事委員會軍政廳長、討逆軍武漢行營主任、教導第二師長、考試院考選委員會專門委員等に歴任し、最初から中央系の分子であつた。その後中央陸軍官學校（南京にあり校長は蔣介石）の教育長に就任しつゝ、現在に及んでをり、尙ほ國民黨第五期中央執行委員に擧げられてゐる。

王伯齡 江蘇省揚州縣の産、北洋陸軍官學校卒業後、日本陸軍士官學校に入り第十期砲兵科を修へて歸國以來、雲南陸軍學堂の教官を振り出しに、民國十二年廣東大元帥府高級參謀、黃埔陸軍官學校籌備委員等を経て、同校の訓育部長に任ぜられ、十五年蔣介石が黨軍第一軍を編成するに及び師長に就任し、次いで北伐軍の進出と共に第一軍（何應欽の軍長時代）副軍長となり、後獨立第一師長として江西各地に轉戦したが、南昌の戦に敗れて師長を免ぜられ、十六年長江下流要塞司令及び中央陸軍官學校訓育部長に就任した以來、十七年江蘇省政府委員、十八年國民黨第三期中央執行委員となり、その後専ら政界に活躍し、江蘇省政府委員兼建設廳長を経て現在では江蘇省政府委員に納まり、同時に國民黨第五期中央執行委員に擧げられてゐる。

谷正倫 貴州安順縣の産、日本陸軍士官學校第十一期砲兵科卒業、日本に留學中中國同盟會に加はり、歸國後第一革命に際しては黃興の部下となつたが、第二革命の失敗後日本に亡命し、民國四年歸國して貴州の軍政改革に參與した上、九年貴州省防軍第二混成旅長を経て十年貴州東



路衛戍司令に任ぜられ、同年桂、滇、黔、贛聯軍第四路司令として陸榮廷と戦ひ、中央直轄黔軍總司令に補せられたが、民國十一年失脚して上海に去り、十四年湖南に入り賀耀組の下に屬し、湖南省防軍第一師長に就任、十五年獨立第二師副師長を経て、十六年國民革命軍第四十軍（軍長賀耀組）第一師長として北伐のため津浦線方面に出動し、南京戒嚴司令代理をも勤めた。斯くて十七年賀耀組の南京衛戍司令となるや副司令に任ぜられ、同年賀耀組が濟南事件により失脚した結果、その後を承けて南京衛戍司令となり、民國二十年南京廣東兩政府の妥協成立し、陳銘樞軍の京滬地方に入るや憲兵司令に轉じ、爾來現在に及び、同時に國民黨第五期中央候補執行委員に擧げられ、憲兵司令としては蔣介石派のフアツシヨ強化のために、あらゆるテロ行為斷行の指令本部を統率しつゝ、デー・ペー・ウーの機能を發揮し乍ら、蔣介石のために忠勤を勵んでゐる。

x

x

陳調元 河北省安新縣の産、北洋武備學堂卒業後、江蘇憲兵司令から、江蘇陸軍第五混成旅長、江蘇陸軍第四師長、徐州鎮守使、蘇、皖、魯、豫四省剿匪總司令、江蘇軍務善後事宜幫辦、安徽總司令等の各職に歴任しながら、當時北京政府時代の一軍閥として孫傳芳、張宗昌等と並

び稱へられつゝあつたが、國民革命軍の北伐軍が安徽省境に迫つて來たと共に、漸次國民革命軍に接近し、遂に寢返りを打つた。この間の消息に關し「中華民國政治史」の著者は次の如く語つてゐる——「民國十六年三月一日、張宗昌、孫傳芳は安徽總司令陳調元の態度明らかならざるにより、その蚌埠に於ける軍隊を悉く武裝解除した。ために陳調元は益々革命軍に傾いた。（中略）三月四日上海松江蘇州附近の孫傳芳軍は陸續撤退し、聯軍訓練總監盧香亭、參謀長劉宗紀等特に上海に赴き李寶章と撤軍事項を協定し、畢庶澄も亦松江蘇州一帯を視察し、同時に防務を交替した。五日陳調元は軍隊一旅を率ひて艦に乘じ蕪湖に至り、國民革命軍第三十七軍長の職に就任し、安徽軍務幫辦王普も亦蔣介石に電報して第二十七軍長に就任せる旨を報告した——と。斯くて國民革命軍に寢返つた以來、蔣介石系として終始し、國民政府軍事委員會委員、國民黨北平政治分會委員、陸軍第四十七師長、山東省政府主席、討逆軍第一總豫備隊總指揮、國民政府委員、安徽省政府主席等に歴任し、後安徽省主席はこれを吳忠信に譲り、専ら軍事方面に携はり、現在では中央軍第一路軍長（第四十六、五十五、五十七の三個師及び安徽警備旅を統轄）として贛、粵、閩、湘、鄂剿匪軍豫備軍總司令を兼任、同時に國民黨第五期中央執行委員にも擧げられてゐる。

張貞 福建省紹安縣の産、保定陸軍士官學校卒業後、福建靖國自治軍に入り、民國九年方聲濤宋淵源等の失脚後紹安方面にあり、民國十四年國民革命軍に投じて旅長に任ぜられ、十五年何應欽の北伐軍が福建に入るや獨立第十四師長となりて北伐の先導となり浙江に進攻し、十六年福建省政府委員に任ぜられた。斯くて北伐の完成後漳州に轉じ暫編第一師長となり、次いで新編第一師長を経て、陸軍第四十九師長兼第四百七十七旅長を兼ね、同時に國民黨中央執行委員には第四期以降引続き留任し、兎まれ福建に於ける蔣介石系の最も有力なる實力者として存在しつゝある。

孫連中 舊西北軍中に於ける馮玉祥系の直流、馮玉祥軍の卒伍から身を起して累進し乍ら陸軍第十一師砲兵團長を経て、衛隊旅々長、砲兵旅長となり、馮玉祥軍が國民革命軍第二集團軍と改稱されるに及び同集團軍第二方面軍總指揮に就任しつゝ、第一軍、第十四軍、第二十三軍を統轄し、孫良誠、韓復榘、岳維峻等と並び稱へられてゐた。従つて擴大會議の當時までは、尙ほ馮玉祥と行動を共にし、石友三の叛亂にも、宋哲元の反蔣舉兵にも加擔したが、擴大會議の際に

於ける反蔣軍事に失脚後、馮玉祥の下野と共に蔣介石に加擔して中央に歸順し、討逆第二十六路軍總指揮兼第二十五師長に任ぜられ、山東省濟寧方面に駐屯してゐたと雖も、民國二十年江西省内に於ける共産軍討伐のため江西清鄉督辦に就任、部下を率ゐて江西省に入り、次いで江西省地方整理委員會委員、剿赤軍第二兵團總指揮を兼ね、江西東南部福建省境附近に於いて共産軍討伐に従事しつゝ、現在に及び、その間益々中央派としての色彩を濃厚ならしめ、現に第二十六路軍長（第二十五、二十七師及び騎兵第四師を統轄）となつてゐると共に國民黨第五期中央執行委員に擧げられつゝある。

龍雲 雲南省昭通縣の産、雲南省に於ける雜軍の主腦者として中央派中の有力者であり、現在の雲南軍は討逆第十路軍（總指揮龍雲）の名稱の下に第九十八師、第九十九師、第一百師、第一百七師の四個師を統轄してゐる。もと、雲南講武堂卒業後、靖國軍第三軍長、滇東鎮守使、昆明鎮守使、雲南東北邊防督辦、建國軍第五路軍總司令等に歴任した後、偶々民國十六年二月の雲南に於ける政變（雲南の軍政要人龍雲、胡若愚、張汝驥、李選廷等の五鎮守史が省長唐繼堯の驅逐と、省政府の改組を迫つてその實現を期し得た）により省務委員となり、次いで胡若愚の

土匪討逆に出動せる留守中主席委員となり講武學堂長を兼ね、一時省政府の樞機を握つたが、間もなく胡若愚のクーデターに遇ひ官職を免ぜられて監禁せられた。然るにその後部下の奮闘と共に形勢逆轉して胡若愚の失脚出奔するに及び、再び自由を恢復して省務委員に復任し、反對派を省外に驅逐して雲南の實權を握り、十七年蔣介石の北伐に呼應して雲南省政府主席兼國民政府軍事委員會委員、國民革命軍第三十八軍長、第十三路軍總指揮となり、十八年南京政府の廣西討伐に際しては討逆軍第十路軍總指揮に任ぜられ軍を廣西に進め、現在でも依然雲南省政府主席、第十路軍總指揮に就任、同時に國民黨第五期中央候補執行委員に擧げられてゐる。

王均 朱培徳の系統として純粹な中央派に屬してゐる。雲南省の産、雲南講武學堂卒業後、早くより朱培徳に従ひつゝ漸次昇進し、國民革命軍が編成された際には國民革命軍第三軍の所屬師長から遂に軍長となり、その後國民政府軍事委員會委員、江西省政府委員を経て、民國十七年には第一集團軍所屬の第七師々長に任ぜられ、津浦路警備司令にも勤務したが、現在第三軍長として、第七師、第十二師を統轄し、同時に國民黨第五期中央候補執行委員に選ばれてゐる。

陳紹寬 支那に於ける海軍の第一人者、福建省閩侯の産、南京海軍學堂卒業後、直ちに艦上生活に移り、「二副」「大副」より艦長に昇進、國民政府軍事委員會委員となり、一時國民黨武漢政治分會委員として反南京の色彩なしとせなかつたが、寧漢戦——南京國民政府の唐生智討伐——には、南京側に加擔し、長江艦隊楚有、楚同、永續、江利等を率ゐて討伐戦に参加した。爾來中央派の勢力増大につれて益々蔣介石系に傾き、國軍編遣委員會、海軍編遣辦事處委員、軍政部海軍署長、海軍部政務次長、海軍第二艦隊司令等を経て、現在では國民政府海軍部長、軍事委員會委員に就任しつゝあるほか、國民黨第五期中央監察委員にも擧げられてゐる。

王懋功 江蘇省の産、汪精衛系として、舊山西軍に屬してゐたが、のち漸次中央派に接近し乍ら、最近では益々蔣介石系としての色彩を濃厚ならしめ現に中央派を代表して山西省政府委員となり、同時に國民黨第五期中央候補執行委員に選ばれてゐる。

程潛 湖南省醴陵縣の産、日本陸軍士官學校砲兵科卒業後、湖南都督府軍務司長、湖南護國軍總司令、廣東政府陸軍次長、廣東大本營軍政部長等に歴任したが、民國十五年一月廣東政局の改

組當時（廣州に國民黨第二次全國代表大會の開催された際）には、既に中央執行委員に選出され、同時に何應欽（第一軍長）、譚延闓（第二軍長）、朱培德（第三軍長）、李濟深（第四軍長）、李福林（第五軍長）と相並んで、第六軍長に就任、斯くて北伐戦に出師しつゝ各地に轉戦し、江西省を陥れた時、朱培德等と共に「江西臨時政治委員會委員」となり、九江衛戍司令にも任ぜられたが、蒋介石對武漢派の軋轢激甚となるに及び、武漢派に加擔して武漢政府の成立と共に軍事委員會委員、武漢政府委員に任命され、寧漢の合流後は「中國々民黨中央特別委員會委員」に選ばれ、次いで唐生智の背叛に伴ふ南京政府の唐生智討伐の際には、第四路軍總指揮となりて李宗仁の第三路軍、朱培德の第五路軍と共に進攻しつゝ、唐生智を下野せしめ、湖北省政府主席に選ばれ、更に蒋介石の復職、汪精衛との合作後の四中全會には、國民政府委員及び軍事委員會委員に任ぜられ、同年白崇禧、李宗仁等と共に兩湖善後會議を開いた上、湖南清鄉督辦、武漢政治分會委員となり、漢口に赴いたがその際馮玉祥軍と連絡して武漢挾撃の陰謀を企てたと謂ふ理由で、突如李宗仁軍に監禁され、民國十七年中央執行委員會第百四十八次會議で職權の停止を決議された以來失脚し、その後又廣東、南京兩政府の合作により復職するに至り、中國々民黨中央執行委員にその名を列してゐるが、政治的にはその勢力極めて薄弱である。

劉鎮華 舊西北軍系がその後數回に亘る中央背叛の結果、馮玉祥の勢力失墜と共に、漸次解體するに至り、自然中央派に加擔し乍ら、全く没落し、就中舊西北軍中の錚々たりし韓復榘、石友三、馬鴻逵、孫連中、宋哲元、劉鎮華等がその中央加擔組の主なるものであると雖も、右のうち孫連中と劉鎮華の二人を除いては何れも中央に對して不即不離の態度を持續しつゝある。然るに劉鎮華は最も早く蒋介石派に入った一人であつたゞけ中央からは可成り重く用ひられてゐる。河南省鞏縣の産、北京法政學堂卒業後、民國元年第一革命起るや、陝西河南の騎兵旅を率ゐてこれに投じ、三年陝西混成第五旅長に任ぜられ、七年陝西省長となり、鎮嵩軍司令官に就任、十一年第一奉直戦後には陝西督軍に、十四年陝西軍務善後事宜督辦となつたが、その後胡景翼、岳維俊等の軍隊と戦つて敗れ、潼關方面に退いて馮玉祥軍と對峙してゐたと雖も、十五年馮玉祥軍に投じ、十六年國民革命軍西北軍東路總司令に就任し十七年河南省政府委員兼建設廳長、國民政府軍事委員會委員に轉じ、同年春以來國民革命軍第二集團軍第八方面軍總指揮兼第二十三軍長として北伐に参加し、同年秋天津に入り天津鎮守司令、豫魯邊防司令となつたが、十八年馮玉祥の反蔣舉兵に際し中央に投降して討逆第十一路軍總指揮に拔擢され、十九年

の閻錫山、馮玉祥等が反蔣軍を起した當時は弟の劉茂思と意見合はず、軍を劉茂思に譲つて郷里に去つたが、のち劉茂思も亦中央に歸順するに及び共に西北軍の討伐に加はり、西北軍の敗退後は河南北部に駐屯した。斯くて民國二十年豫、晋、陝綏靖督辦に任命され、同年の夏洛陽方面に移駐して土匪討伐に従事し、石友三の背叛に當りては南路集團軍第一軍團總指令としてその討伐に向ひ、爾來中央派の重要實力系として安徽省政府主席に納まり、同時に國民黨第五期中央監察委員に選ばれ、弟の劉茂思は第十五軍長として時めいてゐる。

### (E) 東北系分子

舊東北系とは張學良を主とする舊奉天軍の一系を指すこと謂ふまでもない。舊東北派の盟主は張作霖であつたが、民國十七年六月國民革命軍の北伐完成を告ぐるや、豫て退却準備中であつた張作霖は、同年六月二日下野通電を發して、六月四日天津發の汽車で奉天に引上げ中、列車ぐるみ爆發して死を遂げ、北平に残つてゐた張學良も亦引續いて奉天に歸つた。斯くて東北軍は北平を退出した後「東三省臨時保安公約」を締結しつゝ過度期の安寧を謀り、七月一日張學良は聲明書を發して灤河一帶に於ける軍隊の撤退をも開始し、四日東三省保安總司令に就任の上、七月二十二日「易幟」を決議しつゝ、十月八日國民黨中央常務會議で、張學良を國民政府委員に任命すべ

く決議した以來、十二月二十九日張學良、張作相、萬福麟等は三民主義を信奉して國民政府に服従するとの通電を發した。

斯くの如くにして舊東北系對中央派との關係が結合され、爾後その發展を來し乍ら現在では蔣介石との關係、若くは中央派の財政系として重きをなす宋子文との連結等に於いて多々益々その密接を加へつゝある。

元來張學良は何等特別の才幹をも持たないと雖も、西洋式の教育を受けたゞけ新人たるを失はず、且つ阿片中毒を全治せしめた點などから推して相當強固な意志をもつてゐるらしく、而かも一面に於いて運動家で、同時にその部下には經驗に富む新進の軍人を網羅してゐる。

その軍人としての履歴は、東三省陸軍講武堂に於いて軍事教育を受け、民國八年七月陸軍砲兵上校に任ぜられたのを振り出しに、奉天暫編第三混成第二團長から、第三混成旅々長を経て、陸軍少將に昇進した際、民國十年の秋張作相等と日本に赴いて陸軍秋期大演習を參觀し、十一年の奉直戰爭に當つては部隊を率ゐて關内に進み、第二梯隊長に任ぜられ乍ら、東路方面の作戰に當つた。次いで事變後第六旅々長となり、東三省航空處總辦に昇進したが、十三年第二奉直戰の勃發

した折には、第二軍總司令に擧げられ、山海關方面の作戰に主力を注いだ。斯くて十四年には東北陸軍第四師長から、三、四方面軍團長に就任、十七年奉天軍の總敗退と、張作霖の爆死後は前記の如き経緯に基き國民政府の統轄を受くることになつたのであるが、十八年二月東北政務委員會の組織と共に、東北邊防司令長官、陸軍空軍副司令に祭り上げられた。

而して張學良を中心とする舊東北系をして、中央との關係を斯くの如く緊密ならしむるに至つた所以は、閻錫山、馮玉祥及び改組派、西南派並びにその他の反蔣各派を打つて一丸とした反蔣介石運動が勃發し、これらの反蔣聯盟が遂に北平に擴大會議を開催し乍ら、反對政府を樹立するまでに進展した直後からであつた。

この反蔣聯盟のなかには張學良も亦、地域的關係からその加盟を懇請され、政府委員に推されたが、結局承諾せず、却つて独自の立場から和平通電を發するなど、これに加擔しなかつたのみでなく、中央の武力鎮壓に對して直ちに蔣介石に加擔して中央擁護の通電を發した等、當時張學良の態度如何が兩派の勝負の岐るゝところであつた。

即ち當時の張學良としては、關外に大兵力を擁しつゝ、北方時局の中心人物であつたのである。

従つて時局の緊迫を告ぐるに至るや、民國十九年三月二十二日中央からは吳鐵城を奉天に特派し、閻錫山は四月七日孔繁濤を奉天に赴かしめて、こゝに兩派の張學良抱き込み運動が開始された。斯く中央はさらに李石曾を特使として派遣の上その説得に努め、遂に李石曾は學良の代表を連れて南京に歸り、そこで胡若愚を青島市長に、學良を陸海空軍副司令に、干學忠を平津總指揮に任命することゝし、且つ中央陸軍大學校長劉光を派遣して委任狀を送る等、極力學良の引入れに努めた。然るに學良は容易にその態度を明らかにしなかつた。それは擴大會議側から、亦七月下旬賈景德薛、篤弼等を奉天に派遣して暗躍せしめたのに對し學良が湯爾和、羅文幹を北平に赴かせるなど相當の色氣を見せてゐた結果からであつた。斯かる間に八月十一日學良は葫蘆島から北戴河に赴き、中央の代表張群、方本仁等と同行し、特に蔣介石からその平津出兵を頻りに督促したなど、九月十八日學良は漸くその態度を表示するに至り、十九日東北第一軍干學忠第二軍王樹常等が、何れもその所屬隊を率ゐて關内に進攻しつゝ平津に駐り、干學忠が平津衛戍司令に任じ、十月九日學良は陸海空軍副司令に就任し、兩派の軍事行動が開かれたと雖も、戦ひの進むと共に中央側の勢力が壓倒的な優勢を示すに到り、先づ山西軍が娘子關

に退いた。石友三が中央に投降し、同時に馮玉祥軍の梁冠英、吉鴻昌も亦寝返り、鹿鐘麟が下野した。勢ひ學良がその態度を表明して以來、津浦線の山西軍は續々退却した。たゞ河南の馮玉祥軍のみ可成り奮闘したが、九月二十九日中央軍が蘭封を占領したため退却しつゝ、十月一日中央軍は開封を、第五縱隊楊虎城軍は臨汝から洛陽を占領し、ために馮玉祥軍は大部分河北を退いて山西省南部に入った。六日中央軍は又鄭州を攻めた等、これによつて平漢、隴海の兩路に於ける中央軍は始めて相互の聯絡成り、新鄭附近の各軍十萬餘人が俘虜となつた。最後に汴鄭が中央軍の手に落ちて以來七個月に亘つた大戦は一段落を告げたのである。

以上の経緯によつて、張學良は新に平津地方に進出しつゝ、舊山西、西北兩軍の地盤を獲得したのであり、次いで民國二十年の國民會議には主席團の一人に推され、二十年六月開催された五中全會では、國民政府委員、中央政治會議委員、陸海空軍副司令に任命され、一躍して政局の第一流人物に祭上げられた。

然しながら民國二十年九月十八日の滿洲事變發生以降、學良の地位は漸次衰退の歩を辿り、現在では單に中央派の實力系を構成する一分子に過ぎないまでに成り下つた。

就中九・一八事變後、北平綏靖主任、北平政務委員會常務委員として、その家の子郎黨と共に北津（河北を主とする）一帯の地盤を維持してゐたが、更に熱河の失墜により、その責任を汪精衛から問責された結果、遂に下野外遊するや、蔣介石は學良の平津に於ける地盤切崩しに着手し、北平軍事委員會分會長何應欽の手によつて、中央軍が續々平津線から平津の要地に進出するに至り、民國二十三年春張學良が復活の上三省剿匪副司令として漢口に着任するや、干學忠（當時河北省政府主席）軍を残し、萬福麟、何柱國、王似哲軍は何れも平漢沿線、漢口方面、河南省の一部、平綏沿線等に集結し、次いで民國二十四年北支問題が緊迫するや、河北省政府干學忠も亦左遷せられ、張學良の下に集まつた。

尙ほ現在の舊東北軍は前記の如く、滿洲事變前に於ける滿洲軍のうち、事變勃發當時關内にあつた第一軍及び第二軍、並びに事變後奉天から關内に逃げ歸つた奉天軍の一部を基幹として編成したものであつた。勢ひ舊東北系を形成する分子は、張學良を主としてその部下の軍人であるが、その主要人物は干學忠、萬福麟、何柱國、王似哲、王樹翰等で、而かもこれら各人の統轄す

る部隊は何れも表面上直接中央政府の管轄下に屬するところとなつてゐるが、裏面に於いては相互連絡し乍ら舊東北系としての團結の強化を策しつゝあること謂ふまでもない（張學良の略歴は前述の各項と重複するためこれを省略する）。

干學忠 X 山東省蓬萊縣の產、通州隨營學堂を卒業後、林西鎮守使署副官長、陸軍第十八混成旅騎兵營々長及び歩兵第二團々長として吳佩孚に屬し、湖北陸軍第十八混成旅々長、陸軍二十六師長、長江上游副司令、聯軍第九師副司令、荊襄邊防總司令等を経て、民國十六年吳佩孚の四川落ちに際し、一時これに従つたが、同年奉天軍に投じて、國民革命軍と戦ひ、奉天第三、四方面軍第二十軍長となり、十七年京漢線方面で馮玉祥軍と戦ひ、奉天軍の總退却と共に關外に引揚げ、爾來東北邊防軍司令官公署軍事參議官臨綏駐軍司令として灤州に駐屯してゐたが、民國十九年奉天軍の入關と共に第一軍長に任ぜられ先鋒として北平に入り、同年天津衛戍司令を経て河北省政府主席となり、北支に於ける東北軍の地盤を確保しつゝあつたところ、その後北支問題の緊迫と共に追はれ、現在では第五十一軍長（第五、百十一、百十三、百十四、百十八の各師、騎兵第一師及び六師を統轄）として、甘肅省政府主席に任ぜられ、同時に國民黨第

五期執行委員に擧げられてゐる。

何柱國 X 東北陸軍歩兵第三旅長として民國十九年の奉天軍入關に際しては同軍を率ひて山海關に出動したが、現在では第五十七軍長（第九、百十五、百二十師及び騎兵第三師を統轄）に昇進、同時に民國二十四年末の國民黨第五次全國代表大會では候補執行委員に選舉された。

萬福麟 X 吉林省農安縣の產。行伍の出身、早くから吳俊陞に従ひ累進して民國九年には東北陸軍第二十九師長に任ぜられ、十年第一奉直戰後東三省陸軍の整理に際し、東北陸軍第十五混成旅長に就任、十四年東北陸軍第十七師長となり、十五年第八軍長として張學良の第三、四方面軍團に加はり、關内に出動しつゝ、十六年山西の傅作義軍を涿州に圍み、十七年涿州の開城後、京漢線方面に轉戦し、奉天軍の總退却に當つては山西軍と戦つて大敗し、同年吳俊陞の死後東三省保安副司令として黒龍江に入り、次いで東北邊防軍駐江副司令長官に補せられた。斯くて民國十九年の東北軍入關後は北平に赴き、張學良を輔け、石友三の反亂に當り總指揮官となりて東北軍の指揮に任じ、滿洲事變の勃發するや張學良の側近にありてこれを輔け、現在では第五十



三軍長として第八、百十二、百十六、百十九、百二十九、百三十師及び騎兵第二師を統轄し、同時に國民黨第五期中央執行委員に擧げられてゐる。

x

x

x

王似哲 日本陸軍士官學校卒業後、滿洲事變前までは、東北軍第七旅長として、奉天北大營に駐屯し事變の發端を啓いた男。日本軍と戦つて敗れ一時錦州に據つたが、後關内に退き、舊東北軍が中央の統轄に歸した以來、第六十七軍長に任ぜられ、第七、百十、百十七の三個師を統轄し、國民黨第五期中央候補執行委員に選ばれてゐる。

x

x

x

王樹翰 奉天省瀋陽縣の産。前清時代から奉天官界にあり、奉天軍機製造廠長を振り出しに各職に歴任し乍ら、東北政務委員會委員、東北邊防軍司令長官公署秘書廳長等を経て、民國二十年張學良が陸海空軍副司令に就任するやその秘書長に任じ、張學良に隨つて北平に赴いたが、次いで南京の政變に伴ひ陸海空軍副司令部の廢止と共に、北平綏靖公署設置せられたため同公署秘書長となり、國民政府委員に任ぜられ、その後張學良の秘書として行動を共にしつゝ、現在では國民黨第五期中央監察委員に擧げられてゐる。

(F) 湖北系の分子

湖北省出身の軍人のうち、何成濬、夏斗寅、徐源泉等は、中央派に於ける實力系としての錚々たるものである。勢ひこれらを湖北系と稱してをり、而かもこの三人を湖北系の三羽鴉と見做しつゝある。最初は單に湖北省の産といふのみに止り、各々の履歴を異にしてゐるだけ、相互間に何んの團結もなかつたが、後湖北省に駐屯するに及んで相當の連絡が保たれるやうになり、遂に中央派實力系の中に於いて湖北系を形成するに到つた。

但し何成濬は、現在中央軍中に於ける先輩であり、早くから革命運動に参加したのに對し、徐源泉は舊軍閥出身で、國民革命軍の北伐戰中に中央に寢返つたもの、夏斗寅はもともと南方系の軍人であるが、何成濬などに較べて後輩である。

x

x

x

何成濬 湖北省隨縣の産、湖北經心書院、兩湖學堂を卒業後日本に留學して陸軍士官學校歩兵科に入り、當時既に孫文等の同盟會に加盟してゐた。歸國後湖北督練公所から陸軍部參謀に轉じ、民國元年には南京留守府總務處長に任ぜられた。民國二年の第二革命に失敗して黃興に従

ひ日本に亡命し、民國元年西南護法政府の成立と共に、孫文が大元帥に擧げらるゝや、留滬長江軍事辦理に選ばれ、十一年福建興泉永各屬民軍總指揮兼閩南善後總辦に就任、十二年廣州に歸つて鄂軍總指揮となり、十五年には總參謀に任ぜられた。斯くて革命軍の北伐に際しては駐滬總代表を命ぜられ、武昌の克復後湖北綏靖處主任として湖北省政府委員を兼ね、十六年蔣介石の南京攻略に當り、南京に赴き軍事委員會委員に就任した。次いで北平行營主任に擧げられ、十八年二月の武漢、廣西派討伐戦には討逆軍第九軍長として武漢の平定後湖北省政府主席に任ぜられ、その後唐生智の叛亂の當時は討逆軍第五路總指揮となり、民國二十年の五中全會では國民政府委員兼中央政治會議委員に選ばれ、現在武漢綏靖公署主任として依然武漢地方を壓へ、同時に國民黨第五期中央執行委員にも擧げられてゐる。

徐●源●泉● 前述の如く元來直隸派に屬してゐた北洋軍閥系の軍人である。湖北省黃岡縣の産、東北陸軍第五十五旅長から直隸軍軍務善後事宜等に歴任した後、國民革命軍の北伐が進展して、浙江、江蘇、安徽の三省に戰雲漲つてゐた折柄、直隸軍が南下の上革命軍に對應すべくその陣容を整へた際には、既に第六軍の軍長に就任してをり、第二路軍司令として南下した。その

後張作霖が關内に乗り出して北京政局を改組し、安國軍（總司令張作霖、副司令孫傳芳、張宗昌、閻錫山）を組織した時には、直魯軍（安國軍第二、七方面聯合軍團）第七方面軍團（總司令褚玉璞）所屬の第六軍長として奮戦したが、北伐軍の攻勢と、西北軍、山西軍の進攻とに敗退し乍ら、遂に鄭俊彥、李寶章等と共に第三集團軍に投降するに至つた。斯くて民國十七年七月の湯山會議で各軍の編制が行はれた際、第一集團軍第十八師長に任ぜられ、次いで石友三の浦口に於ける背叛と唐生智のこれに對する響應の際には、第十軍長に昇進し、完全に蔣介石系となつた。従つて擴大會議による北方の反蔣戦には第十六路總指揮に任ぜられて北方戦局に對應し、益々蔣介石のために盡くし、爾來湘鄂川邊區剿共清鄉督辦を経て民國二十一年蔣介石が豫鄂皖三省剿匪總司令として漢口に入るや、何成濬の下に左翼軍副司令となり、最近、第十軍長（第四十一、四十八師を統轄）として湖北全省清鄉督辦、鄂湘邊區剿匪總司令に任ぜられ、同時に國民黨第五期中央執行委員に擧げられてゐる。

夏●斗●寅● 湖北省黃岡縣の産、卒伍の出身、最初石星川の部下であつたが後湖南に至り趙恒惕の部下となつた。民國十五年葉開鑫に従つて北伐軍との戦争に奮闘中革命軍に投じ、十六年獨立

第十四師長兼宜昌衛戍司令に任ぜられ、同年の武漢、南京兩派の軋轢に際しては南京側に加擔して國民革命軍新編第十軍長となり、次いで革命軍の改編に當り第二十七軍長に轉じ、十七年賀耀組に従つて北伐に出動した。十八年第十三軍長兼第十三師長となり、南京、武漢の戦後湖北全省警備司令、湖北省政府委員に擧げられ、石友三の浦口に於ける叛亂の際には十三路軍長に就任、さらに武漢警備司令、湖北省政府主席となり、討逆二十一路總指揮を兼ね、次いで第十三師となつたが、その後又何成濬の後を承けて湖北省政府主席兼討逆二十一路軍總指揮に任じ、同時に國民黨第五期中央執行委員に選ばれてゐる。

### (G) 準中央系の各分子

準中央系に屬する各分子のうちには相當の猛者がゐる。その過去に於いてはあはよく行けば天下を掌握しやうとして、數回ならず蒋介石を主とする中央の權勢に抗爭を試みたもの、乃至反中央への暗躍を續けた連中さへ少くなかつた。

今は軍事參議院院長兼軍事委員會委員として納まつてゐる唐生智の如き、この準中央系のなかに於ける代表的な存在で、最近蒋介石に投降して剿匪軍の重要な地位に祭り上げられた張發奎を

も同時にこの派に屬する優なるものとして擧げねばならぬ。

中央派對西南派の間に介在し乍ら、絶へず双方に妥協的態度を持しつゝある何健も亦準中央系と稱すべきであらう。何健は嘗て西南派の勢力最も華やかなりし頃、同派に加擔し西南五省聯盟（廣東、廣西、雲南、貴州、湖南の五省が聯盟を形成した頃があつた）の一構成分子たりし時代があつたとは謂へ、もとより中央派に屬すべき客觀的情勢を多分に具有してゐたのである。しかしながらその蟠踞する湖南省の地理的關係が、彼をして純中央系たらしむることを得せしめなかつた所以であらう。

その他準中央系には劉建緒と、馬鴻逵とがある。但しこれらの準中央系は、準中央系としての一團をなしてゐると謂ふのでなく、それらの間に何等の連絡もないところに特徴をもつてゐる以上のほか準中央系に屬するものを列擧せば頗る多いのであるが、こゝでは單に國民黨第五期中央委員のなかから、この系統に入れ得べき分子だけを選出することゝした。

x

x

x

唐生智 湖南省寶慶縣の産、保定軍官學校卒業後湖南軍に入り、湖南暫編陸軍第四師長に昇進した。當時の湖南は趙恒惕が吳佩孚の援助を受けて譚紐庵を驅逐し、賀耀組の第一師、劉鏞の第二師、葉開鑫の第三師と共に第四師を統轄してゐた。而かも同時に湖南督辦を兼ね、且つ保定軍官學校系の領袖でもあつた上、趙恒惕に不満を懐いてゐただけ、早くも國民黨に歎を通じ、民國十五年の春廣州政府との間に妥協成立して國民革命軍に加入した。斯くて國民革命軍に加入したのち所謂湖南事變(驅趙、反吳の實行)を起したのであつた。その結果國民革命軍第八師長に任ぜられ、次いで同年七月長沙を占領後、黨治を勵行して臨時省政府を組織し、湖南全省を平定したのちは湖南省政府主席となつた。爾來北伐軍の進出と共に武漢を陥れ、九江をも占領した際、國民政府が武漢に遷都して武漢政府の成立を見るに至つたが、當時の武漢政府はその軍事的實力の上に立つてゐたと稱して好い。即ち自身が第四方面軍總指揮として、第八軍を三軍、一教導師に編制(第八軍長李品仙、第三十五軍長何健、第三十六軍長劉興、教導師長周瀾)しつゝ、極度に軍の擴大強化を圖つたほか、第九軍(彭漢章)第十軍(王天培)第十六軍(劉佐龍)暫編第三軍(梁壽愷)暫編第五軍(龐炳勳)の各軍をも操縦してゐた。然るにその後蔣介石系を中心とする南京政府の出現につれて、南京政府對武漢政府の對立となり、更に南京武漢兩政府の合作と蔣介

石の下野、中國國民黨中央特別委員會の産生となつたが、かうした經過に對して快くなかつた結果遂に反抗の態度を表明し、南京から派遣した程潛軍と、武漢から派遣した何健軍とが安徽省の南部で衝突したのを動機に寧漢戦が爆發した。勢ひ南京國民政府はその本兼各職を免じて討伐令を下し、李宗仁、程潛、朱培德等各軍をしてこれを討伐させたところその猛攻撃を受けつつ支へ切れず武漢を放棄の上、下野通電を發して日本に亡命し、李品仙、何健、劉興等の各軍は湖南に退却した。爾後蔣介石の復職と共に北伐軍事の完成を告ぐるや、國民政府は民國十七年五月武漢政治分會を成立せしめ、李宗仁を主席に任じたため、兩湖は全く廣西派の實權の下に歸した。然るにその直後所謂湖南事件を楔機として南京政府の廣西派討伐戦が展開するに至つた。この時早くも南京政府側の密令を帯びて復活し、舊部下の糾合に着手した等、遂に討逆軍第五路總指揮に任ぜられた。斯うして湖南、湖北に蟠踞してゐた廣西派は旗を捲いて廣西省に引つ込んだのであり、越えて十八年十一月宋哲元を中心とする西北軍の中央背叛に對しては、右路軍總指揮として討伐戦に加はつたが、十八年十一月石友三の浦口に於ける反蔣舉兵にはこれに響應し乍ら軍事行動を起したと雖も敗れて失脚し、次いで外遊に就いた。然るに歸國と同時に又もや中央軍政界に返り咲き現在では軍事參議院院長兼軍事委員會委員に就任、同時に國

民黨第五期中央監察委員にも選ばれてゐる。

何健。湖南省零陵縣の産、保定軍官學校卒業後、湖南暫編陸軍第十四旅長として唐生智の部下となつた。自然唐生智が國民革命軍に加盟して同軍が國民革命軍第八軍となるやその第三師長に昇進し、唐生智が第四方面軍總指揮となり、その所屬軍の擴張を圖ると共に第三十五軍長に任ぜられたが、民國十六年十月の唐生智を主とする武漢側の中央背叛に基く寧漢戰の敗亡後、湖南軍將領の中央服從通電と共に中央に投じ、その結果改めて第三十六軍長に擧げられた。次いで湖南省政府委員ともなつたが、武漢を中心とする廣西派に對する中央の討伐戰には、逸早く中央擁護を通電の上、討逆軍第四路總司令となり、兩湖の平定後、改めて湖南省政府主席に就任した。石友三の浦口に於ける叛亂と相呼應して唐生智が反蔣通電を發した際には、七十五將領と共にそれに連署してをり、閻錫山、馮玉祥等が擴大會議を開催して反蔣軍事行動を起した當時も亦、これに加擔しつゝ、四十五將領の反蔣通電に署名してゐるが結局軍事行動には參加しなかつた。而して北支の擧兵と前後して起つた西南方面の張發奎、廣西系聯合軍の湖南侵入に對しては何應欽、夏斗寅、錢大鈞等の各師と共にこれを夾撃したため、張桂軍は支ふる能は

ず退却した。以上の如く時には西南五省聯盟に欸を通ずるところあつたが、大體の場合中央系に加擔し、準中央系としての存在を續けつゝあり、現在では湖南省政府主席兼剿匪軍西路總司令兼湖南全省清鄉司令に就任、同時に民黨第五期中央執行委員に擧げられてゐる。因にその軍隊は次の各師である。第十五師（王東厚）第十六師（彭位仁）第十九師（李覺）第六十二師（陶廣）第六十三師（陳光中）第二十四師（陳渠珍）。

馬鴻逵。舊西北軍の出身。甘肅省邈河縣の産。陸軍第五混成旅長であつたが國民革命軍の北伐戰の新陣容がなつた當時には、國民革命軍第二集團軍第四軍長に任ぜられ、同時に河南省政府委員に擧げられてゐた。北伐の完成後湯山會議後に於ける各軍の改編に際しては第二集團軍の所屬として、暫編第十七師長に就任。濟南事件前後孫良誠の山東省政府主席時代には、同省政府委員をも兼ねた。但し爾來山東省接防問題で馮玉祥對蔣介石の關係が面白くなくなり、遂に孫良誠の山東離脱後、馮玉祥の中央に對する反抗的態度が益々露骨となり、中央が馮玉祥に對する逮捕令を出し、その武力討伐に出た際、第二集團軍では韓復榘、石友三等が中央擁護の通電を發したため、これに倣ひ、韓復榘が河南省政府主席に就任したのと共に、その下に政府委員

となり、同時に第六十四師長に任ぜられた。その後石友三の浦口に於ける中央背叛と相呼應して唐生智が反蔣舉兵を敢行した折亦も同様陳調元と共に逸早く中央擁護を表示して討逆軍第十一軍長に擧げられ、越へて馮玉祥、閻錫山等を主とする擴大會議の反蔣舉兵に對し、韓復榘と共に和平運動に盡瘁しつゝ中央擁護に終始したと雖も、結局中央軍に組し、斯くて中央系としては寧ろ唐生智、何健以上に蔣介石に接近しつゝ、現に第十五路軍長兼寧夏省政府主席に就任し、同時に國民黨第五期中央候補執行委員に擧げられてゐる。因に第十五路軍は寧夏省雜軍と謂ひ、三個師と騎兵一旅及び砲兵團一團を擁しその兵力約三萬以上に達する。

x

x

x

劉建緒 何健の系統に屬し、陸軍第十九師副師長兼第五十五旅長、陸軍第十九師長を経て、その後第二十軍長（第十五、十六師を統轄）及び湖南省政府委員を兼ね、同時に國民黨第五期中央候補執行委員に擧げられてゐる。

x

x

x

張發奎 廣東省始興縣の産。汪精衛系の猛將としてその所屬部隊は北伐當時から鐵軍と謂はれてゐた、武昌陸軍軍官學校卒業後、最初李濟深の部下となつて果進し、國民十五年以降蔣介石

の北伐に従ひ江西に轉戦しつゝ、武漢占領後は第十一軍副軍長兼武漢衛戍司令に任ぜられ、十六年第四軍長に進み、國民政府軍事委員となつた。斯くて河南省に進撃しその功により、第二方面軍總指揮兼武漢留守主任となり、武漢派の重鎮として南京側に對抗した。間もなく南京攻撃のため軍を率ゐて江西に入つたが、武漢政府が共產黨排除を決議するに及び、部下の賀龍、葉挺等はこれに反對して南昌に暴動を起したため、これを討伐し、次いで自らも第二方面軍總指揮を辭して武漢政府を離脱し乍ら、その所屬部隊を部下の第四軍長黃祺翔に委ねて水路廣東に歸り、李濟深を擁して廣東政治分會の下に臨時廣東軍事委員會を組織の上、廣東の實權を握つた。然るに同年末李濟深北上の留守中政治分會主席及び臨時軍事委員會の主席を代理してゐたところ、所謂共產黨事件が発生し、共產黨と結托して廣東を攪亂したとの理由で、討伐令を出されたため、責を負ふて下野し上海に赴いた。その後民國十七年蔣介石の復職と共に再び北伐軍を起すや、起用せられて第一集團軍第四軍長に任ぜられ、津浦線方面に轉戦し、北伐完成後國民革命軍の改編により第四師長に就任したが、同年廣西派が武漢に據つて中央に背叛するや南京軍の先鋒となり、武漢を陥れ、更に進んで宜昌を占領した。次いで汪精衛一派の策動と馮玉祥軍の不穩とにより、再び動亂を生ぜんとするに及び、蔣介石から津浦線方面へ移駐を命ぜ

らるゝや、突如反蔣通電を發して反蔣戰の火蓋を切り、南下して廣西に入つて、李宋仁、白崇禧等と妥協しつゝ、これと合作（所謂張桂軍と稱へた）の上、屢々廣東を脅やかした。民國十九年馮玉祥、閻錫山、汪精衛等の北支に反蔣軍を起すや、これに呼應して廣西軍と共に湖南に侵入し、長沙を占領したが、廣東軍のため退路を絶たれて大敗し廣西に遁入した。爾後廣西西部にあつて共產軍討伐に従事したが、二十年兩廣妥協の上、廣東に獨立政府の樹立を見るに至るや、これに参加し、第四集團軍前敵總指揮として湖南方面へ進出したと雖も、偶々南京廣東兩政府の妥協成立のため沙汰止みとなり、汪精衛對蔣介石の合作成るに及んで蔣介石派に接近し、共產軍討伐に従ひ、現在國民黨第五期中央監察委員に選出されてゐる。

#### (H) その他歸順組の各分子

以上類別した各系統のほかに、尙ほ歸順組とも目すべき分子がある。現在國民黨第五期中央委員に選舉されてゐる軍事實力派のうちから、この系統に屬するものを拾ひ上げると次の如く鄧家彦、陳慶雲、許崇智、李烈鈞、李福林、陳策、劉湘、張飭、熊克武等々を數ふることが出来る。然し乍らこの系統に屬する分子は許崇智、李烈鈞等が元老株とし

て納まつてゐるほか、その他個々の分子の實勢力に至つては比較的微弱たるを失はず、自然中央派に屬する實力系としても亦、重要視すべき存在ではない。

鄧家彦 廣西省の産。日本留學生出身で東京高等商業學校卒業後、更に米國に留學し、歸國して以來、參議院議員となり政界に活躍したが、次いで軍界に轉じ、國民革命軍第八路總指揮部秘書長に就任、同時に民國二十四年末國民黨第五期中央候補執行委員に選舉された。

陳慶雲 廣東省中山縣の産。日本で中等教育を受け、民國三年陸孟飛等が英國で航空學校を経営した際、孫文から監督に派遣せられたが、同校の解散と共に米國に赴き、張惠長等と航空學校に入り、民國六年卒業、同年歸國して大元帥府副官に任ぜられ、その後陳炯明の幕下となり飛行隊長に任ぜられ、九年陳炯明が廣東恢復戰を起すや、空軍を以てこれを援け、後陳炯明の叛逆に遭ひて孫文に従つて上海に去つた。斯くて孫文の廣東を恢復するに及び廣東に歸り、航政局長、公用局長等に歴任し、革命軍の北伐出師の際は李濟深の下に飛行隊長となつた。爾後潮州要塞司令を経て、虎門要塞司に任ぜられたが、民國二十年廣東の獨立後、廣州市公安局長を兼

ね、同年末廣東南京の妥協に伴ひ北上して京滬間にあつたが、二十一年廣東に歸り、陸戰隊司令に就任。同年陳濟棠が廣東海軍に手入れせんとするや、陳策と共にこれに反對して香港に去り、それ以來蔣介石系に歸順し、現在中央軍の航空關係に従ひ同時に國民黨第五期中央候補執行委員に選ばれてゐる。

許崇智 元來西山會議派に屬してゐた實力派の元老。廣東省番禺縣の産。前清時代日本に留學の上、陸軍士官學校に入り、歩兵科第二期生として卒業した。東京時代既に孫文等の同盟會に加盟し、歸國後、福州新軍第十鎮教練官參謀、武備學堂總教官等を経て標統に補せられ、第二十協統となり、第一革命當時には閩軍總司令官に擧げられた。時に南京が未だ降らなかつたため、閩軍北伐支隊司令官としてその所屬部隊を率ゐて江蘇省に進出の上戦争に参加し、その後陸軍第十四師長に任ぜられた。而して第二革命の際には閩督軍孫道仁に迫つて獨立を宣布させたが失敗した結果、日本に亡命し、次いで中華革命黨軍事部長に就任しつゝ、民國四年の「肇和事變」には、その規劃に參與するところあり、民國六年孫文に隨つて廣東に赴き、奥軍第二軍長に就任され、十一年陳炯明の叛亂の際には、北伐軍總指揮として江西に赴き作戦中であつ

たところ、變を聞いて閩南に歸り、次の年廣東に赴き、孫文の大元帥就任と共に、東路討賊軍總司令兼第二軍長を兼ね、陳炯明と江東に戦つてこれを敗つた。十三年國民黨の改組するや、第一期中央候補監察委員に選出せられ、十四年には奥軍總司令兼大本營參謀となり、國民政府の成立に伴ひ國民政府委員、軍事部長兼廣東軍政廳長に就任したが、同年八月奥軍總司令の職を辭し、廖仲愷事件の發生した當時は、特別委員に推されたと雖も、九月辭職して上海に去り、十五年三月上海で開かれた第二期中央執行委員に選ばれ、西山會議派にくみし、十六年南京、武漢の合作時代には中央特別委員會となり、十八年唐生智等が反蔣軍を起した際にも亦、香港より蔣介石に下野勸告電を發して、唐生智に加擔した等、同年十二月中央から逮捕令を發出するに至つたが、十九年十二月始めて逮捕令を取消され、國民政府委員に復活。爾來中央派の歸順組として、現在國民政府監察院副院長兼國民黨第五期中央候補監察委員に擧げられつゝある。因に許崇智は當代支那に於ける有數の用兵家と謂ふ折紙をつけられてゐる。

李烈鈞 國民黨の元老であるが、元來無所屬で、何れの派系にも組しなかつた。たゞ馮玉祥派と目されてゐた。江西省武寧縣の産。南京陸軍中學卒業後、日本に留學して成城學校から陸軍



士官學校砲兵科に入り、卒業するや同盟會の會員となり、宣統二年歸國と同時に、雲南に於いて教官に任じ、第一革命の際には江西省に歸つて、同盟會江西支部長に任ぜられ、江西都督に推された。然るに民國二年袁世凱はこれを免職の上、黎元洪をして江西都督を兼任せしめた等、七月江西に據つて袁世凱打討を策し、第二革命蜂起の口火を切つたと雖も失敗し、袁世凱が五萬兩の懸賞つきでその逮捕令を下したため、遂に日本に亡命し、更に佛蘭西に赴き、在留三個月を経て、新嘉坡まで歸つた際、偶々帝制の議が起つた結果、南洋から雲南に至つて獨立を宣し同時に護國軍第二軍長に任ぜられ、五年軍務院が肇慶に成立した當時、撫軍に就任、廣東で龍濟光と作戦の上偉勳をたてたが、遂に下野し、民國六年國會解散後廣州に至り滇軍總司令に任ぜられ、次いで大元帥府參謀部長となり、十一年には孫文が部隊を率ゐて北伐に出帥し、大本營を韶關に移すや、北伐軍中路總司令に補せられ、江西省深く進攻したと雖も、偶々陳炯明の叛亂に遭遇して歸省し、屢々陳炯明軍と衝突して閩南に入り、十二年三月廣東政府から閩贛邊防督辦に任命せられ、十三年の國民黨改組に當つては、第一期中央執行委員に選出された。斯くて同年十月日本に赴いたが、幾ばくもなく歸國し、馮玉祥の吳佩孚打倒後、北上して馮玉祥軍の帷幕に參した等、段祺瑞執政から參謀總長に推されたが、就職せず、十五年第二期中央執

行委員に選ばれ、革命軍の北伐には南下の上、軍事を計劃し、十六年二月江西省政府の成立に伴つての主席となり、十七年二月の四中全會に於いて國民政府委員に推舉され、十八年三月第三期中央候補監察委員に選ばれ、十九年汪精衛、閻錫山、馮玉祥等が北京に中央黨部擴大會議を開催しつゝ、反蔣政府を産生した際、國內民族部委員に推されたが結局參加せず、二十年五月廣東に於いて、陳濟棠等が反蔣を通電の上、獨立政府を組織した折も亦、國民政府委員に選ばれたに拘らず、依然上海に止つて讀書に耽り、遂にこれに參加しなかつた。斯くて二十一年中央政府から、軍事委員會委員に選ばれて以來、引續き現在に及び、同時に國民黨第五期中央監察委員に舉げられてゐる。

李福林 李烈鈞と同じく國民黨内に於ける軍人としての元老株、廣東省番禺縣の産。中興會時代からの古い國民黨員で、胡毅生に隨つて革命運動に奔走し、宣統三年黃花岡の役では、番禺に響應して事を圖つたが成らず、その後陳炯明と廣東で義旗を擧げ、民國元年廣東都督府警衛軍司令に任ぜられ、のち廣惠鎮守使に轉じ、九年鎮守使の撤廢と共に、第一善後區處長に任ぜられて、その所屬軍を福軍と稱へた。十一年の陳炯明事變には、江西省に入つて北伐に従事し

つゝあつたが、許崇智等と共に福建に轉じて、東路討賊軍を組織し、同軍の司令に任ぜられ、廣州に入つた。その後一度廣州市長を兼任したが、十四年の雲南廣西軍の解散に盡力するところ多く、革命軍第五軍長に擧げられ、十五年革命軍の北伐に當つては、その所屬隊と共に廣州に滞留し、十六年十一月の廣州第一次事變には張發奎の廣西系解決に參與したが、十二月の廣州第二次事變には、共產黨が廣州に依據してゐたのに當り、奮戦の上、省城を奪回し、廣州政治分會臨時主席となり、廣西省政府主席黃紹雄が、兵を率ゐて廣州に進攻した時、下野して以來中央系となり、民國二十年廣東の獨立にはこれに加つたと雖も、南京、廣東の妥協後は準中央系として現に國民黨第五期中央監察委員に選ばれてゐる。

陳策 廣東省の産。黄埔水師學堂卒業後、民國十一年海軍攻防司令となり、十六年海軍正司令に任ぜられ、次いで第八路總指揮部艦隊司令に昇進、十八年國民黨第三期中央候補執行委員として瓊崖警備司令を兼ね、二十年廣東の獨立と共に海軍第一艦隊司令に就任、同年國民黨第四期中央候補執行委員に擧げられ、同年末廣東、南京兩政府の合作後西南三機關の成立により、西南執行部常務委員となつたところ、二十一年陳濟棠が廣東海軍に手入れしようとした際、こ

れに反對して軍艦中山、飛鷹等を率ひ海南島に去り、爾來陳濟棠と對立するに至り、現に歸順組として中央派に加擔し、國民黨第五期中央執行委員に選ばれてゐる。

張鈞 河南省新安縣の産。保定陸軍速成學校砲兵科卒業後、陝西軍に入り、次いで革命軍に投じて東路軍司令に就任し、第一革命ののち陝西陸軍第二師長、漢中警備司令に任ぜられ、袁世凱の帝制問題起るや、これに反對して陝軍司令、靖國軍副司令となつたが、志を得ず下野し、軍界を去つて實業界に入り、河南省泗水で民生煤礦公司を經營した。十八年馮玉祥の失脚と共に韓復榘に招かれ、陝西、山西方面の舊部下を叫合して開封に赴き、一時省政府主席を代理し、十九年擴大會議の反蔣舉兵に際しては、南京政府から討逆第二十路軍指揮兼第六十八師長に任ぜられ討伐に参加した。その後河南省政府委員兼民政廳長となり、二十年河南清鄉總局副局長に任命され二十一年河南省政府民政廳長を辭したが、引續き江西清鄉督辦に擧げられ、第二十二路軍長（第四十五、七十五、七十六の各師及び騎兵第一師を統轄）に就任、同時に國民黨第五期中央候補執行委員に選ばれてゐる。

熊克武 四川省井研縣の産。古い日本留學生。民國元年黃興と共に廣東總督衙門を攻撃して失敗し、身を以て逃れ、第一革命後上海で四川軍を組織し四川に入り重慶に駐屯した。第二革命の失敗と共に海外に亡命したが、民國四年袁世凱の帝制問題發生の際、四川に歸り、雲貴事變起るやこれに呼應して四川に事を擧げ、五年重慶鎮守使となり、次いで川邊鎮守使に轉じた。七年唐繼堯が、劉存厚を驅逐して四川を獲得るや、川人治川主義を標榜しつゝ、八年四川督軍に任ぜられ、その後雲貴派と疎隔して排斥され、成都を退き、川北に據り、劉存厚と妥協して四川靖國軍を起し、九年雲貴軍を擊退して四川を恢復し、北京政府から四川省長に任命された。然るにその後又四川に於いて劉存厚と對立したため、十年討劉軍を起し、劉存厚を驅逐したが、劉湘が代つて軍權を握るやうになつた爲、遂に失脚し、十二年四川の獨立と共に孫文と聯絡をとり、四川軍を組織の上、北方側の楊森に對抗し、のち貴州に轉じたが、十三年奉直戰に際し湖南に入り、十四年廣東で許崇智を驅逐して全權を握つたが、同年蔣介石に捕へられて投獄せられ、翌年出獄、十六年國民政府委員に任ぜられ、二十年廣東の獨立宣言に参加し、廣東政府委員に就任したと雖も廣東、南京の合作後、専ら中央派に加擔し、現に國民黨第五期中央監察委員に擧げられてゐる。

劉湘 四川軍閥の一人であるが、中央に歸順して以來、蔣介石系と結び、同地方に於ける最大の勢力把持者となつた。四川省も亦國民革命軍の北伐完成後、その將領は何れも外形的には國民政府に服従し、各々革命軍長に任ぜられてゐた（第二十軍長楊森、第二十一軍長劉湘、第二十二軍長賴心輝、第二十三軍長劉成、第二十四軍長劉文輝、第二十八軍長鄧錫侯、第二十九軍長田頌堯といつたやうに。）但しその割據の情勢たるや、舊封建時代と異るところがなく、依然地盤の爭奪を事とする軍閥戰を繰り返へしつゝあつた。然るに革命軍の北伐戰に敗れた吳佩孚が四川に逃走して楊森の白帝城に身を寄せたため、國民革命は民國十六年末楊森を懲罰に附することゝし、その地盤を劉湘（第六路軍總指揮）、劉文輝（同副指揮）に交付した上、十七年二月十一日の中央政治會議で四川省政府の改組を決議すると共に、劉文輝を主席に任じて楊森の懲罰令を取消したが、十二月楊森は新に四川同盟軍を組織して自ら四川省主席となり、劉湘、劉文輝の討伐を通電したので、十八年一月國民政府は再度楊森の懲罰令を下し、劉湘、劉文輝にその討伐を命じた。従つて楊森軍は大敗し又省政府の改組が斷行された。爾來四川省は劉湘が中央系を（劉湘が南京派に加擔したのは民國十六年武漢、南京兩政府の分裂直後からである）

劉文輝が反中央派を（劉文輝は反中央派として汪精衛系に近かつた）代表し、その他の各將領も亦兩派に岐れ、内亂の絶え間なかつたこと前述の如くである。その後民國二十年南京政府から四川善後督辦に任ぜられ、次いで同年の夏長江上游剿匪總指揮に就任したのを動機に劉文輝と結んで他の諸將領を壓する大勢力を築いたと共に、二十一年劉文輝の西藏軍と戦へる隙に乘じ、その地盤の侵略を企て、これと戦ひ更に四川特有の軍閥戦を展開するに至つたと雖も、爾後共產軍の西漸につれて蒋介石の四川に對する軍事的經濟的統制の成功と共に劉湘は中央系としてその勢力の増大を加へ、四川省政府主席、四川善後督辦、四川剿匪總司令及び第二十一軍長を兼ね、同時に國民黨第五期中央執行委員に擧げられてゐる。因に四川軍の内容はほゞ次の如くである。

劉湘軍（第二十一軍）五個師、教導師一、模範師一、獨立師一、手槍旅、警衛旅、航空隊を有してその總兵力十六萬と稱へられてゐる。

劉文輝軍（第二十四軍）七個師、西康屯殖司令部、警備司令部等その兵力約三萬餘。

鄧錫侯軍（第二十八軍）五個師、混成旅一、獨立司令部、兵力約四萬餘。

羅澤洲軍（第二十三師）三個旅からなりその兵力約一萬餘。

田頌堯軍（第二十九軍）五個師に分れその兵力約三萬五千。

李其相軍（國民軍第六師）その兵力約一萬六千。

楊森軍（第二十軍）三個師よりなりその兵力約二萬。

劉邦俊軍（第二十三軍）二個師よりなる。

## 第二節 文 治 派

均しく中央系に屬する實力派と稱するうちに於いても前節に略述した如く、あらゆる系統に分れてゐるやうに、文治派にも亦、その構成分子を異にする幾多の派別が存在し、而かもそれらが打つて一丸となり、且つ實力派と相協力しつゝ中央派の窮極の目的たる蒋介石を中心とする獨裁強化への工作に邁進しつゝあるのであつて、そこに中央派の特徴を表現してゐる。

而して今これらの文治派を構成する各分子を區分すると、大體次の如く

- (一) C・C 團（陳果夫兄弟を中心とする最高文化統制陣）
- (二) 考試院系（戴天仇を首班とするもの）
- (三) 元老派（吳稚暉、張靜江等の各元老連の一系）

(四)新官僚派(朱家驊等の一派)

(五)財政系(宋子文兄弟、孔祥熙等を主とする財政、財界の牛耳を握る一派及びその系統)

(六)政學會系(楊永泰、張群等の如く舊政學會系)

等々と大別出来るのであるが、以上の各系統の分野はほゞ限定せられ、黨部と、中央政府部内乃至地方政府部内に各々その根を張つてゐる。

x

x

x

就中、黨部に於ける活動は、C・C團がその牛耳をとつてゐる。即ちC・C團は黨部を中心とする一種のファツシヨ團體として、あらゆる工作に努めつゝあり、とくに近來文化統制に乗り出し、この方面に絶大なる勢力をもつに至つた。

x

x

x

その他財政系の勢力も亦、C・C團に次ぎ中央派内部に於ける権力は前節の實力派と財政系及び後節に略述する藍衣社を別働隊とするこのC・C團との三派鼎立によつてあらゆる諸工作への邁進と、その組織の擴大強化とを策謀してゐるのである。

(A) C・C團とその分子

C・C團といふのは陳果夫、陳立夫の兄弟を盟主とするグループを指すこと周知の如くであり、民國十八年陳果夫兄弟等が浙江系國民黨員を叫合しつゝ、蔣介石をその首領に推し、共產黨、國家主義派並びに社會民主主義派及びその他の反中央各派を消滅すると同時に、支那統治の獨裁化を促進すべきを目的として組織せるもので、蔣介石の共產軍討伐に當つては、とくに重要な役割を果たし、政治的參謀本部の別名を以て聞へたことも亦、國民黨發展史上周知のことからに屬してゐる。

即ちこれを換言せばC・C團は最初共產黨の組織運動乃至その文化運動及び共產主義的イデオロギーの普及運動等に對する一種の抗爭的組織運動への實踐形態として產生したものであり、次いでその他の反中央運動の諸陣營に對抗する團體としての職能をもつに至り、その組織が無形的に存在しながら、その勢力は國民黨の一黨務系統から、遂に各種の社會團體に向つて飛躍的な發展をなし、近來ではさらにファツシスト的細胞組織(政治探偵網)への發展強化をすら確立するに至つたのであつた。この點に於いて「三中全會前の國民黨各派系」の筆者「何甫」氏の如き次の

やうに

「或る時期にC・C團の三字が頗る人の注目するところとなつた。甚だしきに至つてはC・C團は中央俱樂部の縮寫であるとすら稱へてゐるが、これは似て非なるものである」

とすら解説してゐるのであるが、C・C團は中央俱樂部の縮寫でないまでも、陳果夫兄弟を盟主とするグループであることに相違なく、C・C團の主要工作は一切の各種黨派を叫合して、ファツシストの主觀的勢力を擴大する傍ら、伊太利、獨逸のファツシスト理論を模倣し乍ら、支那獨特のファツシスト理論の完成に努めやうとする點にあり、この理論的基礎をなすものは、陳果夫の述作になる「唯生論」であつて、このグループは陳果夫兄弟を主となし、南京の國民黨中央組織委員會を本據に活躍を續けて來たのであつた。

とくに最近に至つて、このC・C團を中心とする文化運動が著しく鋭化し、就中文化統制運動に乗り出し、勢ひ新文化建設運動にまでその手を伸ばしたのである。斯くの如くにしてC・C團の文化統制運動は可成り猛烈で、そのためにあらゆる言論機關を統制し、一方蔣介石の主唱し出した「新生活運動」乃至「復古運動」及び「新經濟建設運動」と相呼應しつゝ、猛活動を續けて

ゐるのである。

これらの諸工作は各國に於けるファツシヨ運動とその軌を一にするものであるが、斯うした運動の總本陣はC・C團であると稱して好い。

尙ほ且つ民國二十四年の春陳立夫の手で創立され、爾來同人によつて主宰されつゝある「中國文化建設協會」の新文化建設運動も亦、このC・C團の活躍の一種と見做して好く、「中國文化建設協會」は、上海で雜誌「文化建設」を發行しながら、その主張の宣傳に努め、各地に「文化建設協會分會」を設けて活潑な活動を行つてゐる。

以上に略述するが如く、國民黨部に於ける組織、宣傳等の基礎工作が、このC・C團の盟主陳兄弟の手に握られてゐるだけ、黨部を中心としてC・C團に所屬する分子が頗る多く、これをその出身地別に區分すると大體次のやうに（但し現在の國民黨中央委員のなから）

(一)長江系（主として安徽、湖北、上海等の出身者——吳醒亞及びその部下は湖北省黃梅縣人で、専ら黨務の方面に根を張つてゐる）。

(二)江浙系（張道藩、余井塘、陳布宙、會養甫等の江蘇浙江兩省の出身者を指す）。

- (三) 福建系 (陳肇英、丁超五等を主とする福建省の出身者)
  - (四) 江西系 (江西省出身の分子——程天放等)
  - (五) 川貴系 (四川、貴州等の出身者を稱し曾擴情、方覺慧等及びその系統)
  - (六) 上海系 (上海系と呼ばれるうちの主なるものには吳開先、潘公展等がある)
  - (七) 華僑系 (華僑出身の富豪、周啓剛、肅吉珊等も亦C・C團に屬してゐる)
  - (八) 湖南系 (湖南省の出身者は實力派に多く、文治派には周佛海等があるのみ、周佛海はC・C團の理論家である)
  - (九) 準C・C團の一 (王陸一、千右任派の後進がC・C團を利用せんとする傾向あり、従つてこれらの系統を準C・C系のなかに入れて好く、高一涵、超五、聞亦有等も亦この系統に屬してゐる)
  - (十) 準C・C團の二 (邵力子、葉楚傖等の一派を指し、この一派はまた楊虎城、朱紹良等の實力派とも合流する傾向があり、王伯群をもこの系統に偏入すべきである)
  - (十一) 現代評論派 (石英、王世杰等がこの派を代表してゐる)
- 而してC・C團に屬する各分子のうち、現在中國々民黨中央委員に選出されてゐるのは、以上

列舉したものゝほか、左の數十名に達してゐる。

徐恩會、洪蘭友、李宗黃、王法勤、苗培成、吳忠信、王祺、戴愧生、張冲、蕭同茲、洪陸東、  
 焦易堂、李生達、田崑山、賴璉、谷正鼎、愈飛鵬、蕭錚、吳挹峰、朱霽青、時子周、張強、黃  
 實、余俊賢、羅家倫、李敬齊、謝作民、段錫朋、陳泮嶺、柳亞子、麥煥章、方治、魯蕩平、雪  
 震、歐陽格、劉文島、李次溫、何思源、徐堪、陳耀垣、王用賓、劉守中、樂景濤、鄭占南、茅  
 祖權、張厲生、周伯敏、

×

×

×

●●●●● 陳果夫 浙江省吳興縣の産。革命の先輩陳其美の甥、浙江陸軍小學卒業後、南京陸軍中學に學  
 び早くから叔父陳其美の片腕として國民革命運動に活躍したが、革命の失敗と共に一時商業に  
 従事した。當時蔣介石も亦陳其美の部下であつた關係上、相識り爾來その腹心の部下として現  
 在に至つた所以である。その後廣東に黄埔軍官學校の設立せらるゝや、その教官に任じ、また  
 中央黨部の組織部長をも代理した。従つて民國十五年第二次全國代表大會の際には國民黨中央  
 監察委員に擧げられ、次いで國民革命軍の北伐進展に伴ひ、東南を收復するに及んで上海臨時  
 政治分會委員に任命された。同年九月には南京で國民政府委員及び監察院副院長となり、十八

年三月國民黨第三次全國代表大會では中央執行委員に選ばれ、その後組織部副部長を経て部長になり、民國二十一年廣東、南京兩政府の妥協により、國民政府の改組せらるゝに及び、國民政府委員に就任、爾來江蘇省政府主席を兼ね、同時に二十四年末の第五次全國代表大會では中央執行委員に選ばれ現在に及んでゐる。

陳●立●夫 ● 陳果夫の實弟、米國ピッツバーグ大學卒業、國民革命軍の北伐當時は革命軍司令部機要科長となり、十七年訓練總監部政治訓練處長を経て、十八年一月建設委員會委員、國民黨第三期中央執行委員に擧げられ、中央黨部秘書長となり、中央黨部組織部が組織委員と改組するに及び同委員會主任に任ぜられ、現に國民黨第五期中央執行委員に選ばれてゐる。

吳●醒●亞 ● 湖北省梅縣の産、同盟會時代からの國民黨員であり、廣東國民政府軍事委員會秘書を振り出しに、安徽省政府委員兼民政廳長、同政府主席代理等に任ぜられ、民國二十年省政府の改組に際して辭任し、現に上海市政府社會局長に就任、同時に國民黨第五期中央執行委員に選ばれてゐる。

張●道●藩 ● 貴州省盤縣の産、英國に留學して倫敦大學を卒業した文學士、廣東農工廠秘書を振り出しに、南京特別市政府秘書長、國民黨中央黨部組織部秘書、江蘇省黨務指導委員會委員、青島大學教授長等を経て、江蘇省政府委員兼教育廳長に任ぜられて現在に及び、同時に國民黨第五期中央候補執行委員にも選出されてゐる。

余●井●塘 ● 江蘇省興化縣の産、米國イオリ大學經濟科の出身。歸國後國民黨中央黨部組織部長代理、南京中央政治學校々長等を経て、國民黨第二期中央候補執行委員、考試院考選委員會委員、國民黨第四期中央候補執行委員に任ぜられつゝ、現在に及び國民黨第五期中央候補執行委員に選出されてゐる。

陳●布●雷 ● 浙江省慈谿縣の産、浙江高等學校文科卒業後、上海天鐸報主筆、寧波中學校及び師範學校教諭となり、そのゝち上海商報總編輯、上海時事新報總編輯、浙江省政府秘書長、浙江省政府委員兼教育廳長、國民黨第三期中央候補監察委員、中央黨部宣傳部副部長、國民政府教育



部常務次長等に歴任し、のち教育部政務次長として中央黨部宣傳部長を兼ね、民國二十年國民黨第四期中央候補監察委員に擧げられ、國民政府の改組と共に、浙江省政府委員兼教育廳長となつたが、現在では第五期中央執行委員に選出され、同時に中央政治委員會祕書長に擧げられてゐる。

x

x

x

會養甫 廣東省平遠縣の産、英國ピツバーク大學に入り採鑛工學を專攻して歸國後、國民革命軍總司令部後方總政治部主任、中央黨務學校副主任、廣東省政府委員兼建設廳長、國民政府農鑛部常任次長、國民黨第三期中央執行委員、建設委員會副委員長等に歴任、民國二十年の政變により國民政府を退いたが、國民黨第四期中央執行委員に選ばれて以來、現在浙江省政府委員兼建設廳長に就任、同時に國民黨第五期中央執行委員に擧げられてゐる。

x

x

x

陳肇英 浙江省浦江縣の産、浙江辨自學堂を卒業後、浙江陸軍第一師の所屬團長を振り出しに陸軍第四師第八旅長、廣州虎門要塞司令、國民革命軍總司令部副官處長等に歴任し、國民黨中央委員は第二期以降各期共選出せられ、現在第五期中央執行委員として立法院立法委員に就任し

てゐる。

x

x

x

程天放 江西省新建縣の産、米國イリノイス大學及び加奈陀トロント大學に學び、歸國後江西省政府委員兼教育廳長を振り出しに、國民政府參事、考試院參事、國立中央大學法學院政治學系副教授、安徽大學校長、安徽省政府委員兼教育廳長等に歴任し、中央黨部宣傳部副部長ともなり、民國二十年蔣介石が共產軍討伐のため江西省に出陣するや、陸海空軍總司令行營黨政委員會委員に就任したが、二十一年以來國立浙江大學の校長に任ぜられ、現に江蘇省政府委員となり、同時に國民黨第五期中央監察委員に選出されてゐる。

x

x

x

方覺慧 湖北省勤春縣の産、兩湖書院卒業後、國民革命軍總司令部總政治訓練部副主任となり、更に湖北省政府委員兼農鑛廳長、立法院立法委員、訓練總監部政治訓練處副處長等の各職に歴任、國民黨中央委員には第二期以降各期共選出せられ、現に第五期中央執行委員に擧げられてゐる。

x

x

x

●●●●● 潘公展 浙江省吳縣の産。上海約翰大學卒業後、上海大學、國民大學、南方大學等に教鞭をとり、次いで商報及び申報の記者となり、民國十六年上海特別市農工商局長に任ぜられ、十七年上海特別市社會局長に轉じ、國民黨第三次全國代表大會には上海特別市代表として參加し、二十年社會局長を辭任したが、二十一年上海市政府教育局長となりて現在に及び、同時に國民黨第五期中央執行委員に選出されてゐる。

●●●●● 吳開先 江蘇省青浦縣の産、上海法科大學經濟科卒業後、江蘇省松江で中學校教師を勤めたが、次いで上海に出で、君毅中學校を創設の上自ら校長となり、民國十八年上海特別市黨部執行委員兼組織部長に擧げられ、更に國民黨第五期候補執行委員にも選ばれてゐる。

●●●●● 周啓剛 廣東省南海縣の産、玖馬華僑の巨頭、早くから孫文に従つて革命運動に奔走したが、前清末北米を遊説の上、玖馬に落つき、商業に従事する傍ら、國民黨玖馬支部を主宰しつゝ、民國革命を後援し、民國十五年には玖馬代表として國民黨第二次全國代表大會に參加し、中央委員に擧げられ、次いで中央政治會議委員ともなり、爾來中央執行委員に留任しながら現在に及

び、同時に國民政府僑務委員會副主任委員に擧げられてゐる。

●●●●● 蕭吉珊 華僑出身の政客、國民黨中央監察委員會秘書、南京市黨部執行委員、國民政府僑務委員會委員等々の各職を経て現在國民黨第五期中央執行委員に選出されてゐる。

●●●●● 周佛海 湖南省の産、日本京都帝國大學經濟學部卒業、歸國後國立廣東大學及び上海大夏大學等の教授に歴任、次いで中央軍官學校政治訓練處主任となり、訓練總監部政治訓練處々長に就任したが、民國二十年辭任、現在國民黨第五期中央執行委員に擧げられ、同時に中央執行委員會民衆訓練部長を兼ね、江蘇省政府委員兼教育廳長に任ぜられつゝある。著書には「三民主義の理論的體系」といふのがある。

●●●●● 王陸一 陝西省三原の産、國民黨中央執行委員會秘書長、安徽大學中國文學系主任等に歴任、現在國民黨第五期中央執行委員に擧げられ、同時に中央政治委員會の委員を兼ねてゐる。

丁超五 福建省邵武縣の産、福州格致書院卒業後、民國元年衆議院議員となり、民國十三年には國民黨第一期中央委員に擧げられ、次いで福建省政府委員、中央特種刑事法庭長、福建省黨務指導委員會委員等の各職に歴任、十七年夏中央の命により福建省黨務指導委員と、林壽昌一派との紛争調停に當つたが、林一派に逮捕されんとして、上海に逃れた。國民黨中央委員には第一期以降引續き選舉され現在第五期中央執行委員に擧げられてゐる。

聞亦有 湖北省蕪水縣の産、監察院審計部審計、現在國民黨第五期中央候補監察委員に選ばれてゐる。

邵力子 浙江省紹興の産、上海震旦書院卒業後、陝西省の一官吏となり、次いで高等學校法文教員に轉じたが、早くから中興會に加入してゐた關係上、第一革命のち上海に歸り、上海民立報の記者となり、民國四年には上海民國日報を創刊の上、總主筆として革命思想の鼓吹に努め、同時に復旦大學の教授にも任ぜられた。民國八年夫人の死後廣東に赴き、十四年露國に派遣され「モスコ」に渡り、同地の大學に入學したが、同校で傳學文女士と相識り意氣投合し、

の後單獨歸國の上、十七年二月四中全會以來、中央政治會議委員及び總司令部隨營秘書長に任ぜられ、十八年國民黨第三期中央委員に當選、二十二年二月傳學文女士と上海で結婚し、同時に馬君武の後を繼いで上海中國公學校長となり、復旦實驗中學主任を兼ねたと雖も、次いで中央政治會議委員に任ぜられ、甘肅省政府主席となつた。然るに甘肅省の情勢が頗る複雑を極めてゐたため、遂に辭任したが、その後二十一年四月甘肅に赴いて就任し、現在では陝西省に轉じ、陝西省政府主席となつてゐる。以上の如く中央系に屬する文治派として頭腦極めた明晰、且つ文章に巧みであるため、蔣介石の腹心として常にその側近にあり、從來蔣介石の發した聲明、通電等は殆ど大部分その代表作であると傳へられてゐた。而かもモスコ中山大學に學んだ關係上、一部の間からは共產黨の色彩濃厚であると見られてゐる。それかあらぬか、民國二十年四月廣東の鄧澤如、古應芬等が發した反蔣聲明のなかに「邵力子等共匪の餘孽を以て要津に盤據し」と稱する言葉があつた程である。いまではその地域的關係から楊虎城・朱紹良等の實力派と合流してゐる。

王伯群 貴州遵義縣の産、日本の中央大學を卒業後歸國し、章太炎、程德全等に従つて、中華民

國聯合會を組織したが、次いでこれを統一黨と改め、その幹事となり、同時に大共和日報を上海で刊行した、その後同紙の停刊と共に貴州に歸り、民國五年貴州野中道道尹に任ぜられ、八年の南北和議に際しては南方代表となつたが、會議決裂後、廣東に赴き、交通部長代理に就任、十二年貴州省長に任ぜられたと雖も、袁祖銘一派の反對に逢つて就任不能に陥り、十四年段祺瑞に招聘せられて臨時執政府參政となつたが、國民革命軍の進展と共に廣東に歸り、十六年南京、武漢政府の合作による中央特別委員會成立の際には特別委員に擧げられ、十七年國民政府委員兼交通部長となり、國民黨第三期中央委員に選ばれ、更に上海大夏大學校長を兼ね、十九年には内外債整理委員に任ぜられ、二十年六月國民政府委員に擧げられた等順調な経路を辿つたが、二十年六月上海大夏大學女學生「保志箚」と結婚した折、その結婚支渡金十萬元、愛情保險金十五萬元、別に愚園路に新家屋を建築したなど、それらの總經費五十萬元を逾へたといふので、社會的指彈を受け、監察委員が彈劾案を提出したといふエピソードさへあつた。斯くて二十年末、南京、廣東の妥協成立後國民政府の改組に當り、蔣介石の下野とともに辭職し、現在では國民政府委員、中央政治委員に擧げられ、同時に國民黨第五期中央執行委員に選出されてゐる。

石瑛 湖北省陽新縣の産、英國伯明罕大學卒業の冶金學士、早くから孫文の秘書となり革命に努力すること多年、民國二年には既に衆議院議員に擧げられた。その後國立北京大學教授、國立武昌大學校長、上海兵工廠長、湖北政府委員兼建設廳長、國立武漢大學工學院院長等の各職に歴任し、その後浙江省政府委員兼建設廳長となつたが、現在では國民黨第五期中央執行委員に選出されてゐる。

王世杰 湖北省崇陽縣の産、天津北洋大學卒業後、佛國に留學して巴里大學に入り同校を卒へた法學博士である。歸國以來、國立北京大學の憲法教授を振り出しに、國民政府法制局長、國立中央大學法學院政治學系教授、國立中央研究院社會科學研究所法制組主任等の各職に歴任して、立法院委員となり、一時湖北省政府の改組に際し政府委員兼教育廳長に任ぜられたが辭職し、現在では國民政府教育部長に任ぜられ、同時に國民黨第五期中央候補監察委員に選出されてゐる。

王●法●勤● 河北省高陽縣の産、元來汪精衛の改組派に屬してゐた政治家。閻錫山、馮玉祥、汪精衛等が北京に擴大會議を開いて反蔣軍事行動を起した際には、その委員に選ばれたがその失敗後、天津に潜んでゐたところ、民國二十年末南京廣東の妥協によりて再び浮び上り、爾來中央派に加擔し、C・C團に加はり現在國民黨第五期中央執行委員に選出されてゐる。

苗●培●成● 山西省晋城縣の産。最初山西派に屬してゐたが、民國十八年中央黨部訓練部副部長になつて以來C・C團に加はり、現在國民黨第五期中央執行委員に選ばれてゐる。

吳●忠●信● 安徽省合肥縣の産。もと許崇智の麾下に屬してゐたが、民國十六年國民革命軍の上海占領後 淞滬警察廳長となつて以來、C・C團に加はり爾後建設委員會委員となりて現在に及び同時に國民黨第五期中央執行委員に選ばれてゐる。

焦●易●堂● 陝西省武功縣の産。もと胡漢民系の人物であり、干右任とも親交を有してゐた關係上その緣故から何日しかC・C團に接近し、現に國民政府立法院法律委員會委員長として、國民

黨第五期中央執行委員に擧げられてゐる。

朱●霽●青● 汪精衛系の政客であつたが、民國二十年末、南京、廣東の合作後、國民黨中央委員となつて以來C・C團に接近し、現に國民黨第五期中央候補執行委員に擧げられてゐる。

柳●亞●子● 江蘇省吳江縣人。左派國民黨から中央派に轉じた人物、現に國民黨第五期中央監察委員に選出されてゐる。

麥●煥●章● 廣西省の産、廣西系から轉じて近來益々中央派としての色彩を濃厚ならしめて來た。現に國民黨第五期中央監察委員に當選してゐる。

劉●文●島● 湖北省廣濟縣の産、かつて駐獨公使となつた外交島の政治家、最初から中央派に屬してをり、現在國民黨第五期中央候補監察委員に擧げられてゐる。

劉守中 山西省の産、民國十六年武漢、南京の合作後國民政府委員に任ぜられて以來、中央派としてC・C團に接近し、現に國民黨第五期中央候補監察委員に選出されてゐる。

徐恩曾 浙江省吳興縣の産、建設委員會に屬する技術家出身、最初からの中央派で、現に國民黨第五期中央執行委員に選ばれてゐる。

葉楚傖 江蘇省吳縣の産、民國十一年民立報の記者となり、同紙の停刊後新生活報を經營し、一五年邵力子と共に民國日報を創刊してその編輯長となり、十七年第二次全國代表大會後は廣東に於いて中央政治委員會秘書長を代理し、同年北伐に従軍した。十六年上海臨時政治委員會委員となり江蘇省政治委員會委員を兼ね、同政府建設廳長にも擧げられ、南京、武漢合作後南京で中央特別委員會候補委員に擧げられ、十七年中央財務委員兼江蘇省黨務指導委員に、十九年江蘇省政府委員兼主席に任ぜられたが、二十年辭任し、現在國民黨第五期中央執行委員に選出され、中央執行委員會秘書長となつてゐる。

(B) 考試院系の分子

戴天仇を主班とする考試院系はその政治的勢力が極めて微弱たるを失はない。勢ひこれを考試院系として各派と區分することの可否すらが問題とされてゐる。

就中戴天仇は最近政治方面に對して、頗る消極的となり、自然その傘下に集る各政客も亦寥々たるものである。

斯くの如くにしてこの系統には、一定のイデオロギーを持たず、戴天仇自身も亦自然古い政客としての存在を續けつゝあるに過ぎない。

元來戴天仇は右派國民黨の驍將として、民國十四年孫文の死後、國民黨内に於ける各派の暗闘が鋭化した際の如き、北京で同志を叫合し、西山會議を開催の上、國民黨の容共政策に對して猛烈な反對を試みた程であつたが、その折馮玉祥一派のために監禁され、次いで廣東に歸つたと雖も、更に左派のために壓迫された等遂に浙江省に入つたなどの不遇時代を経過したものであつた。その後蔣介石を中心とする南京政府の確立と共に、逸早く蔣介石に接近し、中央派に加擔して

以來、國民政府部内に於ける地位を確立するに至つたと共に、その反面に於いては全く往年の霸氣を喪失して了つた。

従つて考試院系は監察院系及び司法院系と共に、中央派に於ける養老院派とすら呼ばれてゐる。

x

x

x

戴天仇 浙江省吳興縣の産、四人兄弟の幼弟で四川省漢縣に生れた。上海廣方言館を卒業後十六歳の時日本に赴き、國學院大學に入り、當時既に同盟會に加盟しつゝ、革命運動に没頭して民報の編輯に従事したが、その文筆の鋒利はよく革命思想の鼓吹に功を奏し、その刊行した「戴天仇文集」は青年の血を湧かせたものであつた。斯くて歸國の後上海に居住し乍ら、依然革命運動に従事し、その夫人鈕有恒女士の如き湖州旅滬女校の教員となつて家計を助けてゐたが、その後中外日報に招聘せられて編輯記者となり、民國の成立後は、宋教仁、于右任等と上海で「民吁報」「民立報」等を創刊の上革命思想の普及に努めた。越へて第二次革命には何海鳴と南京の獨立を宣言して敗れ、日本に亡命したと雖も、民國五年歸國の上孫文に隨ひ黨務に携はり、民國八年上海で「星期評論」を發刊し、十一年には四川の動亂調停のため同地に赴いた。斯くて十三年國民黨の組織改造に當り、第一次中央委員に擧げられ、孫文の北上に従つたが、

その死に臨んで遺囑簽證の一人となり、十四年七月國民政府委員に選ばれた際、偶ま西山會議に列席したゝめ國民黨の警告處分を受け、十五年第二次全國代表大會では更に中央委員に就任、この年の秋、國民政府から派遣せられて日本に赴き、歸國後廣州大學を中山大學に改組の上校長となり、爾來永く校長の職に就き、同時に廣東省政府委員を兼ね、十四年四中全會以後國民政府委員に擧げられ、中央黨部常務委員、宣傳部長、總司令部總政治訓練部長等となり、十月考試院長に任ぜられた以後現在に至まで留任し、その間十八年三月第三期國民黨中央委員及び中央黨部訓練部長に就任、二十年六月國民政府委員に推され、現に國民黨第五期中央執行委員に選ばれてゐる。著書には「日本論」「青年の道」「孫文主義の哲學的基礎」等がある。

x

x

x

以上の如き戴天仇の經歷が物語つてゐる通り、革命運動に従事してから相當久しい歳月を閲してゐる上、考試院長に就任してからも可成り永いものにも拘らず、所謂考試院系としての乾分が頗る少ないのであり、強ひてその分子を求めんとせば、舊西山會議派の一人たる許崇智兄弟をしてこの系統に依存せしめつゝある程度に過ぎず、現考試院副院長鈕永建は當然これに編入しなければならぬのであるが、同人は中央委員には選ばれて居らず、自然、現在の中央委員中からこれ

を求むるならば邵元冲及び邵元冲の夫人張默君の二人に止るであらう。

邵元冲 × 浙江省紹興の産、民國元年上海民國日報の編輯長となり、民國二年の第二革命戰當時には總司令部秘書長に任ぜられてをり、民國四年には陳其美を助けて上海に革命軍を起し、楊滄白と共に留守機關部として後方勤務を處理したが失敗し、五年山東警備司令に任ぜられ、六年の護法時代には廣州總司令部秘書處代理となつた。斯くて八年には渡米して、ウイスコンシン大學及びコロンビア大學を卒業し、同時に米國の勞働者並びに社會機關の狀況を調査し、十二年渡歐の上英佛獨に於いて黨務工作に努力し、孫文の命を奉じて露西亞に赴き、十三年歸國して國民黨第一期執行委員に擧げられ、同時に廣州總司令部秘書長黃埔軍官學校政治系主任等に任ぜられ、この年の冬孫文に従つて北上し、孫文の死に際しては、その遺囑簽證の一人となり、十四年潮梅民政廳長に就任、十五年第二期中央執行委員に擧げられ、青年部長になつた。十六年革命軍の浙江進出と共に浙江省政務委員、黨務整理委員兼杭州市長に任ぜられ、十七年廣東に赴いて廣東省政府秘書長に就任、同年九月立法院經濟委員會委員を経て、十八年國民黨第三期中央委員兼中央政治會議委員、考試院考試委員會副主席、立法委員兼經濟委員會主席に

任ぜられ、二十年春國民政府委員兼立法院副院長に擧げられたが現在では辭任し、考試院考選委員會委員長として、同時に國民黨第五期中央執行委員に選出されてゐる。因に邵元冲には「中國の革命運動及びその背景」「孫文主義總論」等の著書がある。

張默君 × 邵元冲の夫人、湖南省湘鄉縣の産。米國コロンビア大學卒業後、上海神州女學校及び江蘇省立第一女子師範學校長、杭州市教育局長となり、現在では國民政府立法院立法委員、考試院考選委員會專門委員に任ぜられ、同時に國民黨第五期中央候補監察委員に選出されてゐる。

(C) 元老派とその分子

國民政府主席林森を始めとして吳稚暉、張靜江、李煜瀛、覃振、居正、丁惟汾、張繼、蔡元培、謝持等は國民黨に於ける大先輩であり、何れも同盟會時代から孫文と共に革命運動に従事しながら、幾度か死線を越へて來た人々である。

こゝで一亘り中國同盟會なるものを解説した上、中國國民黨の系統について簡単に叙述して置



かう。そもく、中國同盟會（光緒三十二年頃）は、黃興の華興會と、孫文の興中會と、章炳麟の光復會とが、その目的を等しくするために合流の上、産生した秘密結社であり、更にこの中國同盟會と、統一共和黨、國民共進會、國民公黨の四結社が合流して中國々民黨が生れ、爾來あらゆる曲折波瀾を経つゝ現在の中國國民黨が形成されるに至つたものである。

勢ひ前記の元老派に屬する政府は、中國國民黨をして今日あらしむるに至つた功勞者であることを失はぬ。

右のうちその經歷から言へば、張繼、覃振、居正、謝持、林森等は國民黨内に於ける極右派として、西山會議派に屬し、その建前上反中央的色彩が濃厚であり、相當頑強に中央派に對する反對の態度を續けて來たのであつたが、近年に及んで遂に中央派に屈服し、その結果元老派として祭り上げられてをり、吳稚暉、張靜江、李石曾、蔡元培等は何れも佛蘭西留學生で、支那に於ける佛蘭西學派の錚々たるものであつた。

而かも張靜江を除くほか、その思想的傾向が極左に偏し、とくに李石曾、吳稚暉の如きは無政

府主義者であつたのであるが、中央派に屬して以來（これらのうち蔡元培を除くほかは最初から中央派に屬してゐた）、漸次穩健な思想の持主となり、消極化して行つた點に特徴がある。

但し中央派に屬してゐる元老派の人々は、何等かの因縁によりて、中央派の領袖蔣介石との間に密接な關係が結ばれたものであり、一部の間では、これらの元老派を目して「蔣介石に買はれた骨董」と評價しつゝあるのは、あながち酷評でもなささうである。

●吳稚暉 江蘇省無錫の産、幼時江陰の南菁書院に學び、鈕永建、汪榮寶等と同窓であつた。光緒二十三年天津北洋學堂の國文教員となり、翌年上海に出て南洋公學の學長となつた。この時幼名の眺を敬恒と改め、二十七年の春日本に留學して東京宏文學師範科に入つた。その年廣東に大學堂の創設計畫があつたため招聘されて趣意書を起草し、又日本に赴き、三十八年五月吳慕良、蔡鍔等と成城學校に入學せんとして駐日公使蔡鈞に交渉したところ聽かれなかつた結果、同宿の留學生二十餘名を率ゐて公使館に押しかけ深更まで退去しなかつたので、遂に法に觸れ、日本官憲から退去命令を受けて歸國した。斯くて上海愛國學社の教員となり、盛に革命思想を

鼓吹した。然るに前清政府當局の忌彈に觸れて、光緒二十九年英國に逃れて倫敦に假寓した。

このとき歐洲漫遊中であつた孫文が佛蘭西から渡英してその寓居を訪問したが、これが孫文との會見の最初であつた。同年の冬曹亞伯の紹介で同盟會に加入して歸國したと雖も、第一革命後又佛國に赴き、蔡元培、李石曾、張靜江等と滯佛儉學會を組織の上「世界畫報」を發行し、帝國主義反抗の各戯曲を翻譯して革命の種を播いた。その後里昂に佛支大學創設せらるゝやその副校長となつたことがある。斯くて民國十三年國民黨の改組に際し、第一次中央委員となり十四年孫文が北京に於いて逝去した時には遺囑簽證の一人となり、十五年第二期中央委員に擧げられ、十六年國民政府が南京に成立した當時は國民政府委員兼中央監察委員に當選し、同年五月總政治部主任に就任した。時に國民黨の黨勢漸を追ふて擴張したのと、共產黨との離脱後所謂清黨運動の高潮化を來したのと共に、その中心人物となり、南京、武漢の合作後中央特別委員會の成立に當つて委員に推されたと雖も辭職しつゝ再び官につかない旨を誓言し上海に閑居し、商務印書館の編輯員となつた。そのち十七年教育部から國語統一籌備委員會主席に聘せられ、十八年三年南京側の廣西討伐に當り國民政府の命令によつて李濟深の湯山軟禁を監視し、同時に國民黨第三次全國代表大會では中央監察委員に選ばれ、二十年六月中央政治會議

委員となつた。越へて民國二十年引續き第四期中央監察委員に選ばれたが、廣東、南京の妥協後、孫科と衝突し、爾來政府及び黨の第一線から退くに至つたと雖も、依然國民黨の元老として中央黨部に重きをなし、現に國民黨第五期中央監察委員に擧げられてゐる。

x

x

x

張靜江 浙江省吳興の産、その生家は巨富を以て知られてゐた。清末上海に於いて革命を謀つて失敗後佛國に留學し、巴里で吳稚暉、李石曾等と共に無政府主義運動に投じたが、同地に於いて革命宣傳のために渡佛した孫文と相識つて同盟會に入り、第一革命の際歸國するや黎元洪説得に當り孫文を助けて南京臨時政府の樹立に參與した。その後第二次革命の失敗と共に再び佛國に亡命し、商業に従事しつゝ革命資金の調達に任じた。次いで上海に歸り一時錢莊を經營したこともある。民國十三年の國民黨改組に際し、第一期中央執行委員に擧げられ、十四年國民政府の成立と共に、國民政府委員に就任の上、孫文の死後は黨の元老として内外に重きをなし、民國十五年第三次全國代表大會が廣州で開かれたときには中央監察委員に選舉せられた。斯くて革命軍の北伐が進捗して長江に進出した後は蔣介石を助けて武漢派に對抗し、南京派の重鎮となり、民國十六年國民革命軍の浙江占領後は、浙江省政府主席に就任した。従つて南京

武漢の分裂の際は武漢方面の攻撃を受け、同年蔣介石の下野と共に下野し、武漢、南京の合作成つて中央特別委員會の組織せらるゝに及び、同委員となり、民國十七年二月四中全會で國民政府委員に推され、蔣介石の復職後國民革命軍を率ゐて北伐に出動した後は、國民政府主席を代理し、北伐の完成と同時に國民政府建設委員會委員、浙江省政府主席に任ぜられ、民國十八年國民黨第三期中央監察委員、中央政治會議委員に選ばれた。次いで十九年には浙江省政府主席を辭任し、二十年廣東の獨立後、南京、廣東の妥協に盡力するところあり、南京側代表の一人として廣東側代表と上海で妥協交渉に當り、妥協を成就せしめた。それより國民黨第四期中央監察委員、國民政府委員となり、引續き國民政府建設委員會委員長に擧げられて現在に及び、同時に國民黨第五期中央監察委員にも選出されてゐる。

李石曾 河北省高陽縣の産、佛國留學生出身である。佛蘭西に於いて中國同盟會に加入し、巴里で蔡元培、吳稚暉等と「豆腐公司」を經營し乍ら、その利益を擧げて本國の革命資金に投じ同時に張繼、吳稚暉等と共に雜誌「新世紀」を發行して無政府主義を鼓吹した。歸國後民國八年國立北京大學の生物學教授、國立北京農業大學校長となり、民國十三年國民黨第一期中央監

察委員に擧げられたが、當時無政府主義的傾向を有する社會批評家として、李大劍と並び稱へられ、支那思想界の重鎮となつた。と同時に屢次の學生運動、民衆運動を指導し、又一時馮玉祥の政治顧問のやうな地位にも就いたことがある。民國十四年北平中法大學校長となり、十五年には國民黨第二期中央監察委員に選ばれ、馮玉祥の失脚後公使館區域に潜伏しつゝ、馮玉祥及び國民黨のために宣傳及び情報の蒐集に當つた。その後北京を脱出して南下し、民國十六年國民黨の武漢、南京兩派分裂後は、南京派に加擔し、武漢、南京の合作後、中央特別委員會委員となり、當時早くもその思想的傾向が漸次右傾し、遂に右派に接近するに至つた。十七年國民政府建設委員會常務委員、外交委員會委員となり、同年濟南事件後、國民政府を代表して佛國に赴き、北伐の完成と共に歸國の上、北平政治分會主席兼國立北平大學校長に任ぜられた。斯くて民國十八年には國民黨第三期中央監察委員、國立北平研究院長となり、十九年擴大會議の開催と、閻錫山等の反蔣舉兵後、蔣介石の代表として奉天に赴き、張學良の抱込みに奔走し爾來主として張學良に接近しつゝ、二十年廣東、南京の分裂に際してはその妥協に盡力するところあり、兩派の上海會議には南京側の代表となり、次いで國民黨第四期中央監察委員に擧げられ、現在國民黨第五期中央監察委員に選出されてゐる。

●**覃振** 元來西山會議派に屬してゐた政客、爾來引續き反蔣介石派として活躍し、擴大會議の際の如き、直ちに參加しつゝ、反蔣行動を起したが失敗した。その後廣東政府の樹立と共に同政府と連絡の上、依然反蔣態度を持してゐたところ、民國二十年廣東、南京兩政府の合作後、漸次中央派に傾き、次いで居正等に從つて中央派に屬する元老派として重きをなすに至つた。湖南省桃源縣の産、日本の留學生で早稻田大學の出身、光緒末年更に日本亡命中、孫文を助けて同盟會を組織し、次いで同盟會總部評議員に擧げられ、歸國のち、密かに革命を謀つたが捕へられて獄に投ぜられ、第一革命當時自由を恢復の上、湖北都督府祕書長に任ぜられ、民國元年臨時參議院議員となり、二年國會の成立と共に衆議院議員に選舉された。斯くて第二次革命後國民黨に隸屬するの故を以て袁世凱から議員の職權を停止せられ、日本に亡命し、民國三年中華革命黨に參加して總支部長に選舉せられた。それから廣東に赴いて、軍政府の參事に就任し、民國十三年の國民黨改組の際は第一期中央執行委員に選ばれ、十四年鄒魯等と北平西山の孫文の靈前で會議を開き、國民黨左派に反對した。十六年南京、武漢の合作後中央特別委員會委員に推され宣傳部委員となり、十九年の擴大會議に際しては民衆訓練部委員兼祕書主任に舉

げられたが、反蔣舉兵の失脚後、天津に潜居しつゝ依然廣東側と連絡して、反蔣運動を續けたと雖も、二十年廣東、南京兩政府が合作の上國民政府の改組さるゝに及び、國民政府に入り、立法院副院長に任ぜられ、同時に國民黨第五屆中央執行委員に選ばれ、その後亦他の西山會議派の人々と共に蔣介石派に投降し、現に國民政府司法院副院長に就任、國民黨第五屆中央執行委員に選出されてゐる。

●**居正** 賈振と同じく西山會議派として、反蔣の旗幟を鮮明ならしめつゝあつたのみならず、西山會議以來、上海に於いて同派の牛耳を執り、蔣介石派及び國民黨左派への抗争を續けてゐた。從つて民國十六年蔣介石の下野直後、中央特別委員會成立の際浮び上り、同委員會の委員となつたが、蔣介石の歸還復職と共に、又失脚して上海に隠れ、一時汪精衛等の改組派と策應しつゝ反蔣運動に従事しその策動に努めた。勢ひ石友三の中央背叛、廣生智の反蔣舉兵の折も亦、これに參加し、國民政府から逮捕令を發せられ、次いで上海警備司令熊式輝のために謀られて逮捕され南京に監禁されたことすらあつた。その後南京廣東兩政府の合作後釋放されて改組後の國民政府に入り、爾來中央派と結び乍ら現在に及んでゐる。山東省斷水縣の産、日本の

法政大學に入り、日本留學中既に中國同盟會に加入し、第一次革命には湖北に歸り直ちに革命運動に参加した。民國二年湖北選出の衆議院議員となつたが、第二次革命の際、上海で陳其美に従ひ、北軍驅逐を策したのに失敗して日本に亡命し、四年袁世凱の帝制問題が起るや、孫文の命をうけて山東省滋縣で反袁運動に従ひ、六年孫文が廣東で軍政府を組織して非常國會を召集するに當り、これに参加した。斯くて七年孫文が岸春煊、莫榮新等の政學會一派に依つて廣東を追はれた後も、廣東に止り、純國民黨員及び孫洪伊等の民治社によつて組織された同人を率ゐて、非常國會に臨み、極力岸春煊の軍政府に反對した。次いで陳炯明軍が福建から廣東に迫るや、政學會の壓迫を避けて上海に逃れ、十年孫文と共に廣東に歸り、十一年北伐開始後は主として上海に於いて湖北方面と策應し乍ら廣東軍との聯絡に任じ、十二年には國民黨第一屆中央執行委員に選ばれ、十四年孫文の客死後國民黨極右派によつて西山會議を開き爾來反蔣運動を続けつゝ可成り蘇の途を歩んだが、二十一年改組後の國民政府に司法院副院長として加入し、更に蔣、汪合作の國民政府成立のちには、司法院長に就任、現に國民黨第五屆中央執行委員に擧げられ、依然司法院長に留任してゐる。

x

x

x

丁惟汾 以前益友社系（廣東國會中の多數黨で唐紹儀、吳景瀛、褚輔成、王正廷等が領袖であつた）に屬してゐる政客、民國十七年國民政府委員に擧げられた以來、中央派としての色彩濃く、現在では寧ろ準C・C系と目されつゝある。山東省日照縣の産、日本留學生で明治大學の出身、歸國後山東法政學堂監督、山東省議會議員となり、民國二年衆議院議員に選ばれたのが政治家生活に入つた最初であつた。次いで民國十三年國民黨第一屆中央執行委員に擧げられ、十五年國民黨第二屆中央執行委員を経て、十七年國民政府委員、中央黨部訓練部長となり、直魯賑災委員に任ぜられ、同年山東省政府成立するや同省政府委員に補せられ、十九年國民黨中央執行委員會祕書長に、二十年には國民黨第四屆中央執行委員に選出され、同年廣東、南京兩政府の妥協なるや改組後の國民政府監察院副院長に就任、二十一年辭職したが、その後又監察院副院長に再任したと雖も更に辭任し、現在では國民黨第五屆中央執行委員として中央常務委員會委員に擧げられてゐる。

x

x

x

林森 居正と同じく西山會議派に屬してゐたが、その後廣東、南京の兩派對立した際の如きその何れにも加擔せず寧ろ消極的態度を持しつゝあつた。従つて漸次中央派としての色彩を濃厚

ならしめて行つた。勢ひ廣東南京の合作による國民政府の改組と共に、國民政府主席に擧げられ、依然國府主席として現在に及んでゐる。福建省閩侯の産、前清時代多年米國に留り、孫文の革命運動を援助し、民國元年南京臨時參議院議長に推され、二年第一次國會參議院議員に選出された。居正、田桐等と共に丙辰俱樂部に隸屬したのはその頃のことであつた。民國六年以後、廣東非常國會議員參議院議長、廣東治河督辦、福建省長等に歴任し、民國十二年の冬國民黨の改組に當り、孫文から臨時中央執行委員に委囑され、十三年國民黨第一屆中央執行委員に選ばれたと共に大元帥府建設部長に任ぜられ、十四年七月國民政府の成立を告ぐるや、政府委員に任命されたと雖も、折柄國民黨の内訌に際し、左派及び共產派の驅逐を決議した等、十五年左派並びに共產派のために逐はれ、遂に廣東を去り、雜魯、居正等と共に北京西山に會して共產黨驅逐を決議し、十五年左派及び共產黨系により廣東に招集された國民黨第二次全國代表大會に對抗して、上海に第二次全國代表大會を招集した際、中央執行委員に擧げられたが、その後胡漢民と結んで南京政府に入り、十六年浙江政治分會委員となつた。同年武漢、南京の合作につれて西山會議派も亦これに合流し、中央特別委員會の成立を見るに至つた時、委員の一人に選ばれて國民政府部内に重きをなし、十七年北伐の完成後、國民政府立法院副院長に就任

十八年には國民政府第三屆中央監察委員に擧げられ、二十年胡漢民の監禁後、國民政府立法院長に任ぜられたと雖も就任せず、廣東派の獨立後廣東國民政府委員に任ぜられたが、これにも亦就任しなかつた。但し同年末南京、廣東兩政府の合作による國民政府の改組に伴ひ國民政府主席に推され、さらに民國二十四年末國民黨第五屆中央監察委員に選出された。

x

x

x

張繼 前に略述した通り、西山會議派に屬してゐたが、近年中央派に接近し最近では全く蔣介石系の人物として活躍しつゝある（とくに蔣介石の西南派懷柔には常に蔣の代表として兩派の間に斡旋するのを常とする）。河北省滄縣の産。早くから日本に留學して宏文學院を卒業後、更に日本大學を卒へ、光緒二十九年黃興と共に華興會を長沙に創設し、同時に「蘇報」の參議となり、三十一年同盟會に入り、次いで佛國に赴き巴里で李石曾等と「新世界雜誌」を發行して革命思想の宣傳に努め、一時無政府主義運動にも投じたが、第一次革命の際歸國し、民國の成立後國民黨の幹事に擧げられ、二年衆議院議長に選ばれたと雖も、第二次革命の失敗に伴ひ日本に亡命の上、再び佛國に轉じ、四年袁世凱の帝制問題起るや上海に歸り、孫文を輔けて反袁運動に盡瘁し、袁世凱の死後、南方國會議員團代表として北京に入り、段祺瑞と折衝しつゝ、

南北統一、舊國會の恢復を策したが失敗に終り、爾來南方に留り、九年孫文が廣東に軍政府を再興するやその顧問となつた。斯くて十一年第一次奉直戦後、汪精衛と共に孫文、段祺瑞、張作霖の三角同盟を策して奔走し、同年孫文が陳炯明のため廣東を逐はるゝや上海に歸り、十二年孫文が三たび廣東に入つて大元帥に就任した際、これに従つて黨務に携はり、上海廣東間に奔走した。十三年には國民黨第一期中央監察委員に選ばれ、十四年孫文の死後、居正、林森、覃振、羅魯等と共に共產黨排除、國民黨の改組を主張し乍ら、所謂西山會議を開き、その後上海で同派の牛耳を執りつゝ活躍し、十五年國民黨左派によつて廣東に招集された第二次全國代表大會に對抗し乍ら、西山會議員が主となり上海に國民黨第二次代表大會を招集した時、中央執行委員に挙げられ、引續き左派國民黨に對抗し、一時孫傳芳、蔣介石の合作を策したことからあつたと雖も成功せず、十六年國民革命軍が上海を占領するに及んで日本に亡命した。然るに同年武漢、南京兩派の分裂後、南京政府と妥協し、浙江政治分會委員に挙げられ、武漢派が共產黨を排除して南京派と合作するに及んで、國民黨中央特別委員會委員、中央黨部宣傳部長、國民政府委員、外交委員會委員等に選出され、次いで武漢派唐生智の南京中特別委員會に對する反對機運緩和のため許崇智、居正、伍朝樞等と武漢に入り、妥協案を協定したが、南京軍事

委員會の反對をうけて遂にならず、唐生智討伐令が發せらるゝに及び國民政府使節の名義を與へられて日本に赴いた。斯くて十七年國民政府委員に推され、北伐完成後北京政治分會委員、國民政府司法院副院長に任ぜられ、十八年國民黨第三期中央監察委員に挙げられ、二十年廣東の獨立に對しては、南京派を代表して廣東に赴き妥協運動に奔走し、次いで上海に於ける南北統一會議に參與しつゝ南北合作を成功せしめ、同年國民黨第四期中央監察委員、國民政府立法院長に就任。二十一年立法院長を辭任したが現在では國民黨第五期中央監察委員に選出され、獨り中央派のみならず國民黨の元老として重んぜられてゐる。

蔡元培 教育家、學者として令名あり、自然政派の暗闘には關係せず常に超然たる態度を持つゝある。勢ひ中央系に屬する元老派として重きをなしてゐると雖も、比較的イデオロギーに富む關係上、常に自由主義的立場に立ち、とくにC・C團を中心とする新文化運動、文化統制に對しては快からざるものゝ如く、一時宋慶齡等の反帝運動系に連絡をもつてゐた。浙江省紹興の産。前清の進士、翰林院編修に任ぜられたのを以て官界に入つた最初となすが、前清戊戌政變後郷里に歸り、民國新學會を起して子弟を教育し、次いで上海南京公學の教員となり、更

に實是學舎、愛國女學校等をも創設した。尙ほ章炳麒、鄒容等と「蘇報」を發行し、専ら革命思想の宣揚に努めたが、その後「蘇報事件」を惹起して青島に去つた。爾後獨逸に行き「ライプチヒ」大學で哲學を學び、民國元年歸國して江蘇省教育會長に就任したところ、第一次革命の發生と共に南京臨時政府の成立を見るや、教育廳長に任ぜられ、同年南北統一のち袁世凱迎接專使として北上し、その儘北京に止り、唐紹儀内閣の教育總長となり、陸徵祥内閣には依然留任したが、同年辭任して渡佛し、李石曾、汪精衛等と里昂に中法大學を創設し、民國五年歸國の上北京大學の校長となつた。次いで八年五四運動の勃發に際し責を引いて一時上海に去つたと雖も、幾何もなくして復職し、陳獨秀、胡適等の所謂文學革命運動を助けて令名を博するに至つた。斯くて民國十二年辭任して歐洲に遊び、同年國民黨第一期中央候補監察委員に舉げられ、十四年歸國、十五年國民黨第二期中央監察委員に選出され、同年北伐開始後は専ら革命運動に奔走し乍ら、十六年國民革命軍が浙江占領のち、浙江省政府主席代理兼中央政治會議臨時上海分會委員、政治分會浙江分會委員等に歴任し、同年國民政府大學院長となり、中央特別委員會委員、國民政府常務委員等を兼ね、十七年北伐完成後國民政府の改組に伴ひ、國民政府監察院長兼國民政府委員、國立中央研究院長に任ぜられ、その後北京大學を國民政府に接

收して中華大學と改稱しやうとしたが學生の反對により不能に陥つたので同校長を辭して上海に歸り、同年國民政府監察院長を辭した。越へて二十年廣東派の獨立と共に廣東國民政府成立するや、南京側を代表して妥協運動に奔走し、妥協成立後は國民黨第四期中央監察委員、國民政府委員、國立中央研究院長等を兼ね、現在では國民黨第五期中央監察委員國民政府委員に舉げられ、同時に國立中央研究院長に留任してゐる。

謝・持 西山會議派として最後まで反蔣運動を繼續しつゝあり、民國二十年廣東國民政府の樹立された際には廣東に入り政府委員となつたが、南京廣東の妥協による國民政府の改組後、國民政府委員に舉げられ、同時に中央派にくみし、現在に及んでゐる。四川省富順縣の産。四川南師範學校卒業の後、會て四川學務處委員となり、更に各官私各學校の教員に歴任しつゝ、縣立高等小學を創辦の上自ら校長となり、同時に同盟會に入會して革命運動に参加し、その間革命軍を起して成都を襲撃すべき密謀を企てたが敗れ、上海に亡命し、中國新公學學監に任ぜられたと雖も、次いで陝西に入り四川、陝西の同志と聯絡し乍ら重慶に據り兵を舉げ、蜀軍政府を建て、總政處處長となり、引續き四川政務處副理に轉じ、民政長署參事に任ぜられ、民國二



年參謀院議員に選ばれて袁世凱の帝制阻止を謀つた結果、獄に投ぜられ、出獄後日本に亡命した。越次て民國五年上海に歸り、孫文の下に於いて活躍し、十三年國民黨第一期中央監察委員に擧げられ、十四年國民黨左派に對抗して西山會議に参加し、十六年武漢、南京の合作後中央特別委員會常務委員、國民政府委員、國民黨中央執行委員會宣傳部主任に推されたが、蒋介石の復職と共に又失脚し、爾來國民黨右派の領袖として上海で反中央運動に従ひ、十八年閻錫山馮玉祥、汪精衛等が北京に於いて反蔣行動を起した際はこれに協力して敗れ、一時大連に亡命。のち天津に潛み依然反蔣運動を繼續してゐたと雖も、二十年廣東政府の樹立と共にその政府委員となり、廣東・南京の合作後國民政府に入り、汪、蔣合作政權に合流しつゝ中央派に屬し、現に國民黨第五次中央監察委員兼國民政府委員に就任してゐる。

#### (D) 政學會系の分子

中央系に於ける文治派には、以上列擧した各系統のほか、従前政學會に屬してゐた一派があり現在では何れも蒋介石の直系として、寧ろその股肱たるの觀がなしとせない。即ち楊永泰、張群を主とするグループがそれである。

更にこの一派は熊式輝、陳儀等の日本士官學校派の實力系と合流し、C・C團乃至元老派などに比して、異つた勢力をもち、而かも獨自的な存在をすら續けてゐる。この意味に於いて黃郛も亦準政學會系と稱し得べく、王正廷をもこの系統に編入せしむべきであらう。

とくにこの系統に屬する分子は、張群、楊永泰、黃郛等の如く、何れも頗る智謀に富み、絶えず蒋介石の懐刀として暗躍乃至活躍を續け、就中黃郛の如きは過去に於ける蒋介石の智慧袋として重んぜられたのであり、張群も亦、現に従來の蒋介石對黃郛との關係に於けると同様の關係を保ち、楊永泰に至つては、蒋介石が南昌行營に於いて剿匪に熱中してゐた頃の行營秘書として蒋介石の側近に従つたことがあり、さきに蒋介石が行政院長を兼任するに及び、近く行政院秘書に轉すべく噂せられてゐる等、これ又楊永泰の中央派としての蒋介石との關係、どの程度まで密接であるの事實を物語るものである。一部の間からは楊永泰が藍衣社系の中樞幹部であるものゝ如く見做されてをり、而かも最初これを蒋介石に紹介したのは黃郛であるとすら傳へてゐる程である。

x

x

x

以上のうち張群と黃郛とは、國民黨部内に於ける日本通として頗る重んぜられ、王正廷を加へ

て三人とも、何れも南京政府の外交部長に就任した履歴をもち（張群は國民政府現外交部長である）この點に一種の共通點の存在してゐる事實を認めることが出来る。

勢ひこの政學會系は國民黨中央派に於ける一系統としての團結的勢力をもつてゐるか否かは疑問ながら、黃郛、張群、楊永泰の三人は相互間に少なからぬ連絡を持つものゝ如くである。いまこれら各人個々の略歴を摘録する前に先づ政學會の經過を左に記録しておかう。

政學會といふのは谷鐘秀等が岑春煊を推戴して創設した政黨である。元來谷鐘秀は當時衆議院議員であつたが、舊國民黨系の領袖として、憲法起草委員に任ぜられた等の履歴をもつてゐた。國民黨が袁世凱のために壓迫せらるゝに及んで、別に民憲黨を組織したと雖も國會の解散によりて上海に逃れ、孫洪伊と共に反袁運動に従事し、第三次革命に盡力するところ多く、第二次國會の成立するや、孫洪伊と共に憲法商權會を組織し、黎元洪、段祺瑞の府院權限問題に對する抗爭に黎元洪を援けたが、孫洪伊が内務總長を免ぜられて憲法商權會の分裂を來すに至つた。斯くて谷鐘秀は張耀會と結んで政學會を組織しつゝ岑春煊を推戴し、民國六年の對獨參

戰問題に關する國會の紛擾に際して衆議院議員を辭職するや、政學會を率ゐて活躍し乍ら、民國十一年の國會に参加した。その後國第二次復活時代の政學會は楊永泰、李根源等がその中堅分子で、五十號俱樂部と稱した政學系の俱樂部に對して楊永泰がその經費を支出してゐた。

以上の如く政學會と楊永泰との關係は、一時楊永泰が政學會を牛耳つてゐた、時代があつた程で、張群は最初陳其美の下に屬してゐたが、陳其美の暗殺後民國七年岑春煊の廣東軍政府に副官長となつた時代から、政學會に入つたものであり、黃郛を準政學系のなかに編入したのは、黃郛が張群との個人的政治的關係上、この政學系に接近するに至つたからであり（因に黃郛と張群とはともに陳其美の麾下に居つた當時から先輩後輩としての關係が結ばれ、當時、黃郛が陳其美の參謀長であり、張群股汝驪と共に三人男の稱があつた。この時代黃孚が師長であつた頃（蔣介石も亦その部下の團長に就任してゐた）王正廷をもこの系統に入れたのは、廣東に非常國會が開かれた際、その副議長となつたことがある上、その以前袁世凱の死後、唐紹儀の代表として北京に赴き新國會に活躍した折には憲法商權會に加入してゐた等のがあつたからである。

楊永泰 廣東省茂明縣の産、廣東高等學堂、北京滙文大學卒業後廣東南報の記者となつたことあり、第一次革命勃發のち、廣東省議會議員に選ばれ、廣東代表として南京臨時會議に出席し、民國二年參議院議員となつた。第二次革命後上海に去り谷鐘秀と共に雜誌「正誼」を發行して共和擁護、反袁世凱思想を鼓吹することに努め、民國四年袁世凱の帝制問題起るや、上海中華新報を發行してこれに反對しつゝ、五年黎元洪が國會を召集するに當り、參議院議員に選ばれた。六年廣東に歸つて非常國會に参加し、越へて七年廣東政府廳長となり、九年國民黨對政學會間に衝突起り、孫文派が放逐せらるゝや、廣東省長に任ぜられた。十一年北京國會に再び參政院議員として出席し、十五年關稅特別會議支那代表となり、二十年國民政府遵准委員會委員に擧げられた以來、中央派として蔣介石に接近し、蔣介石が剿匪總司令として南昌行營に督軍中は行營視書となり、現在では 張群が國民政府外交部長となつた後を承けて湖北省主席に任ぜられ、同時に國民黨第五期中央候補執行委員に選出されてゐる。

張群 四川省華陽縣の産、保定陸軍速成學校卒業後、第一次革命當時は陳其美の下に屬し、上海を占領して滬軍都督府科長となつたが、第二次革命の失敗と共に日本に亡命しつゝ、日本陸

軍士官學校に入り第十期騎兵科を卒業した。民國五年陳其美が上海に刺された後は浙江都督府上海駐在員となつたが、漸次國民黨を遠かつて政學會に近づき、七年岑春煊が廣東に軍政府を樹立した際、その副官長としてこれに従ひ、九年末岑春煊軍政政府の没落と共に四川に赴いて四川警務處長となつた。その後上海に歸り、十二年黃郛が張紹會内閣の外交總長となるや北京に至り、黃郛の許に投じ、十三年第二奉直戰の發生に當り馮玉祥のクーデターに參劃し、事後治南警務處長に任ぜられた。然るに十四年馮玉祥が京津を撤退したので廣東に赴き、蔣介石の幕僚に參じ、十五年蔣介石の北伐軍に加つて國民革命軍總司令部總參議に任ぜられ、十六年蔣介石の下野に殉じて共に日本に赴き、蔣介石の復職に伴つて十七年、上海兵工廠副廠長、國民政府軍事委員會委員となり、間もなく上海兵工廠長に就任し、次いで國民政府代表として渡日した。斯くて北伐の完成後は軍政部政務次長兼上海兵工廠長、同濟大會校長等に就任、十八年國民黨第三期中央執行委員に擧げられ、上海市長に轉任した。二十年廣東の獨立實現するや蔣介石の代表として北平に赴き張學良との連絡に任じ、同年上海市長を辭し、國民黨第四期中央執行委員に選出され、爾來張學良に對する監視役として北平に留り、二十一年東北政務委員會常務委員となり、國民政府軍事委員會北平分會委員に就任、そのち國民黨第五期中央執行委員

に選ばれ、湖北省政府主任に任ぜられたが、第五期一中全會に於ける國民政府の改組に際し、外交部長に就任した。

黄郛・陳其美の參謀長として革命運動に奔走した當時は、同じく陳其美の部下であつた蒋介石の先輩格であり、一時陳其美軍の師長となつた折には、蒋介石はその部下の團長に就任してゐたことがある。更に馮玉祥の顧問格として北支政界に活躍したこともあり、その後純蒋介石派となり、特に蒋介石政權の對日本側の連絡に任じ乍ら、常に蔣政權の帷幕に參じつゝ、現在に及んでゐる。浙江省杭縣の産、浙江成歩學堂を卒業後、日本に留學して成城學校に入り、更に日本陸軍測量學校に轉じ、同校を卒業のち、宣統二年歸國し、清朝の軍諮府測量部地形課員に任ぜられたが、第一革命の勃發と共に南下して革命軍に投じ、陳其美の參謀長となり次いで北伐軍兵站總監に就任した。斯くて民國の成立に伴ひ江蘇都督程德全の參謀長となり、第二次革命の際には又陳其美の參謀長に轉じたが、その失敗後日本に亡命して四年末上海に歸り、浙江駐軍々事委員に任ぜられた。然るに民國六年から九年まで天津に閑居して著述に従事し「歐戰の教訓と中國の中國の將來」「大戰後の世界」の二書を出版し、九年には南京中學の教員に就

任、十年「歐戰後の中國の財政及び教育」と稱する一書を著して大總統徐世昌に提出し、それによりて中國經濟調查委員會の委員となり、十一年には半官の資格で歐米各國の視察に赴き、一箇年たらずで歸國の上、十二年の春施肇其に代り外交總長に任ぜられ、同時に外交委員長にも擧げられた。次いで同年九月高凌霨の攝政内閣には教育總長となり、十三年顏惠慶内閣には又教育總長に就任した。斯くて第二奉直戰の起るや馮玉祥を説いてクーデターを斷行せしめ、自ら國務總理代理として攝政内閣を組織し、全國々道建築事宜督辦を兼ねたが、段祺瑞の臨時執政となるに及んで辭職し、爾來馮玉祥系政客として北京政界に活躍した。従つて民國十四年には財政善後委員會副委員長に、同年關稅特別會議全權代表にそれ〴〵任命され、翌年駐獨公使に推されたが赴任しなかつた。かゝるうち國民革命軍の北伐の進展につれ、民國十六年蒋介石の招きに応じて南下し、蒋介石と日本側との連絡に任じ、同年上海特別市長となつたが、蒋介石の下野と共に辭任、十七年蒋介石の南京歸還に伴ひ國民政府委員兼國民政府外交部長、國民黨中央政治會議委員に就任したと雖も、同年濟南事件の責任を負ふて辭任し、莫干山に閑居しつゝあつたところ、十八年浙江省政府委員に擧げられて十九年辭任し、二十年には國民政府遵准委員會副委員長となつたに拘らず、南京廣東の合作による國民政府の改組と共に又辭職して、

莫千山に引籠り中、民國二十四年に至り北支の形勢混沌となるや、北平政務委員會委員長に任ぜられ、日本との間に北支問題の交渉に當つたが、その後自治問題の具體化につれて政變の惹起と共に辭任し、一時國民政府内政部長に就任したのち、二十四年末の政府改造により辭して又もや莫千山に閑居しつゝある。現在では國民黨第五期中央執行委員に擧げられてゐるのみ。

×

×

×

●●● 王正廷 浙江省奉化縣の産、最初天津新學書院に學び、光緒二十二年天津北洋大學に轉じたが、庚子變亂（義和團事變）のために卒業せず、直ちに天津新書學院の教員となり、三十年湖南高等學堂に赴任、二十二年日本に留學して同時に中華基督教青年會から東京駐日基督教青年會總幹事を委囑せられ、三十三年の夏渡米し、ミシガン大學及びエール大學を卒業、第一次革命勃發の直前歸國して革命運動に加はり、一時黎元洪の下に赴き、湖北軍々政府外交次長となつた後、選ばれて南京臨時參議院副議長に就任した。次いで民國六年工商次長に任ぜられ總長陳其美が就任しなかつたため、部務を代理したが七月辭職し、二年參議院副議長に擧げられ、袁世凱の國會解散に伴ひ上海に赴き中華基督教青年會全國總會の總幹事に就任、五年國會恢復と共に北京に至り副議長に選舉された。六年黎洪元の第一次國會解散に會するや南下して廣州に入

り、護法運動に加はつて非常國會の副議長となつた。斯くて民國八年巴里に平和會議の開かれた際、北京政府から平和會議全權代表に任ぜられ、山東還付問題に關し大いに活躍し、九年歸國の上和約研究會長に推されて、北京に赴いたが南北不統一を理由に就任せず、十年北京中國大學校長となり、十一年山東善後督辦に就任。山東交渉に於いて山東問題日支聯合委員會支那側全權委員として日本側との交渉に當り、汪大燮内閣の外交總理に任ぜられて山東協定に調印した。その後國務總理代理兼外交總長に擧げられ、十二年露支交渉督辦となり關稅特別會議委員を兼ね、同年十二月には許士英内閣の外交總長に專任され、のち辭職して上海に赴き、全國道路會長に任じ、十六年の夏國民政府から隴海鐵路督辦に擧げられ、十七年濟南事件後黃郛の後を承けて國民政府外交部長となり、十八年國民黨第三次全國代表大會で中央候補執行委員に選出された。越へて二十年六月國民政府委員兼中央政治會議委員となり、九月滿洲事變の發生と共に、二十八日京滬學生が國民政府に對する請願運動を行ひ、同時に外交部に至り暴行を働いた際、毆打されたのみならず、監察院からその彈劾案を提出の上懦弱外交と認定された等、遂には辭職し、二十一年一月外交々渉委員に擧げられて以來今日に及び、現に國民黨第五期中央候補執行委員に選ばれ、外交々渉委員會委員、國民政府委員等に任ぜられてゐる。

## (E) 新官僚派及び歸順組とその分子

こゝに區分した新官僚派及び歸順組の分子は現在何れもその團結的勢力に乏しく、而かも新官僚に編入すべき朱家驊一派の如き、その政治的態度が確立しない關係上、現在では寧ろ失脚への趨勢を示し、従つて宋子文を主とする財政系に依存せんとする傾向極めて濃厚である。

その他の歸順組の主なるものには、黃紹雄、吳鐵城、葉秀峰、彭國鈞等々があり、それらは何れも現在國民黨第五期中央委員に選出されてゐる人々である。右のうち黃紹雄は元來廣西系の主要人物であり、李濟深の部下であつた人、勢ひ反蔣的行動を續けつゝあつたが、不圖した動機、(別項黃紹雄の略歴参照)によつて、中央派に接近して以來、現在では蔣介石と密接なる關係を結び、中央派に於いて、譜代の政客に比し寧ろそれら以上に信頼されてをり、吳鐵城も亦國民黨右派として存在しつゝあつた時代の孫科系に屬した人物であるが、蔣介石に接近以來、民國十八年國民黨第三期執行委員に擧げられた當時から、純然たる中央派となり、十九年閻錫山、馮玉祥、汪精衛等が北平に擴大會議を開催して反蔣舉兵を斷行した際の如き、東北系の張學良抱込のため蔣介石の代表として奉天に赴き、兩者間の連絡を圖り、遂に蔣、張の合作を成功せしめてから

一層中央派としての色彩を濃厚ならしめて行つた。

吳鐵城 廣東省中山縣の産、曾て米國に赴き桑港で商業に従ひ、第一次革命の際歸國して革命運動に奔走し、第二次革命後日本に亡命した上、次いでホノルルに赴いて革命思想の宣傳に努め、五年歸國後、孫文が廣東に大元帥府を組織するやその參謀となり、九年廣東省香山縣長に任ぜられ、十二年廣州公安局長兼廣東全省警務處長に就任し、次いで許崇智の下に東路討賊軍第一路司令に任ぜられ、十三年廣東警衛軍司令を兼ね、警衛團及び憲兵を統率し乍ら、蔣介石の率ゐる黨軍と協力しつゝ、廣東商國軍の武裝を解除した。その後民國十五年國民黨第二期中央候補執行委員に選ばれ、程潛の下に第六軍第十七師長となつたことがあつたが、蔣介石のクーデターにより捕へられて一時監禁せられ、同年北伐軍の出征に際し釋放を受け北伐に参加した。越へて十六年日本に渡り南方政府及び國民黨に對する日本朝野の諒解を求むべく奔走し、同年歸國後一時漢口公安局長となつたと雖も、武漢南京の合作と共に南京國民政府商民部委員となり、孫科、許崇智、張繼等と武漢、南京兩派の調停に努めたが失敗に終つた。十七年廣東に歸り、孫科の外遊中廣東省政府建設廳長を代理し、次いで廣東省政府委員となつた。十八年

國民黨第三期中央執行委員に選ばれた當時から中央派に接近し、孫文の移靈に際しては迎親委員となり、十九年國民政府内政部政務次長兼立法委員に就任、益々蔣介石系として色彩を濃厚ならしめ、同年閻錫山、馮玉祥、汪精衛等が北平に反蔣政府を樹立するや、蔣介石の代理として奉天に赴き、張學良との連絡を圖り、遂に蔣、張の合作に成功し、二十年國民政府警務總監に任ぜられたが、就任するに至らず、廣東派の分離以來、廣東、南京の妥協を策し、南京代表として妥協交渉に當り、所謂寧奥の合作國民政府の改組後、上海市長となり、國民黨第四期中央執行委員に擧げられ、現在では國民黨第五期中央執行委員に當選、同時に上海市長に留任しつつある。

●●●●● 廣西省容縣の産。保定軍官學校の卒業生、早くから廣西に在りて李濟深に従ひ、民國六年錢大鈞等の廣東軍と協力して賀龍、葉挺の共產軍を汕頭、潮州に討伐し、次いで國民革命軍討逆第八路軍總指揮となり、同年南京國民政府が唐生智に對する討伐令を發するや、西廣討唐軍總司令に任ぜられたが、黃祺翔、李福林等の「クーデター」に遇ひ、逃れて廣西に歸つた。間もなく廣東共產黨事件後、陳銘樞等と協力して、張發奎を追ひ、廣東に入り、民國十七年國

民革命軍討逆第八路軍副指揮（總指揮は李濟深）兼第十五軍長に任ぜられ、十八年武漢、南京の軋轢により、李濟深が南京で蔣介石のため監禁せらるゝや、張發奎軍を迎へ、李宗仁、白崇禧と共に武漢側に加擔し、廣東攻略を試みたが、陳濟棠の「クーデター」により、李、白、張等と共に、身を以て廣西に遁れ、爾來反蔣運動を續け、西廣對峙中は廣西の軍政處理に當つた。十九年北京に閻錫山、馮玉祥、汪精衛等を主とする全國の反蔣勢力を網羅した北方政府の失敗後、蔣介石と廣西派との妥協を圖り、二十年廣西派の代表として南京に赴き略々その目的を達して、廣西善後督辦に任ぜられつゝ南下したところ、その妥協條件につき、李、白、張等の同意を得ること能はず、ために廣西に入ることを得ずして香港に止り、各方面と和平接衝中のところ、廣東派の獨立と共に、廣東國民政府の樹立せらるゝに及び、一時マニラに去つたと雖も、爾來全く中央派に歸順し、國民政府委員會委員に任ぜられたことあり、次いで國民政府内政部長にも就任、現在では浙江省政府主席となつて居り、國民黨中央委員には第二期以降、各期共監察委員に選ばれ、現に第五期中央監察委員に擧げられてゐる。

●●●●● 浙江省吳興縣の産。上海同濟大學を出たのち、獨逸に留學して柏林大學に入り同校を

卒業した地質學博士である。歸國後北京大學の教授となり、屢次の學生運動に關係したが、五年の政變により、北京を去つて廣東に赴き、中山大學の教授に任ぜられ、同時に校長代理となり、十六年には廣東省政府委員兼教育廳長、廣東政治分會委員となり、次いで分會委員、國民政府建設委員會委員等を経て、十八年には國民黨第三期中央執行委員に選出され、十九年國立中央大學校長に任ぜられて二十年辭任し、次いで國民黨第四期中央執行委員に擧げられ、現在では、國民黨第五期中央執行委員に選ばれ、同時に國民政府交通部長に就任してゐる。

### (F) 財政系とその分子

財政系とは宋子文、孔祥熙等を中心となし、財政部を主として中央銀行、國家銀行等に亘り、一大金融ブロックを形成しつゝ、金融、産業等國民經濟の中樞部門を通じて、一國の財政經濟を統制し乍ら、統治と經濟の連絡を謀る傍ら、統治上に於ける獨裁強化に必須缺くべからざる基本工作を、意識的又は無意識的に受持つてゐる分子を指すのである。

従つてその主腦部は國民政府財政部長、中央銀行の實權者、その他の國家銀行の實勢力把持者等々であり、これに配するに銀行資本家等をもつてしてゐる。この間の經緯に關し一部の間から

は、現國民黨政權を支持しつゝあるものを所謂浙江財閥となし、浙江財閥によつてのみ南京政權が存在してゐるかの如く認識されてゐるのであるが、嚴密にこれを分析するとき、支那には所謂財閥と稱するが如き財閥コンツエルンがなく、世人の所謂浙江財閥なるものは、過去に於けるこの財政系と銀行資本家とのブロック形成への過程と、金融、産業等國民經濟の中樞部門を通じて一國の財政經濟を統制しこれを統治權の基礎としようとした現南京政權の統治的基本工作の經過を目して、恰もそれが財閥の統治的支配であるかの如く誤認した結果に外ならぬ。

蒋介石を中心とする國民黨中央派の獨裁的統治形態が、前章に略述した如き、一種の變體的金融資本の上に樹立され、漸次擴大強化しつゝある過程は、或る程度まで、この金融、産業等國民經濟の中樞部門に亘つて統制されて行く實證的經過がこれを物語つてゐるのである。

斯くの如くにして財政系は、實力系及びC・C團と共に、中央派に於ける鼎の一鼎をなしてをり、寧ろ中央派の獨裁強化工作に對する、或る程度までの基本的の動きをなしてゐる。

就中最近に於ける財政系の活躍と、その結果たる金融部門に對して斷行し得た統制振りとは、一層この間の消息を鮮明ならしめた。即ちこれを具體的に謂ふとき、國民政府の決行した幣制改



革と、それが齎らした経済的統制への自然的実施、及びその意識的諸工作とがそれである。

勢ひこの大改革以來、現國民黨政權の獨裁強化の段階は著しき飛躍を示現したこと謂ふまでもない。

而してこの系統を牛耳るもの——宋子文及び孔祥熙は何れも蒋介石と姻戚關係を有してゐる點に、財政系の中央派に於ける地位と、及びその相互間に於ける或る種の微妙なる關係を暗示してゐるのであつた。

x

x

x

現南京政權を解剖するに當り、既に一般的常識とすらなつてゐるところの蒋介石對浙江財閥、(前述の如く浙江財閥に對する一般的認識には多くの誤謬が含まれてゐることは謂ふまでもないが)との關係は、所詮この財政系の形成過程及びその勢力乃至その存在の機能若くは意識的無意識的諸工作等々を平面的羅列式に描寫したものであつて、自然財政系の構成分子のなかには、浙江財閥と目される分子も亦すべて網羅されてをり、同時に上海に於ける特殊な存在である杜月笙一派(青帮の巨頭で杜月笙を主とする青帮の一派を指す)の如きも、最近この財政系の中に編入して好い程、密接な關係が結ばれて來た。

自然この系統を横に區分すると、財政部長を主として中國銀行總裁、中國銀行、交通銀行、通商銀行、四明銀行、中國農民銀行等の國家銀行若くは、プロック系銀行の實權者及び國貨銀行の如き財政部系統の銀行主腦者を始め、全國經濟委員會・建設委員會に屬する各實業家、乃至中國建設銀公司等の特種機關の實權者を擔ぐべきであらう。

因に全國經濟委員會に屬する實業家は次の各人であり、これは財政系に附隨する錚々たるものとされてゐる。

陳光甫(綿業統制委員會委員長) 葉喙堂(同常務委員) 曾養甫(蠶絲改良委員會委員長) 李銘(浙江實業銀行總經理) 錢新之、周作民(金城銀行總裁) 劉鴻生、吳鼎昌(現實業部長、鹽業銀行總理) 王曉籟、葉恭綽、榮宗敬、徐新六、劉瑞恒、陳伯莊。

x

x

x

孔祥熙 山西省、大谷縣の産、孔子七十五世の後裔と謂はれ、夫人宋霽齡は孫文未亡人宋慶齡蒋介石夫人宋美齡及び宋子文、宋子良の姉である。光緒二十七年清廷出使大臣李鴻章に隨行して米國に赴き留學生として止り、光緒三十二年オーバリン大學を卒業して更にエール大學に入り同校卒業後歸國して、山西で山西オーバリン大學を創設し、校長兼教授となつた。その後孫

文の革命運動に響應して北方に於ける革命運動に従事し、第一次革命に際しては、太古縣民政長及び新軍統制に擧げられ、民國成立後山西督軍閻錫山の顧問となつた。民國十年魯案善後委員會顧問となり、十二年渡日し、駐日支那青年會幹部に擧げられ、革命黨員の日本に亡命せるものを保護した。十三年孫文の命により廣東に赴き廣東財政廳長に任ぜられ、十四年孫文の北京に客死するや遺囑簽證の一人となり、十五年國民革命軍の北伐出師に従ひ、國民政府が武漢に移つた後、實業部長となつたが、後南京武漢の決裂後辭職して郷里に歸り、十六年國民政府の南京成立により、工商部長に任ぜられ、十七年四中全會後國民政府委員に推され、十八年國民黨第三期中央候補執行委員に選ばれ、十九年農礦工商の兩部が合併して實業部の組織を見るに至りて同部長に任ぜられ、二十年六月國民政府委員となり、十二月廣東、南京の合作による蒋介石の下野と共に辭職したが、のち又國民政府委員に擧げられ、二十一年外交委員會委員となり、四月各國實業の調査特使として派遣され、現在では國民黨第五期中央執行委員に擧げられ、同時に國民政府委員及び財政部長に就任し、行政院副院長を兼ねてゐる。

宋子文

江蘇省上海縣の産、孫文未亡人宋慶齡の弟、蒋介石夫人宋美齡の兄。支那有數の理財

家と稱へられてゐる。上海約翰大學に學び、次いで米國に赴き民國四年ハーバート大學を卒業後、コロンビア大學に入り、傍ら銀行兼務を實習した。歸國後一時漢治萍煤鐵公司 廣東交易所等に勤務したが、民國十二年廣東政府に投じ、英文祕書となり、十二年廣州に於いて中央銀行長に任ぜられ、十四年塵仲凱の暗殺ののち、廣東國民政府財政部長兼廣東省政府財政廳長、中央銀行總裁、鹽務稽核所長等に歴任。爾來國民政府の財政を一手に引き受け、屢次の内戦北伐には後顧の憂ひをなからしめた。十五年國民黨第二期中央執行委員、商民部長等に擧げられ、十六年國民政府委員、軍事委員會委員を兼任、國民政府の武漢移轉と共に武漢に入り、湖北省政府委員にも任ぜられたが、蒋介石の南京政府成立するや、南京に投じ、財政部長となつた。然るに當時左右兩派に容れられず、同年辭任し、次いで廣東政治分會委員、湖北省政府委員となり、武漢、南京の合作後、國民政府委員、中央黨部商民部委員に任ぜられ、十七年蒋介石の復職と共に、再び國民政府財政部長、中央銀行理事兼總裁となり、十八年國民黨第三期中央執行委員に選ばれ、十九年行政院副院長、中央政治會議委員に任じ、二十年廣東派から排撃せられて、蒋介石と共に下野し、國民政府委員、中央銀行總裁として上海に留つたが、二十一年蒋介石、汪精衛の合作なるに及び、出でて財政部長、行政院副院長に任ぜられ、二十一年汪精衛の行政

院長を辭するや同院長を代理しつつ、世界經濟會議には、國民政府を代表してこれに出席し、米國との間に於ける米麥借款に成功したと雖も、期待されてゐた米麥借款の結果が渺々しくなかつた等、結局責を負ふて辭任し、現在では國民黨第五期中央執行委員に擧げられ同時國民政府委員に任ぜられてゐるほか、政界の表面に出ず、たゞ米麥借款によつて創設した全國經濟委員會の常務委員兼委員長及び中國銀行董事長中國建設銀公司の實權者として全支那財界に君臨してゐる。

### 第三節 藍衣社の正體とその構成分子

一般的に傳へられてゐる説に従へば藍衣社とは、蔣介石中心の獨裁強化に對する實踐運動團體であり、その構成分子には急進的ファシストを網羅し乍ら、蔣介石を社長となし、鄭士秋、張治中、曾養甫、谷正倫、阮齊、徐會之、手炳文、鄧悌、花松甫、韓俊等を幹部に任じ、最も嚴重な組織をもつてゐるものゝやうであるが、著者にはこれらに關する何等の文献をも持合はさないため、所謂藍衣社なるものに對するその組織系統は勿論、實踐行動等について斷定的の敘述をなし得ない。

更に一部の説によれば「謂ふところの藍衣社は更に最初中國棒喝黨と稱する名稱の下に創設、(民國二十年頃)されたものであるが、支那政局の大變動と共に蔣介石政権の獨裁強化を目標として、その實踐的方面の役割を受持つために組織の擴大を計り、遂に現在の如く改造され、組織化されるに至つた」——ものと稱へられつゝあるのに對し、他の一面では次の如く

「藍衣社とは左様に組織的なるものでなく、單に黃埔系軍人を中心とする同窓會に過ぎず、軍隊内に於ける黃埔系の權勢を擴張とするのを目的とした團體でしかなかつたが、それが偶ま時流に投じ乍ら、ファッショ運動を標榜するに至つたものであり、その組織の發展につれて漸次、C・C團と相合流(寧ろC・C團に迎合)しつつ、C・C團の利用に任せるに至つた點に、その組織的價値が評價され出したのである」

とすら説くものすらなしとせない。この點に關し、曾て黃埔同學救國團と稱する黃埔軍官學校出身者中の汪精衛派によつて、蔣介石に對し次のやうな公開狀が發出されたことがあつた。

「昨年以來の外侮、内亂、火災、匪禍は、貴下の六年間に亘る專政の結果に外ならない。貴下

としては速かに下野して國民に謝すべきであるにも拘らず、却つて不良の分子を利用してファツシスト黨を組織せんとするは、上總理の遺囑に悖り、下同志の期待に背くものである。我等は貴下に對し左の諸項を質問せざるを得ない。(一)貴下は何故に黃埔同學を自己擁護に利用し革命を顧みざるや。(二)貴下は國民黨の領袖たるに拘らず何故黨外にファシスト黨を組織し、國民黨を破壊せんとするや。(三)三民主義の鼓吹には暴力政策を用ふべからざるに拘らず、貴下は何故に鐵血隊を以て民衆を壓迫するや。(四)貴下は皇帝となり、人民の富貴を極めんと欲するとも黃埔同學を利用し革命軍人の名を汚すこと勿れ。(五)若し革命救國のためファシスト黨を組織するといふならばよろしく抗日のために出兵すべきである。(六)ファシスト黨唯一の手段は暗殺にあるが貴下は三千の手兵を以て四億の民衆を悉く殺し得るものと思惟するや。(七)ファシスト黨の經費は一箇年百二十萬元に達すといふが貴下は江淮の細民が日々樹皮草根を常食とせる窮狀を顧念せることありや。(八)貴下はファシスト黨の組織を周知せずと謂ふも何故中央軍官學校の軍官特別研究班、教育總監及團警班に對してファツシヨ的訓練をなすや。(九)貴下はムツソリーニを敬慕するといふが、伊太利政府内部にはムツソリーニの親戚が充滿し、以てムツソリーニ家の天下たるの觀あらしめつゝありや否や。(十)貴下はファツシスト黨を敬慕す

るといふも、各國のファシスト黨は對外不抵抗主義を國民に強制しつゝありや否や」

而かも以上の公開狀と前後して、天津で發行する新聞「大公報」も亦、蔣介石に對して、「貴下はファツシスト黨を組織したとことであるが事實はどうであるか」との質問書を提出したことがあつた。然しながら、右の二質問に對し蔣介石は前者に向つては「余はファシズムは嫌ひである」と謂ひ、後者には次の如く回答した。

「中國革命の組織と方略とは、孫總理の定めた組織と方略とをもつてのみ、國民革命の使命を完成し得る。若し外國の革命方略に倣はんとし、中國の民族性に相反する組織を用ひんか、ただ革命の成功を期し得ないのみか、國家と民族も亦、これを許容しない。現在中國革命の失敗せる所以のものは、孫總理に背叛した反革命分子が國民黨固有の組織と方略とを破壊したからである。この固有唯一の革命組織を恢復せずして、ファツシスト黨の組織に倣ひこれを中國に強行せんとするは、共產黨が中國を赤化せんとするに異ならない。余は生きて中國々民黨員たり死しては黨鬼とならんのみ、中國革命の組織には國民黨の組織あるのみであり、中國革命の方略にも亦國民革命の方略あるのみである。これこそ中國革命完成に向つての唯一無二の捷徑